

F83

F83-To48-5ウ



1200500765413

トルストイ
米川正夫

ハヂ・ムラート

養徳社

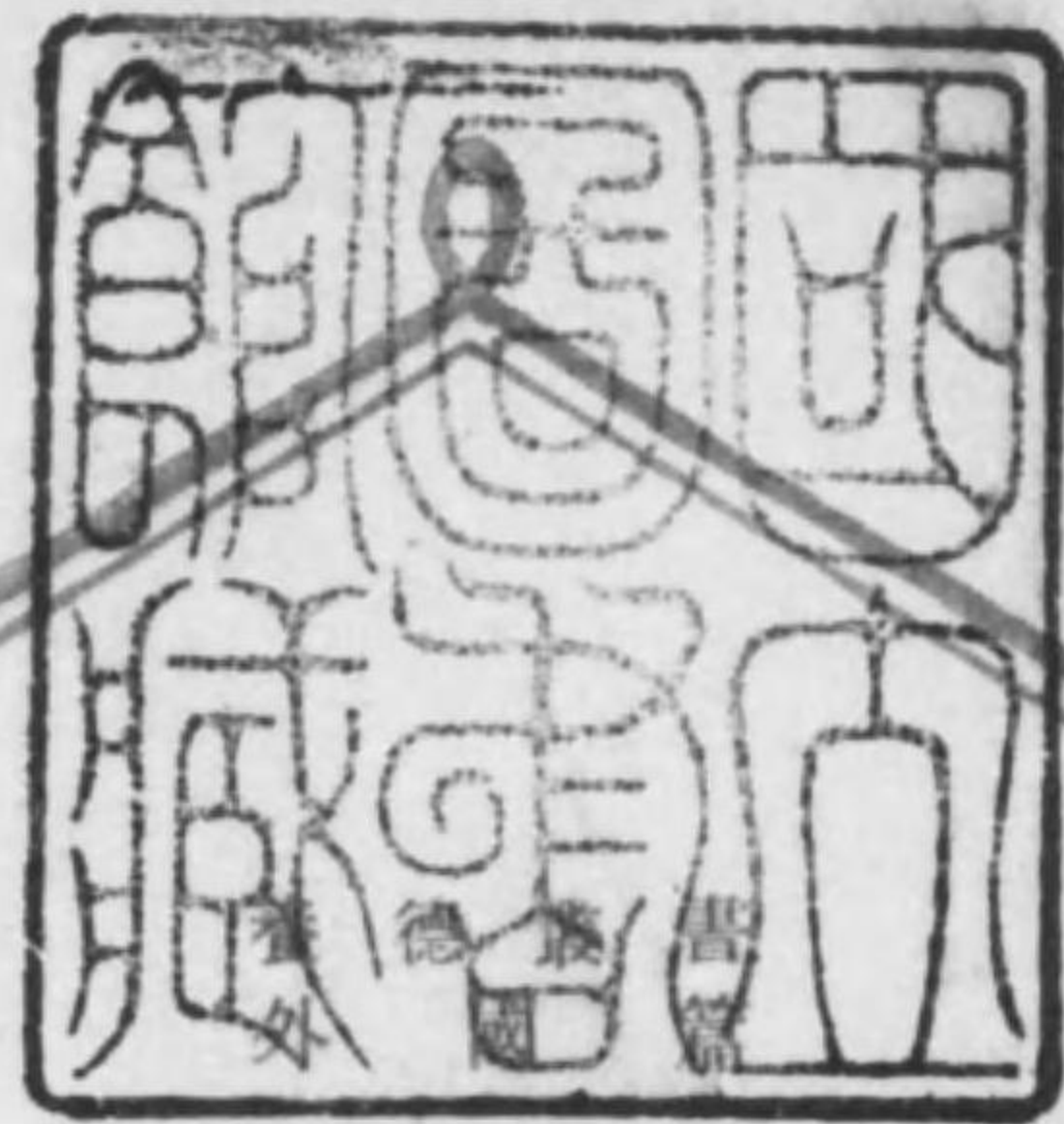


始



F83

To48-5



(1026)

ハヂ・ムラート

トルストイ
米川正夫





序

トルストイは高架索を主題として二つの作品を残してゐる。一つは『コサック』であり、他の一つは『ハチ・ムラート』である。前者は発表こそ少し遅れたが『幼年・少年時代』と殆んど同時に執筆せられたもので、若き日のトルストイが、その溢るゝばかりの生の力と、熱情的憧憬と、貪婪な探究精神をそのままに、主人公オレーニンの中に再現してゐて、如何にも文豪の青春の歌と呼ぶに相應はしい詩情が全篇に息づいてゐる。そこでは高架索の雄大な自然が、青年トルストイの内部生活のリズムに相應して、華やかに多彩な音楽を奏してゐるかの如くに思はれる。

それから約半世紀近く後れて書かれた晩年の『ハチ・ムラート』は、あらゆる點に於いてこれと對蹠的である。先づ表現手法から言つても、宗教的轉向を機としてトルストイが漸次練り上げて行つた簡素枯淡な筆觸が、こゝでは殆んど完璧の域にまで達して、『コサック』に聞かれたやうな南国の空氣を慄はすやうな熱情的な歌聲もなければ色彩豊かな自然描寫も浪漫的な夢もない。すべてが單純な嚴しい現實主義をもつて貫かれ、自然も詩的感激の源泉と言ふよりは人生行路に於ける無慈悲な荒々しい試煉か、もしくは殘忍な障害であるが如くに感じられる。そして主人公は空想と憧

儼に充ち溢れた二十歳の若人ではなく、夙くから闘争に依つて鍛錬せられ幾度か生死の境を潜つて来て、今や人生の危機に直面してゐる中年の武人である。しかも自己表現を好む傾向の著しいロシヤ・インテリならぬ、沈鬱寡黙な東方民族なのであるから、この作品を支配してゐる色彩や調子が深く沈潜した嚴肅みで統一されてゐるのは當然である。寔に『コサック』が青年期のトルストイの輝かしい自己表現であるのに對して、同じ高架索を題材にしたこの『ハチ・ムラート』は晩年のトルストイに取つて何か對立的な意義を有するのではないかと想像される。

この作品の主題はロシヤの高架索討征史から採つて來た一挿話であつて、様々な事情の累積のためにチレムマに陥り、遂に悲愴な最期を遂げたチェチェン族の英雄ハチ・ムラートの人間像を描くのが、作者の目的であるかの如く思はれるけれども、表面あくまで冷靜な客觀的態度で終始してゐるこの作品の底に、案外作者の最もインテリメイトな感懐が秘められてゐるやうに思はれてならない。實際、無抵抗主義の立場から一切の暴力や闘争を否定したトルストイが、戦争・掠奪・復讐・殺戮・裏切等を生活の根柢においてゐる半野蠻な好戰民族の心理に興味を抱いて、これを藝術の對象として選んだと云ふことは只事でない。

これに對して、トルストイがかゝる題材を取り上げたのは、單に帝政ロシヤの侵略政策に對する抗議の意味で、被壓迫民族の獨自な人間性や眞味を世に示さうとしたに過ぎない、と云ふ人がある

かも知れない。しかしさうした政治的パンフレットの動機から出たものであるとしたら、トルストイがこの創作を思ひ立つた一八九六年頃から一九〇四年頃まで、およそ八年のあひだ間歇的ではあるけれども、資料の蒐集に絶えず苦心を續け、幾度となく稿を改め、推敲に推敲を重ねて、現在見るやうな完成味に到達したにも拘らず、なほ死後まで發表を決し兼ねた程の異常な愛着は、抑々何をもつて説明すべきであらう。

私はそれに對してかう答へたい。トルストイをかくまで強く惹きつけたのは、ハチ・ムラートの悲劇性である、と。幾度か死に直面して不撓不屈の勇氣と意力を練成し、同民族の尊崇を贏ち得た一箇の英雄が、元首の嫉視から不當の迫害を受け、ために山を下つて、ロシヤ軍に投じたが、敵の手に擁せられてゐる家族を思ふ不安と、ロシヤ當局の誠實みのない態度は、遂に彼をして再び山に走らせるに至つた。しかし最初から彼の本心に疑念を挟んでゐたロシヤ側の追跡に遭ひ、必死の抵抗もその甲斐なく途上に最期を遂げる。この剛毅な異種族の武人が經驗した苦悶の相は、宗教と藝術、信仰と家庭等、幾多の矛盾相剋を深く秘めて、一旦踏み出した人類指導の道を遮二無二押し進まうとした偉人トルストイの苦悶に、一脈相通するものがある。無論、内容の上からではなく、非凡な人間の孤獨にして嚴肅な苦悶といふ意味の相似なのである。トルストイはハチ・ムラートの悲劇性トラスティムに肉親的な或るものを感じて、ちつとそれに凝視し始めたに相違ない。そしてこの悲劇の主人公が

種族を異にする東方人であり、寡黙な山民であつたが故に、その魂の祕密は暗い淵の如く彼を牽引し呼び招いたことであらう。

しかしトルストイは恐らく、かう云つた氣持を自分自身にさへ隠さうとしたものと想像される。だからこそ、彼がハチ・ムラートの魂に沈潜すればする程、その表現手法はいよ／＼客觀的となり、そのタッチは益々淡々たる素描の形を採つて行つたのである。がこの素描ではなく、偉大な藝術家が人知れず自己の魂を吹き込んだものであるから、單純な線を重ねて行く中に不思議な生氣が盛り上つて來て、鮮明な悲劇的人間像を讀者の腦裡に鏤りつけるのである。

トルストイは曾てもう一人の非基督教的、異教的人生觀を體現する不滅の典型を創造した。それは矢張りかの『コサック』の中のエロシカ小父である。けれどもエロシカはコサック、即ち元を尋ねれば同じ露西亞人であるが故に、その魂は單純善良であり、従つてその異教主義もホームア的に明るく健康な樂天主義となり、生活肯定の精神となつてゐるが、ハチ・ムラートは高架索の山民であり眞の異教徒であるから、そこには暗い宿命的な悲劇性が蔽ひ被さつてゐる。この點に於ても、トルストイの青春期と晩年の創造に相應しい對照が見出されるではないか。



・ムラート

わたしは野を通つて家路を辿つてゐた。ちやうど眞夏のこと、草場はもう刈りとられ、もうそろ／＼裸麥の取り入れが始まる時分であつた。

毎年この頃には、さまざま美しい花の取り合はせが見られる。赤や、白や、ばらいろなどの、ふさ／＼した薫り高いクローバー、氣持ちのいいさつぱりした匂ひを放つ、蕊の眞つ黄いろな、乳のやうに白いデージー、蜜のやうな薫りを含んだ黄色い野芥子、チューリップのやうに高く頭を持ちあげた、白と薄紫の釣鐘草、地を匍ひまはる鴉豌豆、黄、赤、ばらいろのスカビオーズ、ほんのりとばら色を帯びたうぶ毛を生やし、あるかないかの氣持ちのよい匂ひを立てる、瑠璃いろをした行儀のよい車前草、陽を受けた時や、咲きたての若々しい時には、濃い淺黄いろをしてゐるが、夕方や凋落前には水いろになつて、赤みがかつて行く矢車草、華奢でしをれやすい、アメンドのやうな匂ひのする晝顔の花。

わたしはさまざまの花を摘んで、大きな花束を作りながら、家路へ歸つてゐた。と、路ばたの溝の中に、いまを盛りと咲いてゐる美しい眞紅の薊を見つけた。それはこのあたりで『韃靼

草』と呼んでゐる種類のもの、草を刈る時にも、氣をつけてよけるやうにして、もしひよつと間違つて刈り取つたら、手を刺されないやうに、乾し草の中から投げ捨てるやうにしてゐる。わたしはこの薊を摘み取つて、花束のまん中へ入れようといふ氣を起こした。わたしは溝の中へおりて、花の心しんに食ひ入りながら、氣持ちよくもの憂げに寝てゐる、毛むくじやらな土蜂を追ひはらつて、花を摘みとりにかかつた。けれど、これは非常に骨の折れる仕事であつた。わたしは手を手巾で巻いてゐたけれど、その布ぬいごしに、莖が四方八方から針をたてるばかりか、全體にびつくりするほど岩乗に出來てゐるので、わたしはその纖維を一本づつ千切つて行きながら、五分ばかりも苦心したほどである。やつとわたしが花を摘みとつた時、莖はもうすつかりぼろ／＼になつて、花も前ほど新鮮な美しさを持つてゐなかつた。そればかりでなく、この花はあまり無骨でこつ／＼してゐるので、一束たばに集めたほかの華奢な花にうつりが悪かつた。わたしはあるべき所であれば美しかるべき花を、むなしく傷つけた事を悔みながら、そのまゝ投げ捨てて了つた。

「しかしなんといふ精力だらう、なんといふ生の力だらう。」この花を摘みとるために費やした努力を想ひ起こしながら、わたしはかう考へた。「自分の生命を守るために、なんといふ努力をしたものだ。そして、なんといふ高い價でそれを賣つたことだらう。」

わたしの家へ向かふ道は、新しく鋤き返されたばかりの、黒土の畑の中に通じてゐた。この畑はむかう一年、やすむ事になつてゐるのであつた。わたしは埃つぽい黒土の道を登つて行つた。鋤き返された畑は地主の所有に屬して、非常に大きなものであつたから、わたしの左右も、登りになつた前方も、鋤き返されたばかりで、細かく碎かれてゐない黒土のほか、なにか一つ目に入るものがなかつた。耕作はよく行き届いてゐて、畑いちめん植物らしいものは草つば一つ見あたらず、見るかぎりたゞ黒々としてゐた。

「人間といふ奴は、なんといふ破壊的な動物だらう。自分の生活を支へるために、種々さまざま生物や植物を、どれだけ亡ぼしたか知れない。」この死んだやうに黒い畑の中に、なにか生きたものを見つけ出さうと、無意識的に注意しながら、わたしはかう考へた。行く手にあたる道路の右側に、なにか灌木のやうなものが見えた。そばに寄つて見ると、それはわたしが空しく摘み捨てた、例の『韃靼草』なのであつた。

『韃靼草』の株は三本の大きな莖から出来てゐた。その一本は折り取られて、まるで切り落とされた腕のやうに、枝の残りがにゅつと突き出てゐた。あとの二本は、めい／＼一つづつ花をつけてゐた。この花はかつて赤い色をしてゐたものに相違ないが、いまではどす黒くなつてゐる。一本の莖は途中から折れて、半分は先に汚い花をつけたまゝ、下の方へぐつたり垂れてゐ

た。残りの一本は、まつ黒な泥に汚れてはゐたけれど、それでもちやんと上を向いて立つてゐた。見上げたところ、この株ぜんたいが車の轍にかかつて、その後しばらくしてから、起き上がつたものらしい。そのためにすこし横へかしいでゐたが、しかしとにかく立つてゐた——まるで體の一部を切りはなされ、腸を露出し、片手をもぎ取られ、片目を抉り出されたやうな具合であつたが、それでもやはり毅然と立つたまゝ、周囲の同胞をことごとく亡ぼしつくした人間に、降服しようとしないのである。

「なんといふ精力だらう。」とわたしは考へた。「人間はすべてを征服して、幾百萬の草を滅ぼし盡くしたが、この草だけはまだ屈服しようとしないので。」

と、わたしはすつと前に高架索で起こつた、或る出来ごとを思ひ出した。その一部分は自分で見たものであり、一部分は目撃者から聞いたものであり、さらに一部分は自分で想像したものである。わたしの追憶と想像の中に組み立てられたこの出来ごとは、次ぎのやうなものである。

—

それは一八五一年の終りのことであつた、寒い十一月の夕方、ハチ・ムライトは蒸りの高いキジヤーク（馬糞を乾しかためた煉瓦状の燃料）の煙りを立ててゐる、マフケート村へ馬をのり入れた。それは露西亞領か

ら二十里^{エルス}ほど離れた、まだ歸順しないチエチエン人の部落であつた。

をつたいまムエチン(回々教の伴僧、朝夕教會の尖塔にのぼつて、歌をうたひ、一般民衆のために祈禱の時刻を報ず)の緊張した歌聲がやんだばかりで、キシヤークの煙りの匂ひがしみ込んだ、清らかな山の空氣の中には、蜜蜂の巢のやうにくつき合った狭くろしい小家^{ヤウヤウ}をさして、牧場からちり／＼に別れて歸る牛の唸り聲や、羊のめえ／＼と鳴く聲が聞こえた。そして、その間々には、何やら言ひ争ふ男の喉にからんだやうな聲や、下の方にある泉に集まつた、女子供の聲などが聞こえてゐた。

このハチ・ムラートは、さまざまな勳功で名を知られたシャミールの總督であつた。彼は數十人の部下に周圍を護衛されながら、自分自身の旗を持たなければ、決してそとへ出ないやうな身分であつたが、今は頭巾とブルカ(フェルト製の陣羽織に似た外套)に身を包み、その下から銃を覗かせながら、たゞ一人だけ部下を連れて、出来るだけ目だたないやうに心をくばり、途中で出あふ村民の顔を、隼のやうな黒い目で覗きこみながら、馬を進まして來たのである。

村のまん中まで入りこむと、ハチ・ムラートは廣場へ出る本通でなしに、右の方のせまい横町へまがつた。横町の角から二軒めに當つて、小高く盛り上がった土の中へ、掘りこまれたやうな小家^{ヤウヤウ}のそばまで來ると、彼はあたりを見まはしながら立ちどまつた。小家の庇の下には誰もゐなかつたが、屋根の上には、新しく塗られた粘土の煙突のかけに、毛皮外套にくるまつた人間が寝てゐた。

ハチ・ムラートは屋根に寝てゐる人間を、鞭の柄でちよつと突ついて、舌を打ちならした。毛皮外套の下から、夜の頭巾をかぶつて、垢ばかりのする古い下著をきた老人が、ひよつこり身を起こした。

老人の目は睫毛がなくて、赤くじめ／＼してゐた。彼はくつき合つた臉を離すために、二三度しよぼしよぼと瞬きした。ハチ・ムラートはいつも決まりの、『セリヤーム、アレイクーム(今晚)』を言つて、自分の顔をあらはした。

『アレイクーム、セリヤーム。』老人はハチ・ムラートに氣がつくと、齒のない口でにやりと笑ひながら、かう言つた。そして、瘦せた足で起ち上がると、煙突のそばに置いてある上靴に、その足を突つこみ始めた。上靴には木の踵がついてゐた。それをはき終ると、彼は急がず悠々と、羅紗の表をつけてない、皺くちやになつた毛皮外套の袖に手を通して、屋根に立てかけられた梯子を、うしろ向きにおり始めた。外套をきる間も、梯子をおりる間も、老人は日焼けのした皺だらけの細い頸に、おぼつかなく載つかつた頭を振りながら、のべつ齒のない口をもぐ／＼させてゐた。地べたの上へおると、彼は甲斐々々しく、ハチ・ムラートの乗つてゐる馬の手綱と、右の鐙を抑へた。けれど、す早く自分の馬から飛びおりた、敏捷な逞しいハチ・ムラートの部下が、老人を押しつけてこれに代はつた。

ハチ・ムラートは馬からおりて、心持ちびつこを引きながら、庇の下へ入った。戸の中からは十五ばかりの男の子が、足ばやに出迎へた。そして、熟した黒梅のやうに光る目を、驚いたやうに二人の客の方へそよいだ。

『寺へ走つて行つて、親父を呼んで来い。』と老人は言ひつけた。そして、ハチ・ムラートの先を越しながら、きい／＼軋むかるい戸を、小家の中へと押しあけた。ハチ・ムラートが入らうとする途端、黄色い襦袢の上に赤い胴着をまとひ、青いだぶ／＼したすぼんをはいた女が、クッションを持つて奥の戸口から出て来た。あまり年は若くなく、瘦せて細つそりしてゐる。

『ようこそお出でくださいました。』と彼女は言つた。そして、腰を二重に折りながら、正面の壁ぎはにクッションを並べて、客のために席を整へはじめた。

『子供たちも達者でゐるだらうな。』とハチ・ムラートは答へて、外套と、銃と、劔をはづすと、それを老人に渡した。

老人は銃と劔を注意ぶかく釘にかけた。その傍には、壁の上でびか／＼光つてゐる二つの大きな盤に挟まれながら、この家の主人の武器がかかつてゐた。壁はなめらかに塗られて、眞つ白に化粧されてゐた。ハチ・ムラートは、肩にかけたピストルの具合をなほして、壁ぎはに並べられたクッションに近づいた。そして上著の前をかき合はせながら、その上に腰をおろした。老人はあらは

な踵を揃へて、その傍に坐ると、目を閉ぢて、掌を上^にに両手をさし上げた。ハチ・ムラートも同じことをした。それから二人は祈禱を唱へ終ると、両手で顔をつるりと撫でおろして、顎髭の先で掌を合はせた。

『ネ、ハバール？』とハチ・ムラートは老人に尋ねた（つまり、何か珍らしい話はないか、といふ意味である）。

『ハバール、ヨーク（何も珍らしい事はありません。）』老人は死んだやうな赤い目で、ハチ・ムラートの顔でなく、胸のへんを見つめながら、かう答へた。『わたくしは養蜂所に住んでをりますので、今日は悴の様子を見に来たばかりなのでございます。悴の方は存じてをります。』

ハチ・ムラートは、老人が自分の知つてゐる事も、ハチ・ムラートの知らなければならぬ事も、話したくない氣持ちであるのを悟つたので、かるく頷いたまゝ、それ以上、聞かうとしなかつた。『なにも變はつた、うまい話はござりませんよ。』と老人は口を切つた。『たゞ珍らしい事と言つたら、兎どもが寄り集まつて、どうしたら鶯が追つばらへるか、相談してゐるくらゐのものでございます。ところで、鶯どもは後から後からと、しじろ兎を引き裂いてをります。つい先週も、露西亞の犬めらがミチーツキイで、乾し草を焼き拂つて了りました。本當に、八つ裂きにしても飽き足りない奴らでございます。』と老人は毒々しげにしは嘎れた聲で言つた。

ハチ・ムラートの部下が入つて来た。主人のハチ・ムラートと同じやうに、逞しい足を大腿に擴げて、土間の上を柔かく歩きながら、外套を脱ぎ、銃と劔をはづした。そして、たゞ短劔とピストルを身につけただけで、ハチ・ムラートの武器がかかつてゐるのと同じ釘に、自分もそれらの品々を掛けた。

『あれは誰でござりますか？』入つて来た男を指さしながら、老人はハチ・ムラートに尋ねた。

『わしの部下で、エルダールといふのだ。』とハチ・ムラートは言つた。

『なるほど。』と老人は言つて、ハチ・ムラートの傍に敷いた毛氈を指さしながら、エルダールに著座を乞うた。

エルダールは足を組み合はせて坐つた。そして、無言のまま美しい羊のやうな目を、喋り立てる老人の顔にじつとそゝいだ。老人は、先週部落の若いものが二人の兵卒を捕虜にして、一人をエデノにゐるシャミールのところへ送つた、といふ顛末を話して聞かせた。ハチ・ムラートはちよいちよい戸口へ目をくばつて、そのもの音に聞き耳を立てながら、そはくした様子でその話しを聞いてゐた。小家の前の庇の下で足音がしたと思ふと、戸がぎいと軋んで、主人が入つて来た。

小家の主人のサドーは、小さな顎髭を生やした、鼻の長い、四十ばかりの男であつた。さつき父親を迎ひに行つて、いま一緒に小家へ入つて来ると、戸口に腰をおろした、十五になる息子と同じ

やうに、まつ黒な目をしてゐたけれど、しかしそれほどの光りはなかつた。主人は戸口で木靴をぬぐと、長く剃刀を入れない黒い毛のぼうくした後頭へ、古い摺り切れたコサツク帽をすらしながら、さつそくハチ・ムラートの前に蹲んだ。

彼は老人と同じやうに兩眼を閉ぢ、掌を上にもむけて兩手をさし上げ、祈禱を唱へ終ると、兩手で顔をつるりと拭いて、さてそれからやつと話しを始めた。彼の話しによると、生かさうと殺さうと構はない、とにかく、ハチ・ムラートを取り抑へろ、といふ命令がシャミールから届いて、つい昨日その使者が歸つたばかりである、ところでみんなは、シャミールの言ひつけに背くことを恐れてゐるから、用心しなければならぬ、との事であつた。

『わたくしの目の黒いかぎり、』とサドーは言つた。『わたくしの家の中で大切な客人に、誰ひとり手を出させる事ちやありません。しかし、そとへ出た時にはどうするか？ 一思案しなくちやなりません。』

ハチ・ムラートは注意ぶかく聞きながら、もつとも、もつとも、といふ風に頷いてゐたが、サドーが話し終つたとき、かう言つた。

『よろしい。ところで、これから露西亞人のところへ、手紙を持たしてやらなければならぬ。その使ひにはわしの部下が行くけれど、道案内が一人ほしいんだが。』

『弟のバータをやりませう。』とサドーが言った。『バータを呼んで来い。』と彼は息子の方へ振り向いた。

少年はばね仕掛けのやうに、勢ひよく飛び上がつて、両手を振りながら、急ぎ足に小家から出て行つた。十分ばかりたつてから、彼は筋ばつた、足の短い、黒く日に焼けたチェエン人と一緒に引き返した、このチェエン人は方々毛が摺り切れて、袖が總のやうにぼろ／＼さがつた、黄色い上著をきて、だらしなくすれた黒い長靴をはいてゐた。ハチ・ムラートは新來の人に挨拶すると、やはり一口もむだを言ひたくないといふ調子で、かう切り出した。

『わしの部下を露西亞人のところへ案内してくれるか？』

『いたしますとも。』とバータは快活に答へた。『なんでもいたします。道案内にかけたら、わたしに敵ふチェエン人は、一人だつてありやしません。ほかの者は、たとへ出掛けて行くにしても、たゞいろんな事をお約束するだけで、なんにも出来るんぢやありません。ところが、わたくしならちやんと出来ます。』

『よし、よし。』とハチ・ムラートは言った。『駄賃にはこれだけやらう。』彼は指を三本だした。

バータは、分かりましたといふやうに、一つ頷いたが、自分は金が欲しいのぢやない、一身の名譽のために、ハチ・ムラートの役に立ちたく思つてゐるのだ、と言ひ添へた。この山部地方では、

露西亞の豚を撃ち破つた英雄として、ハチ・ムラートを知らないものはなかつたのである。

『よろしい。』とハチ・ムラートは言った。『繩は長い方がいいし、話しは短いにかぎると言ふからな。』

『ちや、黙りませう。』とバータは言った。

『アルゴン川の曲がり角の崖向かうに森があつて、その中の小廣いところに、にほが二つ立つてゐる、知つとるかな？』

『知つてをります。』

『あすこでわしの部下が三人、馬に乗つて待つてをる筈だ。』とハチ・ムラートは言った。

『アイヤ。』バータは頷きながら、かう言った。

『そこで、ハン・マゴーマに尋ねるがよい。ハン・マゴーマは、何をして、どんな風に言へばよいか、ちやんと承知しとる、その男を露西亞の大將、チロンツォーフ公爵のところへ案内するんだ。出来るかな？』

『出来ます。』

『連れて行つて連れて歸るのだ。出来るかな？』

『出来ます。』

『連れて行つたら、森の中へ歸つて来い。わしはそこで待つとるから。』

『萬事承知いたしました。』とベータは言つて起ち上がり、両手を胸にあてて出て行つた。

『それから、もうひとり使ひをゲーヒへやらなけりやならん。』ベータが出て行つたとき、ハチ・ムラートは主人にかう言つた。『ゲーヒでは、かういふ風にするんだ。』彼は上著の薬筒入れの一つに手をかけて、かう言ひかけたが、小家へ入つて来る二人の女を見ると、すぐに手をおろして、口を噤んだ。

一人はサド一の妻で、例のクッションを並べた、痩せた年増であつた。もう一人はごく若い娘で、赤い幅びろすぼんをはき、緑いろの下著をまとひ、銀貨をつなぎ合はせた飾りで、胸をいちめんに隠してゐた。痩せた兩肩のあひだに垂れてゐる、長くはないけれど、太い堅さうな漆黒の編みさげ髪の端には、一ルーブリ銀貨がぶらさげてあつた。父や弟と同じ黒苺のやうな目は、いかつく見せようとしてゐる若々しい顔に、さも陽氣らしく輝いてゐた。彼女は客の方を見なかつたけれど、その存在をはつきり感じてゐた。

サド一の妻は低い圓卓を運んでゐた、その上には茶と、ピリギーシユと、バタをつけた薄餅と、チーズと、チュレーク（うすく延ばした麵麩）と蜂蜜が載つてゐた。娘は盥と、水いれと、手拭ひを持つてゐた。

サド一とハチ・ムラートの兩人は、女たちが踵のない柔かい赤革の靴で、音のしないやうに動きまはりながら、運んで来たものを客の前に並べてゐる間、じつと押し黙つてゐた。エルダールは例の羊のやうな目を、自分の組み合はした足の邊に落としたまゝ、女たちが小家の中チエルクリヤにゐる間ぢう、彫像のやうに身うごきもしなかつた。二人の女が出て行つて、その柔かい足音が戸の向かうにすっかり消えて了つたとき、エルダールは始めてほつとしたやうに、吐息をついた。ハチ・ムラートは、上著チエルクリスカの胸についた薬筒入れの一つから、そこに差しこんであつた銃丸を取り出して、その下から筒形に巻いた書きつけを抜き出した。

『悴に渡してくれ。』書きつけを見せながら、彼はかう言つた。

『ご返事はどちらへ?』とサド一は尋ねた。

『お前のところへ。そして、お前からわしに届けて貰はう。』

『承知いたしました。』とサド一は言つて、自分の上著の薬筒入れへ、書きつけを押しこんだ。それから水入れを把つて、盥をハチ・ムラートの方へ押しやつた。ハチ・ムラートは下著の袖をたくし上げて、筋肉の發達した白い腕を、手頸の上まであらはしながら、サド一が水入れからそゞぎ出す、冷たく澄んだ水の下へさし延ばした。ごはくした清潔な手拭ひで両手を拭き終ると、ハチ・ムラートは喰べものの方へ摺りよつた。エルダールも同じやうにした。客が食事をしてゐる間、

サドーはその前にじつと坐つて、幾度もその來訪を謝した。戸口に坐つてゐた男の子は、例の輝かしい黒目をハチ・ムラートから離さないで、にこ／＼笑つてゐた。それはこの微笑によつて、父の言葉に相槌を打つやうな具合であつた。

ハチ・ムラートは、一晝夜以上、なに一口口へ入れなかつたにも拘らず、たゞ麵麩とチーズをすこし喰べたばかりである。彼は刀の小柄を抜いて、それで蜜をしゃくり取ると、麵麩の上に塗つた。

『わたくしどもの蜜は上等でございます。今年は近年にない蜜の出来でござりました。たくさん採れましたし、味もよろしうござります。』ハチ・ムラートが自分の蜜を喰べたのに、満足したらしい様子で、老人はかう言つた。

『ありがたう。』とハチ・ムラートは言つて、喰べものの傍から身を引いた。エルダールはもつと喰べたかつたのだけれど、主人と同じやうに食卓から離れて、ハチ・ムラートに鹽と水さしをすゝめた。

サドーはハチ・ムラートを家へ入れるのが、命がけの冒険だといふ事を知つてゐた。シャミールがハチ・ムラートと不和になつて以來、ハチ・ムラートを家へ迎へ入れたものは、死刑に處すといふ命令を、チュチニヤの住民一同に發したからである、彼はいつ何どき村のものが、この家にハチ・ムラートのゐる事を嗅ぎつけて、引き渡しを要求するかも知れない、といふ事を知つてゐた。け

れど、それは少しもサドーを當惑させなかつたばかりか、かへつて彼を喜ばせたのである。サドーはたとへ命がけの危険を冒しても、この客人を保護するのが、自分の義務であると考へた。そして、自分が當然なすべき事をしてゐるのだと思ふと、われながら嬉しくもあれば、得意でもあつた。

『あなたがわたくしの家にいらつしやる間は、そしてわたくしの首が肩についてゐる間は、誰もあなたに指一本さす事ぢやございません。』

彼はハチ・ムラートに繰り返しかう言つた。

ハチ・ムラートは彼の輝かしい眼を見て、それが本當だといふ事を悟ると、やゝもの／＼しい調子でかう言つた。

『いや、お前は喜びと命を授かるだらう。』

サドーは無言のまゝ兩手を胸へ押しあてて、このありがたい言葉に對する感謝の意を示した。

小家の鎧戸を締めて、暖爐に薪を入れると、サドーはかくべつ愉快な興奮した氣持ちで、客間から出て行つて、家族一同が住んでゐる部屋へ入つた。女どもはまだ睡らないで、自分の家の客間に泊まつた危険な客人のことを、ひそ／＼話し合つてゐた。

丁度その夜、ハチ・ムラートが泊まつた村から二十里エルスグーはなれてゐる、ブズドギーゼンスクの前衛要塞では、下士に引率された三人の兵士が、シャフギリンの門から堡壘を出た。彼らはその當時高架索カウカサスに勤めてゐた兵士たちの風に習つて、毛皮の半外套に同じものの帽子をかぶり、うすい外套を巻いて肩にかけ、膝から上まである深い長靴をはいてゐた。彼らは銃を擔いで、はじめ街道づたひに進んでゐたが、やがて五百歩ばかり行くと、道を横にそれた。そして、落ち葉を靴でかさく、鳴らしながら、二十歩ばかり右に進むと、黒い幹が闇の中に見すかされる、一本の折れた鈴懸ツツジのそばで立ちどまつた。大抵いつもこの鈴懸ツツジの木を目じるしに、秘密偵察に派遣されるのであつた。兵士らが森の中を歩いてゐる間ぢう、木々の梢を傳つて走つてゐるやうに見えた燦爛たる星の群れは、いま素裸な枝の間で鮮かに輝きながら、じつと落ちついて了つた。

『ありがたい、乾いてるぞ。』下士のパノフは、銃剣つきの長い鐵砲を肩からおろしながら、かう言つた。そして、がちやりと音をたてながら、それを鈴懸ツツジの幹に立てかけた。三人の兵士も同じやうにした。

『やつぱりさうだ——なくしたんだ。』とパノフは腹だたしげに呟いた。『忘れて來たのか、それとも途中で落つことしたのかな。』

『何を捜してるんです？』と兵士の一人が元氣のいい、快活な聲で尋ねた。

『パイプさ——どこでなくしたのか、くそいま〜し〜。』

『吸ひ口は無事ですかね？』と元氣のいい聲が尋ねた。

『吸ひ口は、そら、この通り。』

『ぢや、いきなり地べたへさし込んだら？』

『ふむ、どうしてそんな事が。』

『なに、そんな事は造作なくして上げますよ。』

秘密偵察ちう喫煙は禁じられてゐたが、しかしこの秘密偵察は、ほとんど秘密なものではなくて、むしろ一種の前哨にすぎなかつた。それはたゞ山民がよく以前やつたやうに、武器を秘密に運んだり、要塞へむけて發射したりしないやうに、たゞそれだけの目的で派遣されてゐるのであつた。したがつてパノフは、喫煙の樂しみを控へなければならぬ、とも考へなかつたので、快活な兵士の提案に賛成した。快活な兵士は衣囊ウエストからナイフを取り出して、地面を掘りにかかつた。小さな穴を掘り上げると、周りを綺麗にならして、それに吸ひ口を取りつけた。それから穴の中へ煙草をつめて、ぐつと押しつけた——これでパイプが出来あがつたのである。マウチがばつと燃え上がつて、その一瞬間、腹ばひになつてゐる兵士の、頬骨のはつた顔を照らし出した。吸ひ口がひら〜と鳴つて、パノフは安煙草の燃えつく快い匂ひを感じた。

『うまく行つたかい?』と彼は起ち上がりながら言つた。

『でなくつてどうしますね。』

『偉いぞ、アヴチェーフ、どうもはしつこい奴だ。ちや、どれ〜。』

アヴチェーフは口から煙りを吐きながら、パノフに場所を譲るために、ごろりと横にころがつた。パノフは腹ばひになつて、吸ひ口を袖で拭いたのち、一生懸命に吸ひはじめた。

思ふ存分すつて了ふと、兵士らの間に話しがはずんで來た。

『なんでも中隊長が、また箱の中へ手を突つこんださうだぜ。歌留多で負けたもんだからさ。』と一人の兵士が大儀さうな聲で言つた。

『なに返すよ。』とパノフが言つた。

『そりやもう立派な將校ですからね。』とアヴチェーフは相槌を打つた。

『立派な將校さ、立派な將校さ。』この話を持ち出した男は、暗い調子で言葉をついだ。『おれの考へちや、ひとつ中隊のものがあの人と、しつかり話しをして見なくちやいけないよ——もし本當に出したとすれば、幾ら出したのか、そしていつ返すのか、それをはつきり聞かしてくれつてさ。』

『そりや中隊ぜんたいの考へ通りだよ。』とパイプから口をはなしながら、パノフは言つた。

『そりやもう、組合は大きな人間みたいなものだからね。』とアヴチェーフがまた相槌を打つた。

『そろ〜燕麥も買はなくちやならないし、春が近くなるから、長靴も用意しなくちやならんといふ譯で、さし向き金が入り用なんだが、あの人を取り出したとすると……』と不平家の兵士はどことまでも言ひはつた。

『だからさ、中隊ぜんたいの考へ通りにすると、言つてるぢやないか。』とパノフは繰り返した。

『なにも始めての事ぢやあるまいし——使つたつてまた返すよ。』

その當時高架索ではどの中隊も、自分で選抜した委員の手を通して、ぜんたいの會計を管理してゐた。國庫から一人前六ルーブリ五十カペイカ支給されて、自給自足をしてゐたのである。キャベツを植ゑたり、乾し草を刈つたり、隊の荷車をそなへつけたり、隊の馬が肥えてゐるのを自慢したりしてゐた。ところで、隊の金は一定の箱の中に收めて、その鍵は中隊長があづかつてゐたので、そのために中隊長が箱の中から金を借り出すといふ事も、珍らしくないのであつた。今度もさういふ事があつたので、兵士らはその話をしてゐるのであつた。ニキーチンといふ陰鬱な兵士は、中隊長からはつきりした説明を要求しようと言つたが、パノフとアヴチェーフは、そんな必要を認めなかつた。

パノフのあとで、ニキーチンも煙草を吸つた。そして外套を下に敷きながら、木によりかかつて坐つた。兵士らは黙りこんで了つた。たゞ彼らの頭の上で、木々の梢を動かす風の音が聞こえるは

かりであつた。不意に、この絶え間のない静かな葉ずれの合ひ間に、山犬どもの吠えたり、唸つたり、鳴いたり、騒いだりする聲が聞こえた。

『どうだ、畜生、あのさうくしく鳴き立てる事は。』とアヴチエーフが言つた。

『ありやお前のことを笑つてるんだよ、お前の面が曲がつてるとよ。』ともう一人の兵士が、小露西亞なまりの細い聲で言つた。

またあたりがしんとあつた。たゞ風が木の枝を揺すぶつて、星を隠したり見せたりするばかりであつた。

『ときに、どうですね、アントーヌイチ。』不意に快活なアヴチエーフが、かうパノフに問ひかけた。『あなたなどでも、つまらない氣がする事がありますかね。』

『そんな事があるものか。』とパノフは氣のななさうな聲で答へた。

『ところが、わたしはどうかすると、どうもつまらなくつて、つまらなくつて、いつそ死んで了はるか、と思ふ事があるくらゐですよ。』

『貴様なにを言つてるんだ！』とパノフは言つた。

『その時わたしは、ありたけの金を飲んで了ひましたよ。それといふのも、みんなつまらないからなんですよ。ふいと急に變な氣になつて、くそつ、ぐでんぐでんに酔つぱらつてやれ、とから思つ

たんですよ。』

『酒を飲むと、かへつていやな氣になる事があるもんだよ。』

『そりやさうですが、ほかに身の置き場がないんですからね。』

『だが、どうしてさうつまらなくなるんだい？』

『わたしですかね？ そりや家が戀ひしいからですよ。』

『なにかい、裕福な暮しでもしてゐたのかい？』

『別に裕福な暮しといふ譯ちやありませんが、なに不自由なくやつてゐましたよ。相當に暮らしてゐましたよ。』

それからアヴチエーフは、これまで幾度となくこのパノフに話した事を、またもや話しはじめるのであつた。

『實のところ、わたしは兄貴の身がはりに、自分の好きで出かけたんですよ。』とアヴチエーフは話した。『兄貴にや子供が三人もあつたけれど、わたしはほんの嫁を貰つたばかりなんで、お袋がわたしに行つてくれと口説くんですよ。そこでわたしは、よし行つてやれ、おれの深切を思ひ出してくれる事もあるだらう、とから思ひましてね、旦那のところへ出かけて行つたのです。家の旦那はいい人でしてね、そりや感心だ、行くがいいと言つてくれました。かういふ譯で、わたしは兄貴の

身がはりに隊へ来たんですよ。』

『なに、結構なことぢやないか。』とパノフは言った。

『ところがどうせう、アントーヌイチ、今となつて、つまらない気がして来たんですよ。なんだつて兄貴のかはりに出かけたんだ、から思ふと、それが何よりつまらないんですよ。兄貴はいまだ將顔をして威ばつてるのに、おれはかうして辛いめをしてゐる、こんな風に考へれば考へるほど、餘計くさくして来やがる。何か前世の罪でもあると見えますよ。』

アヴヂェーフは口を噤んだ。

『それともまた煙草でも吸ふかな?』とアヴヂェーフは尋ねた。

『それもよからう、支度するがいい。』

けれど、兵士らは煙草を吸ふわけに行かなかつた。アヴヂェーフが立ち上がつて、またパイプの支度をしようとした途端、道路づたひに人の歩く足音が、風のさわめきの間から聞こえた。パノフは銃を把つて、足でニキーチンを突いた。ニキーチンは飛び上がつて、外套を拾ひあげた。續いて三ばんめに立ち上がったのは、ボンダレンコであつた。

『おい、みんな、おれはこんな夢を見たぜ……』

アヴヂェーフはボンダレンコに、『しつ』と聲をかけた。兵士らは耳を澄ましながら、立ちすく

んだ。長靴とちがふ履きものをつけた、柔かい足音が次第に近づいて来た。落ち葉や枯れ枝のみしみしと鳴る音が、闇の中にだん／＼はつきり聞き分けられた。やがてチェチェン人獨得の喉聲のどごえで話す人聲が聞こえた。兵士らはもうもの音や話し聲ばかりでなく、木立の透き間を縫つて来る二つの人影さへ認められた。一人の影はやゝ低く、いま一人は高かつた。この人影が兵士らのそばまで来たとき、パノフは銃を手に持つて、二人の兵士とともに道路へ出た。

『そこへ行くのは誰だ?』と彼は叫んだ。

『わたくし音なしのチェチェン人。』と脊の低い方が言った。それはバークであつた。『鐵砲、ヨーク(ありま)、刀、ヨーク。』と彼は自分の體をさしながら言った。『公爵用事あります。』

脊の高い方は、つれのそばに黙つて立つてゐた。彼の身にもやはり武器はなかつた。

『斥候なんだな、つまり——聯隊長に會ひたいといふんだらう。』パノフは仲間に説明するやうに、かう言った。

『チロンツォーフ公爵、たいへん用事あります、大きい用事あります。』とバークは言った。

『よろしい、よろしい、連れて行つてやらう。』とパノフは言った。『どうだ、お前ボンダレンコと二人で連れて行かないか。』と彼はアヴヂェーフの方へ振りむいた。『そして、當番將校に引き渡したら、また歸つて来るんだぞ。だが、よく氣をつけるがいい、前に立つて歩かせるんだぞ。』

『いつそかうやつたらどうです？』アヴヂェーフは銃剣を動かして、突き刺すやうな真似をしながら言った。『これで一つぶすつとやつたら、それでお陀佛でさあ。』

『突き殺したら、なんの役にも立ちやしない。』ボンダレンコは言った。

『ぢや、出かけるかね？』

二人の兵士と斥候の足音が聞こえなくなつた時、パノフとニキーチンはもとの場所へ歸つた。

『あいつら、なんだつて夜中にうる／＼してゐるんだらう。』とニキーチンは言った。

『つまり、用があるからだらうよ。』とパノフは言った。『だが、冷や冷やして来たな。』と彼は言ひそへて、巻いてあつた外套を擴げて身にまとふと、鈴懸ツリヅクのそばに腰をおろした。

二時間ばかりたつて、アヴヂェーフとボンダレンコが歸つて来た。

『どうだ、引き渡したか？』とパノフが言った。

『引き渡しました。聯隊長殿の宿舎では、まだ寝てゐなかつたので、さつそく聯隊長殿のところへ連れて行きました。だがあの頭を刺つたチェン人の奴らは、實にいい人間ですぜ。』とアヴヂェーフは言葉をつづけた。『本當ですよ。すつかりあの連中と話しこんで了ひました。』

『そりやお前は話しこんで了ふだらうよ。』とニキーチンは不満さうに言った。

『本當にまるで露西亞人そつくりだよ。一人は女房もちで、おれが「マルーシカ、パール？」と聞

くと、パール(あゝ)と言ふぢやないか。「バランチューク、パール(子供はあゝるかの意)？」と聞くと、パール、たくさん、といふ返辭だ。「二人かね？」と言ふと二人だと来た。こんな風にして、ちまぐ話しが出来たよ。まつたくいい人間だ。』

『なにがいい人間なもんか。』とニキーチンが言った。『もし一人きりで奴に出くはしたら、お前は腸を引き出されて了ふんだぜ。』

『きつともう夜明けに間がないんだらう。』とパノフは言った。

『あゝ、もう星がだん／＼消え出した。』とアヴヂェーフは腰をおろしながら言った。それから兵士らはまたひつそりとなつた。

三

兵營や、兵士らの住んでゐる小家の窓々は、もう疾うに暗くなつてゐたが、要塞内でも目だつて立派な一軒の家では、窓といふ窓から光りが流れてゐた。この家は、總指揮官の子息で侍従武官を勤めてゐる、クローリン聯隊の隊長セミョーン・ミハイロギッチ・ブロンツォーフの住まひであつた。ブロンツォーフは、ペテルブルグでも美人として有名な、妻のマリヤ・ヴシーリエヴナと一緒に暮らしてゐたが、その生活ぶりは、この小さな高架索の要塞などでは、今までに例のないほど贅澤なも

のであつた。ブロンツォーフ、殊に彼の妻は、この土地に於ける自分たちの生活を、つゝまじやかなものどころか、不自由だらけなものやうに感じてゐたが、土地の人たちは、その並み並みならぬ贅澤ぶりに驚かされてゐた。

いつも夜中の十二時といふのに、いつばいに絨毯を敷きつめ、重いカーテンをおろした廣い客間では、四本の蠟燭を立てた骨牌用の机に向かつて、主人夫婦が客を相手に、歌留多を闘はしてゐた。歌留多仲間の一人は當の主人ブロンツォーフで、侍従武官の組合文字や飾帶をつけた、面長の、白つぼい髪をした大佐であつた。その相手は、ベテルブルグ大學の卒業生で、最近ブロンツォーフ公爵夫人が、先夫との間に出来た小さい男の子のために、家庭教師として招聘した、ぼろ／＼頭の、陰氣らしい青年であつた。その二人に對抗して、二人の將校が勝負を挑んでゐたが、一人はポルトラーツキイといつて、近衛から轉任して來た中隊長で、血色のいい幅ひろの顔をした男であつた。いま一人は聯隊副官で、美しい顔に冷たい表情を浮かべながら、恐ろしく反りかへつて坐つてゐた。主婦のマリヤ・ヴシーリエヅナ公爵夫人は、大柄で目の大きい、眉の黒い美人であつたが、スカートの足にさはるほど近々と、ポルトラーツキイのそばに坐つて、その札を覗きこんでゐた。彼女の言葉にも、その視線にも、微笑にも、體の一舉一動にも、その著物から發散する香水の匂ひにも、ポルトラーツキイを夢中にさせるやうな或るものがあつた。彼は夫人がすぐ傍にゐるといふ

事よりほか、一切の事を忘れつくしてゐた。そして、後から後からしくじりをしながら、自分の仲間をいら／＼させてゐた。

『だめだ、これちややり切れない！ またポイントをふいにして了つた。』ポルトラーツキイがポイントを捨てた時、副官はまつ赤になつてかう言つた。

ポルトラーツキイは夢でも醒めたやうに、合點が行かないといふ顔つきで、距離の遠い善良さうな黒目を見はつて、いかにも不満さうな副官の顔を見つめた。

『まあ、勘辨してお上げなさい。』マリヤ・ヴシーリエヅナは微笑しながら言つた。『ご覧なさいな、わたしがさう言つたぢやありませんか。』と彼女はポルトラーツキイの方へ向いて言つた。

『しかし、あなたが仰しやつたのは、まるで別の事ですよ。』とポルトラーツキイはにこ／＼しながら言つた。

『まあ、別のことですつて？』と彼女は答へて、同じやうににつこり笑つた。この笑顔の答へは、すつかりポルトラーツキイを興奮させ、有頂天にして了つたので、彼は顔を牡丹いろに染めながら、歌留多を取りあげて切りはじめた。

『君が切るんぢやないよ。』と、副官はいかつい調子で言つて、指環をはめた白い手で、札をくばりにかかつた。その様子は、たゞ少しも早く厄介ばらひがしたい、といつたやうな風であつた。

公爵の侍僕が客間へ入つて来て、當番將校が聯隊長に面會を求めてゐる旨を報告した。

『ぢや、諸君、ちよつと失禮します。』露西亞語を英吉利風のアクセントで發音しながら、公爵はか
ゝ言つた。『マリイ、お前わたしの代りに坐つてくれるね。』

『それで皆さんご異存ありませんね？』公爵夫人は高い脊たけを一ぱいに伸ばして、身ばやに輕々
と起ち上がり、幸福な婦人によく見られる、輝かしい笑みを浮かべながら、かう尋ねた。

『わたしはいつでも、なんにでも賛成ですよ。』まるで歌留多の出来ない公爵夫人が、これから自分
の相手になるのだと思ふと、すつかり嬉しくなつて了つて、副官はかう言つた。ポルトラーツキイ
は微笑を浮かべながら、両手を擴げたばかりである。

ロムベルの勝負が終りかかつた時、公爵が客間へ引きかへした。彼はかくべつ興奮した、愉快さ
うな顔つきで入つて來た。

『どうだね、僕は一ついい事を提議するよ。』

『なんですか？』

『シャムパンを飲まう。』

『それならわたしはいつでも異存なしです。』とポルトラーツキイは言つた。

『いや、それは實に愉快ですな。』と副官は言つた。

『プシーリイ、持つて來い。』と公爵は命じた。

『何用であなたを呼んだんですの？』とマリヤ・ヴシーリエヅナが尋ねた。

『當番將校のほかに、もうひとり別の人間が來たんだ。』

『誰ですか？ なんでせう？』マリヤ・ヴシーリエヅナは急きこんでかう尋ねた。

『それは言へない。』とクロンツォーフは肩をすくめながら答へた。

『言へないんですつて。』とマリヤ・ヴシーリエヅナは鸚鵡がへしに言つた。『そりやどうだか分り
ませんわ。』

シャムパンが運ばれた。客はコツプに一杯づつ飲みほすと、勝負を終へて勘定をすました後、別
れを告げはじめた。

『君の中隊は、あす森へ行く命令を受けてゐるんだね？』と公爵はポルトラーツキイに尋ねた。

『さうです。それがどうかしましたか？』

『それちや明日また會はう。』と公爵はかるく微笑しながら言つた。

『どうぞ。』クロンツォーフの言ふことがよく分からないまゝに、ポルトラーツキイはかう答へた。

彼は今にマリヤ・ヴシーリエヅナの手が握れるのだと思つて、その事にはかり氣を取られてゐた。

マリヤ・ヴシーリエヅナはいつもの通り、ポルトラーツキイの手を堅く握りしめたばかりでな

く、おまけに烈しく一振りした。そして、彼がダイヤの札を出した時の間違ひを、もう一度かく詰つたのち、やさしい、あでやかな、意味ありげな微笑を彼に投げた（ポルトラーツキイにはさう思はれたのである）。

ポルトラーツキイは歡喜にあふれた心持ちで、家路を辿つてゐた。この心持ちは、彼のやうに社交界で生長し教育された人間が、幾月も孤獨な軍隊生活を送つたのち、ふたゝび自分たちと同じ階級に屬する婦人（殊にブロンツォーアのやうな婦人）に出會つた時でなければ、たうてい理解できない底のものであつた。

同僚と一緒に暮らしてゐる小家に辿りつくと、彼は入り口をとんと突いた。けれど、戸には鍵がかかつてゐた。彼はもう一度つよく押したが——戸は明かなかつた。彼はいま／＼しくなつたので、足と劍で突いたり蹴つたりし始めた。やがて、戸の向かうに足音が聞こえて、ポルトラーツキイの従僕で、ヴギーラといふ農奴あがり、銀をはづした。

『なんと思つて鍵なんかかけたんだ？　ばか野郎。』

『いつたい掛けずに置いてよいものでございますか、アレクセイ・ヴラヂーミルイチ……』

『また酔つばらつたな！　よし、いいか悪いか教へてやらう……』

ポルトラーツキイは、ヴギーラを擲りつけようとしたが、また思ひ返した。

『いや、まあ貴様なんかどうだつていいや。蠟燭をつける。』

『たゞ今。』

ヴギーラは本當に一杯機嫌だつた。彼は工長の命名祝ひに出かけて、一杯のんだのである。家へ歸つてから、彼は工長のイヴン・マトゼーギッチの暮しと引き較べて、つく／＼わが身のしがなさを考へこんで了つた。イヴン・マトゼーギッチは、ちやんとした収入があつて、女房も持つてゐるし、一年たつたら除隊だと楽しんでゐる。ところが、ヴギーラはまだ子供の時分にお邸づきとして「引き上げ」られ、旦那がたに奉公するやうになつてからこの方、もう四十こして了つた今日の日まで、まだ女房も持たずに、じだらくな旦那のお供をして、行軍生活ばかり續けてゐる。旦那は、やさしい人で、あまり手荒らな事はしないけれど——しかし、これがどうして人並みの暮しと言へやう！　「高架索から歸つたら、自由にするといいふ約束だが、自由になつたからつて、どこも行くところはありやしない……まるで犬みたいな身の上だ。」とヴギーラは考へた。それから睡くて堪らなくなつたので、誰か入つて来て、ものを持つて行かない用心に、銀をかけて寝こんだのである。

ポルトラーツキイは部屋へ入つた。彼はこゝで同僚のチーホノフと、一緒に寝起きしてゐるのであつた。

『おい、どうだ、負けたらう?』とチーホノフは目を醒まして言つた。

『ところが、さうでないんだ、十七ルーブリ勝つた上に、クリコー(シヤムバ)を一壘のんで来たんだよ。』

『そして、マリヤ・ヴシーリエヅナに見とれてたんだらう?』

『そりや、マリヤ・ヴシーリエヅナにも見とれたさ。』とポルトラーツキイは鸚鵡がへしに言つた。

『もうそろ／＼起きなくちや。』とチーホノフは言つた。『六時にはもう出發だからな。』

『ヴギーラ、』とポルトラーツキイは呷鳴つた。『いいか、明日は五時にうまく起こしてくれ。』

『あなたは手荒らなことをなさるんですもの、お起こしなんか出来やしませんよ。』

『おれは起こせと言つてるんだぞ、分かつたか?』

『分かりました。』

ヴギーラは靴と服を持つて出て行つた。ポルトラーツキイは寢臺に身を横たへて、にや／＼笑ひながら煙草を吸ひつけ、蠟燭を吹き消した。暗闇の中で、彼はマリヤ・ヴシーリエヅナの笑顔を眼前に眺めてゐた。

ブロンツォーフの家では、すぐには寝つかながつた。客が歸つて了ふと、マリヤ・ヴシーリエヅナは夫のをばへ行つて、その前に立ちながら、いかつい調子で言つた。

『Eh bien! Vous allez me dire ce que c'est. (ねえ、あなた、一體おれはなん)』

『Mais, ma chère…… (だが)』

『Pas de ma chère! c'est un émissaire, n'est-ce pas? (「だが、お前」ちやありませんわー)』

『Quand même je ne puis pas vous le dire (さうでないにしても、やは)』

『Vous ne pouvez pas? Alors c'est moi qui vais vous le dire. (言へないんですつて、ちや、)』

『Vous? (お前)』

『ハチ・ムラートでせう、ね?』と公爵夫人は言つた。彼女はもう四五日前から、ハチ・ムラートとの交渉を聞きこんでゐたので、夫を尋ねて来たのは、當のハチ・ムラートに相違ないと、想像したのである。

ブロンツォーフは、それを否定することが出来なかつたけれど、それでも、やつて来たのは當のハチ・ムラートでなく、たゞの斥候で、あす伐木をする事になつてゐる場所へ、ハチ・ムラートが来ることを知らせたのだと説明して、夫人を失望させた。

要塞の單調な生活の中にあつて、この出来ごととは若いフロンツォーフ夫妻にとつては、一つの喜びであつた。この報告がどんなに父(當時の高架索總督)を喜ばすか知れない、などといふ事を話し合つたのち、夫婦は二時すぎに床へ入つた。

四

シャミールから派遣された武士を避けながら、三晩も寢ずに過ごした後なので、サドーが『お休み』を言つて小家を出るが早い、ハチ・ムラートはすぐ眠りに落ちて了つた。彼は著物もぬがないで、主人がすゝめてくれた赤い羽根枕へ肘を沈めながら、頬杖をついて睡つた。彼からあまり遠くない壁ぎには、エルダールが睡つてゐた。エルダールは若々しい丈夫さうな手足を投げ出して、仰むけに睡つてゐたので、白い上チエルクレスカ著の上に彈藥筒の黒く浮きだしてゐる張りきつた胸が、枕を外づした刺りたての青い頭より、高いくらゐになつてゐた。心持ちうぶ毛に蔽はれてゐる、子供のやうに突き出た上唇は、まるで何かしやぶつてゐるやうに、すぼんだり開いたりしてゐた。彼もやはりハチ・ムラートと同じやうに、著物もぬがないで、ピストルと短劍を帯につけたまゝ睡つてゐた。小家の煖爐には柴が燃えつきんとして、壁の窪みでは有り明けがすすかに點つてゐた。夜中に客間の戸口がぎいと軋んだ。ハチ・ムラートはすぐさま起き上がつて、ピストルに手をか

けた。土間をやはらかに歩きながら、部屋に入つて来たのは、サドーであつた。

『何用だ?』とハチ・ムラートは尋ねたが、それはまるで少しも寢なかつたやうな調子であつた。

『考へなくちやなりません。』サドーはハチ・ムラートの前に坐りながら、かう言つた。『或る女が屋根の上から、あなたがお通りになるのを見て、』と彼は言つた。『それを亭主に話したものですから、今ちや村ぢうのものが知つてをります。いま家内のところへ隣りの女が駈けつけて、教へてくれましたが、年よりどもがお寺に集まつて、あなたを引き留めようと、相談してゐるさうでございます。』

『ぢや、出かけなくちやならん。』とハチ・ムラートは言つた。

『馬の用意は出来てをります。』とサドーは言つて、足ばやに小家から出て行つた。

『エルダール。』とハチ・ムラートは囁いた。エルダールは自分の名前、と言ふより、むしろ主人の聲を聞きつけると、毛皮帽子を直しながら、遅しい足でとび上がった。ハチ・ムラートは武器をつけ、外套を羽織つた。エルダールも同じやうにして、二人は無言のまま、小家の庇の下へ出た。黒目の少年が馬を引いて来た。踏みかためられた往來の上を打つ、蹄の音を聞きつけて、誰か隣りの小家の戸口から頭を突き出した。やがて木靴をがた／＼鳴らしながら、一人の男が寺院の方をさして、坂を登つて行つた。

月はなかつた。たゞ星屑ばかりが、まつ黒な空にきら／＼光つて、闇の中に家々の屋根が、くつきり輪廓を見せてゐた。そして、高い哨樓を控へた回教寺院の建てものが、村の上手かみに特別たかく聳えてゐた。寺院の方からは、わあつと言ふ人聲が響いて來た。

ハチ・ムラートは手ばやく銃を掴んで、片足を狭い籠かごにかけると、いつの間にか音もなく身を躍して、鞍の上にのせた厚い敷きものの上へ飛びのつた。

『お前の厚い志には、神さまが報いてくださるだらう。』馴れた足つきでいま一方の籠を捜しながら、彼は主人に向かつてかう言つた。そして、轡を抑へてゐる少年に、鞭で軽く觸はつた。それは、脇へどける、といふ合圖である。少年は身を引いた。すると馬は、自分のすべき事をちやんと承知してゐるやうに、さつさと横町から本通へ向けて歩き出した。エルダールは後から馬を進めた。サドーは外套を着て、兩手をす早く振り廻はしながら、せまい往來をあちらへ渡つたり、こちらへ駈けぬけたりしながら、二人のあとから走つて行つた。

村の出口のところ、往來を横ぎるやうに動いて來る、人影が現はれた。つゞいてもう一人。

『待て！ 誰だ！ とまれ！』と一人の聲が叫んだ。すると、幾たりかの人間が道をふさいだ。

ハチ・ムラートは立ちどまらうとしないで、腰からピストルを取り出して、馬の足掻かきを早めながら、道をふさいでゐる人々の方へ、まつすぐに馬を進めた。路上に立つてゐた人々は、ばつと左

右へ別れた。ハチ・ムラートは後を振りむきもせず、まつしぐらに坂路を駈けくだつた。エルダールは大きく駈けを打たせながら、その後から續いた。うしろから二發の銃聲が聞こえて、彈丸たまごが二つひらひら唸りながら、耳もとを掠めたけれど、ハチ・ムラートにも、エルダールにも觸れないで過ぎた。ハチ・ムラートはやはり同じやうな足どりで、馬を進めた。三百歩ばかり離れたとき、やや息をはずませてゐる馬をとめて、彼は耳を澄まし始めた。前の方でも下の方でも、急流の騒ぐ音が聞こえた。後の村では、鶏の鳴き交はす聲が聞こえた。それらのもの音の間から、ハチ・ムラートの後を追つて來る馬蹄の響きと、人々の話し聲が、次第に近く聞こえるのであつた。ハチ・ムラートは馬に拍車を與へて、相かはらず落ちついた歩調で、進んで行つた。

後をつけて來た人々は、やがて全速力に馬を追ひはじめたと思ふと、間もなくハチ・ムラートに追ひついた。それは二十人ばかりの騎馬の人であつた。彼らは村の住民で、ハチ・ムラートの逮捕を決議したのである。すくなくとも、シャミールに對する申しわけに、掴まへるやうな振りをしよう、と決めたのである。彼らの姿が闇に見わけられるほどの距離に近づいた時、ハチ・ムラートは立ち停まつて、手綱を捨てると、馴れた身ぶりで、左手で銃の蔽かたひの釦を外づし、右手で中身を引きぬいた。エルダールも同じやうにした。

『いつたい何用だ？』とハチ・ムラートは叫んだ。『わしを掴まへようと言ふのか？ そんなら掴

まへて見ろ。』

彼は銃を取りあげた。

村の住民たちは馬をとめた。ハチ・ムラートは銃を手にかまへたまゝ、窪地へくだり始めた。騎馬の人たちは近くよらないで、彼の後からつゞいた。ハチ・ムラートが窪地の向かう側へ渡つたとき、あとをつけてゐた人達は、自分たちの言ひ分を聞いてくれと叫んだ。ハチ・ムラートは返答がはりに銃を發射して、まつしぐらに馬を飛ばした。彼が馬をとめたとき、もう後に追つ手の足音は聞こえなかつた。鶏の聲はもう聞こえないで、たゞ森の中で水のせゝらぐ音が、前よりもはつきりして來たのと、ときどきみづくの鳴き聲が、耳に入るばかりであつた。黒い壁のやうな森が間近に迫つて來た。それは彼の部下が待つてゐる森であつた。森に近づくと、ハチ・ムラートは馬をとめて、胸いつばいに息を吸ひこみ、ひうと口笛を吹いた。それから鳴りを鎮めて、耳をすました。しばらくすると、同じやうな口笛が森から聞こえた。ハチ・ムラートは道路を横へられて、森の方へ向かつた。百歩ばかり進んだとき、ハチ・ムラートは木立の幹をすかして、赤い焚き火と、その側に坐つてゐる人々の影と、鞍をつけたまゝ脚を縛られて、胴を半分焚き火に照らされてゐる、馬の姿が見えた。焚き火のそばには四五人の人がゐた。

一人が慌てて起ち上がると、つか／＼とハチ・ムラートのそばへ寄つて、手綱と鐙に手をかけ

た。それはハチ・ムラートの義兄弟で、彼の財政を管理してゐる男であつた。

『火を消せ！』ハチ・ムラートは馬からおりながら、かう言つた。

人々は薪を投げ散らして、燃えてゐる小枝を足で踏みつけ始めた。

『バータがこゝへ來たか？』地べたに敷いた外套へ近よりながら、ハチ・ムラートは尋ねた。

『來ました。もう大分まへに、ハン・マゴーマと一緒に出かけました。』

『どの道を通つて出かけた？』

『その道です。』ハチ・ムラートが來た反對がはの道を指さしながら、ハネーフィが答へた。

『うむ、よし。』とハチ・ムラートは言つて、肩から銃をおろし、彈丸をこめにかかつた。『氣をつけなくちやならん。わしの後に追つ手がかかつたからな。』焚き火を消してゐる男に向かつて、ハチ・ムラートはかう言つた。

それはチエチエン人のガムザロであつた。ガムザロは地べたに敷いた外套のそばへ寄つて、その上に置いてある蔽ひのかかつた銃を取り上げ、無言のまゝ林間の空地の外づれへ行き、ハチ・ムラートがやつて來た方角へ進んだ。エルダールは馬からおりて、ハチ・ムラートの乗馬の手綱をとり、二頭の首を高くつき上げながら、木立の幹に繫いだ。それからガムザロと同じやうに、銃を肩にして、あき地の反對がはへ行つた。焚き火は消された。すると、森は前ほど黒く見えなくなつ

た。そして、空には星がかすかながら燦いてゐた。

ハチ・ムラートは星を見あげて、すばるがもう中空まで昇つたのを見ると、もうとつくに夜半を過ぎて、夜祈禱の刻限になつてゐるのを思ひ出した。彼はハネーフィに水さしを出させた。それはいつも袋に入れて、持つて歩いてゐるのであつた。彼は外套を著て、水を汲みに行つた。

靴をぬいで足を洗ひ清めると、ハチ・ムラートは跣のまま、敷いてある外套の上へあがつた。それから、きちんと膝を折つて坐りながら、指で耳をふさぎ目をとぢた後、東の方へ向かつて、いつもの祈禱を唱へはじめた。

祈禱が終ると、彼は鞍囊の置いてある自分の席へ歸つて、外套の上に胡座をかき、膝の上に兩肘を突いて、首をたれながら考へこんだ。

ハチ・ムラートはいつも自分の幸運を信じてゐた。何か事を企てるとき、彼は前もつてその成功をかたく信じてゐた——運命はいつも彼に微笑を見せた。それは彼の波瀾多き戦闘生活の前後を通じて、少數の例外を除くのほか、ほとんど終始一貫してゐた。で、彼は今度もそれを期待してゐた。彼はブロンツォーフの與へた軍隊を率ゐて、シャミール討伐に向かひ、彼を捕虜にして年來の仇を報いた上、露西亞の皇帝から行賞にあかづり、單にアヴリヤばかりでなく、彼の武威に服したチエ・チュニヤ全體も支配する、といつたやうな事を想像に描いた。こんな事を考へてゐる中に、彼は自

分でも氣づかぬ間に寢いつて了つた。

彼はこんな夢を見た——部下の勇士たちと一緒に、軍歌をうたひ、『ハチ・ムラートの出陣だぞ！』と叫びながら、シャミールを襲つて、彼を妻妾とともに生け捕りにする。すると、女どもの泣き喚く聲がまさしくと聞こえる——と、目が醒めた。『リヤ・イリヤフ』の歌も、『ハチ・ムラートの出陣だぞ！』といふ叫びも、シャミールの妻妾たちの哀泣も、すべて山犬の唸つたり、鳴いたり、笑つたりする聲であつた。彼はその聲に夢を破られたのである。ハチ・ムラートは頭をあげて、もう木立の間から明かるく見える東の空を眺め、すこし離れて控へてゐる一人の部下に、ハン・マ・ゴーマの事を尋ねた。ハン・マ・ゴーマはまだ歸らない、といふ答へを聞くと、ハチ・ムラートは頭を落として、すぐにまたまどろみ始めた。

バータと一緒に使ひから歸つて來た、ハン・マ・ゴーマの陽氣さうな聲が、彼の目を醒ました。ハン・マ・ゴーマはすぐさまハチ・ムラートのそばへ坐りこみながら、兵士らが自分たちを迎へて、公爵のところへ案内した事や、公爵にちき／＼會つて話したことや、公爵が非常に喜んで、明日の朝さつそく、露西亞人が木を伐ることになつてゐる、ミチックの向かう側のシャーリン原で、落ち合ふやうに約束した事などを報告した。バータはとき／＼仲間の報告を遮りながら、自分の觀察したデテールをつけ加へるのであつた。

ハチ・ムラートは、露西亞軍に與しようといふ自分の申出に對して、ブロンツォーフがどういふ言葉で答へたか、それを詳しく根ほり葉ほり尋ねた。ハン・マゴーマとパータは聲を揃へて、公爵はハチ・ムラートを賓客として遇し、萬事彼の満足するやうにしてやると、約束した旨を答へた。それから、ハチ・ムラートは、道路のことをいろ／＼尋ねた。ハン・マゴーマが、道は自分がよく知つてゐるから、眞つすぐにそこまで案内する、と請け合つたので、ハチ・ムラートは金を取り出して、約束の三ルーブリをパータにやつた。それから部下のものに、黄金づくりの武器と、頭布のついた毛皮帽子を、鞍囊から取り出させ、部下たちにも身のまはりを調べるやうに、露西亞人のところへ行くのに不體裁がないやうに命じた。人々が武器や、鞍や、馬具や、馬を清めてゐる間に、星影はいつともなく消えて、あたりはすつかり明かるくなつた。そして、夜明け前の微風が流れはじめた。

五

早朝まだうす暗い時分に、ポルトラーツキイに引率された二箇中隊は、てんでに斧を持つて、シャフギリン門外十里の地點へ出た。そして、狙撃兵の散兵線を敷いた後、夜が明け始めるとひとしく、伐木にかかつた。八時ちかくなると、焚き火の中でしう／＼と音をたててゐる、生木の薫り高い煙りと溶け合つた霧が、空たかく立ち昇りはじめた。そして、五歩はなれるともう姿が見えな

いで、たゞ互の聲ばかり聞き合つてゐた伐木の兵士らも、今はもう焚き火も、倒れた木に塞がれた森の中の路も、はつきり見分けるやうになつた。太陽は霧の中から明かるい斑點のやうに現はれたり、また隠れたりした。道からすこし離れた草原には、五人のものが太鼓に腰をかけてゐた。それはポルトラーツキイと、下士のチーホノフと、第三中隊の將校二人と、決闘のために奪官されて来た、前近衛騎兵のフレイゼ男爵であつた。男爵はポルトラーツキイと、幼年學校時代からの友だからなのである。太鼓のまはりには、喰べものを包んであつた紙や、煙草の吸ひ殻や、空き壺などがころがつてゐた。將校たちはラートカを飲んで、下物を喰べ終ると、黒ビールを飲んだ。鼓手は三本めの口をぬいた。ポルトラーツキイはゆうべ寝が足りなかつたにも拘らず、一種特別な精神力の昂揚と、のん氣な人のよい快活な興奮を感じてゐた。それは危険の可能性を有するところで、兵士や同僚などに取りかこまれてゐる時、いつも彼の感じる氣持ちなのであつた。

將校たちの間では、最近の出来ごとについて話しがはずんでゐた——それはスレブツォフ將軍の戦死である。彼らは誰ひもりとしてこの死の中に、人生における最も重大な瞬間——生命の終焉と、發生の根源への復歸——を見るものがなかつた。たゞ刀を振るつて山民に躍りかかり、めちやくちやに斬りまくつた勇敢な將校の豪傑ぶり、たゞそれだけしか彼らの目には映らなかつた。

當時の高加索戦争においても、また一般にいついかなる戦争においても、人々が想像したり描寫

したりするやうな白兵戦などは、決して存在するものでない。たとへ刀や銃剣による白兵戦があり得るとしても、それはいつも敗走兵を斬つたり、突いたりするに過ぎない。それはすべての軍人、ことに實戦に参加した將校一同が、承知してゐる事でもあり、また承知してゐなければならぬ筈のことである。が、それにも拘らず、この白兵戦の假説はすべての將校によつて承認せられ、彼らに落ちついた、誇らしげな、愉快らしい表情を與へた。彼らの或るものは豪傑きどり、或るものはその反對にごくつましやかな姿勢で、太鼓の上に腰をかけたまゝ、煙草を吹かしたり、酒を飲んだり、冗談を言つたりしながら、スレブツォフ將軍と同じやうに、いつ彼ら自身を襲ふかも知れない死の事などは、まるで考へようともしなかつた。すると、まるで彼らの期待を裏がきするかのやうに、話しの中ごろに道の左手で、人の氣持ちを引き締めるやうな、美しい一發の銃聲が鋭く響き互つた。と、弾丸が楽しげな口笛を吹きながら、どこか霧のこめた空中を飛びすぎて、立木の幹に当たつた氣配がした。いくつかの重々しい兵隊銃の發射が、敵の銃聲に音たかく答へた。

『やつ！』とポルトラーツキイは愉快さうな聲で叫んだ。『こゝは前哨線の中だぞ。おい君、コスチャ。』と彼はフレイゼの方へ向いた。『君は運がいいなあ。早く中隊の方へ行きたまへ。これからすばらしい戦争をやるんだ。そして昇級の上申もしてやるよ。』

軍官兵の男爵はいきなり飛び上がつて、急ぎ足で煙りに閉ざされた地點へ歩いて行つた。そこに

は彼の中隊がゐるのであつた。ポルトラーツキイのところへ、黒みがかつた栗毛の小さなコバルヂヤ馬が引かれて來た。彼はその背にまたがつて、中隊を整列させ、銃聲を手頼りに前哨線の方へ進んで行つた。前哨線は赤裸の斜面を前に控へた、森の外側に置かれてあつた。風は森の方へむけて吹いてゐたので、谷の斜面ばかりでなく、向かう側まではつきり見えてゐた。

ポルトラーツキイが前哨線に馬を進めたとき、霧の中から太陽が顔を覗けた。そして、百間ばかり隔つた谷の向かう側に生えてゐる矮林の端に、幾たりかの騎馬の人が見えた。それはハチ・ムラートの後を追つて來たチェン人、彼が露西亞軍に乗りこむのを、見とゞけようとしてゐるのであつた。彼らの一人が前哨線に向かつて發砲した。前哨線からも幾たりかの兵士がそれに應じた。チェン人は退却した。それで射撃は了ひになつた。ポルトラーツキイが中隊を引率してここまで來ると、いきなり發射の命令をくだしたので、號令が傳達される否や、前哨線せんたいに樂しげな、人の心を勵ますやうな小銃の音が、絶えずばち／＼と鳴りひびき、美しく擴がる煙の塊りが、その伴奏をしてゐた。兵士らは氣ばらしが出來たのを喜びながら、忙しげに装填しては、あとから後からと發射してゐた。チェン人は『何くそつ！』といふ氣持ちになつたものと見えて、馬を驅つて前進しながら、兵士らを狙つてつゞけさまに、幾發かの弾丸を放した。その中の一發が一人の兵士に命中した。その兵士は祕密偵察に出てゐた、例のアヴヂェーフであつた。戦友がその

傍へ近よつた時、彼は両手で腹部の傷を抑へながら、うつ伏しになつて、規則たゞしく體を左右に揺すりながら、低い聲で呻いてゐた。

アヴヂェーフはポルトラーツキイの中隊に所屬してゐた。一塊りに集まつた兵士らを見ると、ポルトラーツキイはその傍へ寄つた。

『どうした、貴様、やられたのか？』と彼は言つた。『どこを？』

アヴヂェーフは答へなかつた。

『わたくしが銃を装填しはじめると、不意にちゆつといふやうな音が聞こえたので、』彼の戦友になつてゐた一人の兵士が、かう言つた。『見ると、この男がぼつたり銃を落としたのであります。』

『ちえつ、ちえつ、』とポルトラーツキイは舌打ちをした。『どうだ、痛いか、アヴヂェーフ？』

『痛くはありませんが、歩けないんで。酒でもすこし戴きたいんですが、中尉どの。』

ヲートカ（と言ふよりも、高架索軍の兵士の飲むのはアルコールであつた）が見つかつたので、パノフはいかつい表情で眉を蹙めながら、水筒の蓋をアヴヂェーフの口へ持つて行つた。アヴヂェーフは呑みはじめたが、すぐにその蓋を手で押しつけた。

『どうも腹が受けつけようとしな。』と彼は言つた。『お前自分で呑むがいい。』

パノフはアルコールを呑みほした。アヴヂェーフはまた起き上がらうとしたが、すぐにべたりと

なつて了つた。兵士らは外套を敷いて、その上にアヴヂェーフを載せた。

『中隊長どの、聯隊長がお見えになりました。』と曹長がポルトラーツキイに言つた。

『うむ、よし、お前この場の處置をしてくれ。』とポルトラーツキイは言つて、鞭を振り上げると、大きく早足を打たせながら、ブロンツォーフの方へ駆け出した。

ブロンツォーフは、純英國産の栗毛の牡馬にまたがり、聯隊副官と、コサツク兵と、チエチエン人の通譯を従へながら、こちらをさしてやつて來た。

『何ごとが起こつたんだね？』と彼はポルトラーツキイに尋ねた。

『いや、敵の一隊が現はれて、前哨線を襲つたのです。』とポルトラーツキイは答へた。

『ちよつ、ちよつ。何もかも君の細工なんだらう。』

『いや、わたしぢやありません、公府。』とポルトラーツキイは微笑しながら言つた。『自分たちで勝手にやつたんです。』

『兵士がひとり負傷したといふ話を聞いたが？』

『え、實に可哀さうな事をしました。いい兵隊でしたが。』

『重傷かね？』

『重傷らしいです——腹部をやられたんです。』

『ときに、わたしがどこへ出かけてゐるか、分かるかね?』とブロンツォーフは尋ねた。
『分かりません。』

『いつたい想像がつかないか知らん?……』

『いえ。』

『ハチ・ムラートが投降したので、これから會ひに行くのだ。』

『まさか!』

『昨日あの男の斥候がやつて來たのだ。』やつとの事で喜びの微笑を抑へながら、ブロンツォーフはかう言つた。『いまシャーリンの草原で、わたしを待つてゐる筈だから、君その草原まで散兵を敷いて、あとで迎へに來てくれたまへ。』

『承知しました。』ポルトラーツキイは帽子に手を當てて、かう答へると、自分の中隊の方へ引き返した。彼は自分で右翼に前哨線を誘導し、左翼の方は曹長に命じた。その間に負傷したアヴヂェーフは兵士らの手で堡壘へ運ばれた。

ポルトラーツキイが、もうブロンツォーフのところへ引き返した時、後の方から彼を追つて來る、幾たりかの騎馬の人が目に入つた。彼は立ち停まつて、待ち合はせた。

先頭に立つてゐる男は、鬘の白い馬にまたがり、白いチェルケス外套をまとひ、頭布を巻いた毛

皮帽をかぶり、黄金づくりの武具を身につけて、威嚴のある風貌をしてゐた。それがハチ・ムラートであつた。彼はポルトラーツキイに近づいて、何やら韃靼語で言つた。ポルトラーツキイは眉をフリ上げて、分からないと言ふしるしに両手を擴げ、にっこりと笑つた。ハチ・ムラートはその微笑に、微笑をもつて答へたが、この微笑は子供らしい善良さで、ポルトラーツキイを驚かした。ポルトラーツキイは、あの恐ろしい山匪の巨魁がこんな男であらうとは、夢にも豫期しなかつたのである。彼が想像してゐたのは、情味も親しみもない陰鬱な人間であつたが、いま彼の面前に立つてゐるのは、ごく單純な人間で、まるで百年の舊知のやうに、にこくと善良な微笑を浮かべてゐる。たゞ一つ特殊な點があつた。それは左右の距離の遠い目で、鋭く注意ぶかく、しかも落ちつき拂つて、相手の目を見つめるのであつた。

ハチ・ムラートの従者は四人ゐた。その中には、ゆうべブロンツォーフのところへ來た、ハン・マゴーマも交じつてゐた。それは睫毛のないまつ黒な輝かしい目をした、血色のいい丸顔の男で、全體樂天的な表情に輝いてゐた。そのほかに、まだ眉と眉と繋がり合ふほど毛ぶかい、がつしりした男がゐた。それはハチ・ムラートの財産をあづかつてゐる、アヴリヤ人のハネーフィである。彼はぎつしり詰まつてゐる鞍囊をつけた、純血種の馬を引いてゐた。けれど、従者の中で特に目だつのは、もう二人の男であつた。一人は女のやうに腰が細くて、肩が廣く、額にうす色の髭がやつと

生えかかった、羊のやうな眼つきの美少年で——それはエルダールであつた——いま一人は片目がつぶれて、睫毛も眉もなく、赤茶けた鬚髭をみじかく刈りこんだ、鼻から顔へかけて傷痕のある、チェチェン人のガムザロであつた。

ポルトラーツキイはハチ・ムラートに、路上へ姿を現はしたブロンツォーフを指さして見せた。ハチ・ムラートはその方へ馬を進めて、そば近くまで寄つたとき、右手を胸に當てて、なにやら蹇雑語で言ひながら、立ちどまつた。チェチェン人の通辯がそれを通譯した。

『わたくしは露西亞皇帝の意志にこの身を捧げて、ご奉公したいと思ひます。前からさうしたかつてですが、シャミールが許さなかつたのです——とこんな風に申してをります。』

通辯の言葉を聞き終ると、ブロンツォーフは鹿皮の手袋をはめた手を、ハチ・ムラートにさし延べた。ハチ・ムラートはその手をちらと見て、一秒間ほど躊躇したが、やがてその手を堅く握り締めて、通辯とブロンツォーフを、代はる代はる見つめながら、また何やら言つた。

『わたくしは誰の手にも投じようと思ひませんでした。たゞあなただけは太守のご子息ですから、喜んでやつて参りました。わたくしは心からあなたを尊敬してをります——とこんな風に申しました。』と通辯は言つた。

ブロンツォーフは感謝のしるしに頷いた。ハチ・ムラートは自分の従者を指さしながら、また何

か言つた。

『この者どもは自分の部下（部下）なので、わたくしと同様、露西亞軍のために奉公するでございませう——とこんなに申してをります。』

ブロンツォーフは彼らを振りかへつて、この方へも頷いて見せた。

険のない黒目をした、快活なチェチェン人のハン・マゴーマは、やはり同じやうに頷きながら、なにかブロンツォーフに言つたが、それが滑稽な事だつたと見えて、毛ぶかいアヴリヤ人は、鮮かな白い齒を剝いて、にやりと笑つた。赤毛のガムザロは、赤い片目をブロンツォーフの方へざらりと光らせただけで、また自分の引いてゐる馬の耳を見つめ始めた。

ブロンツォーフとハチ・ムラートが、従者をしたがへながら、要塞の方へ引き返したとき、散兵線を解かれた兵士らが、一かたまりに集まつて、思ひ思ひの批評を試みてゐた。

『あの畜生、どれくらゐ人の命をとりやがつたか知れやしねえ！ それなのに、今度はきつとちやほやされるに相違ねえぜ。』と一人が言つた。

『そりやさうさ。シャミールの總大將だつたんだからな。もうこれからはだめだよ。』

『とにかく偉い奴だ。いまさら言ふがものはないよ。勇士だよ。』

『だが、あの赤毛はどうだ、赤毛は——まるで獣のやうに、横目でじろく睨んでやがる。』

『ふつ、おほかた山犬みたいな野郎に相違ない。』
赤毛はとり分け一同の目についたのである。

伐木をやつてゐた所では、道路に近くあわせた兵士らが、ばら／＼と見物に飛び出した。將校が彼らを囀鳴りつけたが、ブロンツォーフはそれを押しとめた。

『まあ、勝手に自分の古馴染を見物させてやるさ。お前はあの男が誰か知つてゐるか？』例の英吉利風のアクセントで、ゆる／＼と言葉を發音しながら、ブロンツォーフは手近に立つてゐる兵士に尋ねた。

『いえ、知りません、閣下。』

『ハチ・ムラートだ——聞いた事があるだらう？』

『ありますとも、閣下。幾度もあいつをやつつけました。』

『ふむ、しかし、あいつにも随分ひどい目に會つたものだ。』

『さうであります、閣下。』長官と言葉を交はすことが出来たのに満足して、兵士はかう答へた。

ハチ・ムラートはみなが自分の噂をしてゐる事を悟つて、愉快な微笑を目に輝かした。ブロンツォーフはこの上もない上機嫌で、堡壘へ歸つた。

六

ブロンツォーフは、シャミールにつぐ露西亞軍の強敵を降伏させて、わが掌中に収めたのが、ほかならぬブロンツォーフ自身だと思ふと、得意の念を禁ずることが出来なかつた。たゞ一つ不愉快なのは、ブズドギーゼンスク地方の軍隊指揮官が、メルレル・ザコメーリスキイ將軍なので、本来なればこの人を通じて、事件を處理しなければならぬ筈であつた。ところが、ブロンツォーフは彼に報告しないで、すべて獨斷で處置して了つたのだから、面倒の起る恐れがあつた。この心配が多少ブロンツォーフの満足感を毒した。

家のそばまで來ると、ブロンツォーフは聯隊副官にハチ・ムラートの部下をあづけて、自分はハチ・ムラートを家の中へ案内した。

公爵夫人マリヤ・ヴシーリエヅナは、美しい衣裳を身につけて、髪のふさ／＼した六つになる美しい男の子と一緒に、にこ／＼しながら、ハチ・ムラートを客間に迎へた。ハチ・ムラートは兩手を胸に當てながら、や／＼もの／＼しい口調で、自分の家へ招じられたのであるから、公爵を自分の親友と認める、したがつて、親友の家族せんたいはその主人と同様、自分にとつて神聖なものであると、一緒に入つた通辯を介して申し入れた。ハチ・ムラートの容貌も態度も、マリヤ・ヴシーリ

エヴナの氣に入つた。彼女が大きな白い手をさし延べたとき、彼がばつと顔を赧らめたことも、一そう彼女に好感を抱かせる助けとなつた。彼女は腰をおろすやうに勸めて、コーヒーを飲むかどうかと尋ねて後、持つて来るやうに言ひつけた。けれど、ハチ・ムラートはコーヒーを出された時、辭退して飲まなかつた。彼はすこし露西亞語が分かつたけれど、自分で話しは出来なかつた。そして、言はれた事が分からないと、にこ／＼笑顔を見せた。この笑顔がポルトライツキイと同様に、マリヤ・ヴシーリエヴナにも氣に入つた。髪の毛さ／＼した目の鋭い男の子は（母はこの少年をブルカと呼んでゐた）、母親のそばに立つたまゝ、かね／＼偉い勇者と噂に聞いてゐたハチ・ムラートから、すこしも目を離さうとしなかつた。

ハチ・ムラートを妻に委せて置いて、ブロンツォーフは彼の投降を上官に報告するために、必要な命令をさづけて置かうと思つて、事務所の方へ出かけて行つた。グロズナヤにゐる左翼指揮官コズローフスキイ將軍に對する報告と、自分の父親に宛てた手紙を書き終へたのち、ブロンツォーフは大急ぎで家へ歸つた。怒らしてもいけないけれど、あまり甘やかしてもいけない、萬事につけて取り扱ひの難かしい、無氣味な外國人を押しつけたために、妻が不満を感じてゐはしないかと、ブロンツォーフは心配しながら歸つて見ると、それは杞憂にすぎない事が分かつた。ハチ・ムラートはブロンツォーフの繼子のブルカを膝に抱いて、肘椅子に腰をかけてゐた。そして小首を傾けな

がら、マリヤ・ヴシーリエヴナが笑ひながら話すことを、いち／＼取りついでゐる通辯の言葉を、注意ぶかく聞いてゐた。マリヤ・ヴシーリエヴナはこんな事を話してゐたのである。——もし親友の褒めた品物をみんなその親友にやつて了つたら、やがてアダムのやうな姿で暮らさなければならなくなるだらう……

ハチ・ムラートは公爵が入つて來たとき、いきなりブルカを膝からおろして、少年が驚いて憤慨してゐるのも構はず、すぐに今までの巫山戯たやうな表情をやめて、いかつい眞面目な顔つきになつた。ブロンツォーフが腰をおろした時、彼は始めて座についた。彼は先ほどの會話をつゞけながら、マリヤ・ヴシーリエヴナの言葉に答へた——それは自分たちの間の掟なので、親友の氣に入つたものは、なんでも親友にやらなければならぬ。

『あなた息子親友。』彼はまた膝へ上がつて來たブルカの、ふさ／＼した毛を撫でながら、露西亞語でかう言つた。

『この人すてきね、あなたの連れて來た山賊は。』マリヤ・ヴシーリエヴナは夫に向かつて、佛蘭西語でかう言つた。『ブルカがあゝの短刀に見とれてゐるもんですから、あゝの人はそれをやると言ひ出したんですの。』

ブルカは繼父に短刀を見せた。

『C'est un objet de prix ! (これは高價な品ですわ)』とマリヤ・ヴシーリエヴナが言った。

『Il faudra trouver l'occasion de lui faire cadeau (なにか返禮をする機会を)』とブロンツォーフは言った。

ハチ・ムラートは目を伏せながら坐つてゐた。そして、少年のふさ／＼した頭を撫でながら、『勇士、勇士。』と言ひ言ひした。

『立派な短刀だ、立派な短刀だ。』まん中に溝のついてゐる、研ぎすました鋼鐵の刀身をなかば引き抜きながら、ブロンツォーフは言った。『どうもありがたう。』

『なにかお役に立つ事はないか、聞いて見てくれ。』とブロンツォーフは通辯に言った。

通辯はそれを取り次いだ。ハチ・ムラートは即座に、何も要るものはないけれど、たゞこれから祈禱の出来る場所へ連れて行つてほしい、と答へた。ブロンツォーフは侍僕を呼んで、ハチ・ムラートの希望を容れるやうに命じた。

案内された部屋にたゞ一人とり残されたとき、ハチ・ムラートの顔はたちまち一變した。ときに愛想のいい、時にしかつめらしい満足の表情が消え失せて、さも心配さうな表情が浮かんだ。

ブロンツォーフの待遇は、豫期したよりすつとよかつた。けれど、待遇がよければよいほど、彼はブロンツォーフと、その部下の將校を信じなかつた。彼は一切のことを恐れた。いきなり掴まへ

られて、手枷・足枷をかけられた上、西伯利亞へ流されて了ふかも分らないし、あるひはいきなり殺されて了ふかも知れない。で、彼は警戒をゆるめないものであつた。

彼は入つて來たエルダールに向かつて、どこへ部下を落ちつかせたか、どこへ馬を置いたか、武器を取り上げはしなかつたか、などと尋ねた。

エルダールはそれに答へて、馬は公爵の厩に繋がれたし、一同は物置きを當てがはれて、武器はそのまゝに置かれてゐる。そして、通辯が食物や茶を饗應してゐる、と報告した。

ハチ・ムラートは、得心が行かぬといふやうに、首を振つてゐたが、やがて上著をぬいで、祈禱を唱へはじめた。祈禱を終へると、彼は銀の短刀を持つて來いと命じた。そして、上著を纏ひ、帯をしめた後、長椅子の上に胡座をかいて、どうなる事かと待ちかまへてゐた。

四時すぎに、公爵のところへ食事に呼ばれた。

食事のあひだに、ハチ・ムラートはプロフ(羊肉と一緒に煮た米)のほか、なんにも喰べなかつた。それも公爵夫人が取つた所を選んで、そこから自分の皿へ盛つたのである。

『この人は、わたし達が毒を盛りはしないかと、恐れてゐるんですわ。』とマリヤ・ヴシーリエヴナは夫に言った。『わたしの取つたところしか取らないでせう。』それからすぐに通辯を介して、今度また祈禱するのはいつ頃かと、ハチ・ムラートに尋ねた。ハチ・ムラートは五本の指を出して、太

陽を示した。

『では、すぐだね。』

ブロンツォーフは時計を取りだして、ばねを押した——時計は四時と十五分を報じた。ハチ・ムラートはその音に驚かされたらしく、もう一ど鳴らしてくれと頼み、さらに時計を見せて貰った。

『Voilà l'occasion ! Donnez lui la montre (これこそいい折りですわ！その時計をあの人に上げなさいな)』とマリヤ・ブシリエヴナは夫に言った。

ブロンツォーフは、すぐ時計をハチ・ムラートにすゝめた。ハチ・ムラートは手を胸に當てて、時計を受けとつた。彼は幾度もばねを押して、耳を傾けながら、感心したやうに頭を振つてゐた。

食後、メルレル・ザコメーリスキイの副官の來訪が報じられた。

副官が公爵に傳へたところによると、將軍はハチ・ムラートの投降を聞いて、その件について報告がないのを不満に思ひ、即刻ハチ・ムラートを自分のところへ連れて来るやうに、要求してゐるとの事であつた。ブロンツォーフは、將軍の命令どほりにすると答へて、通辯を介してハチ・ムラートに將軍の要求を傳へ、一緒にメルレルのところへ行つてくれと頼んだ。

マリヤ・ブシリエヴナは、副官の訪ねて來た用むきを知ると、すぐ夫と將軍の間に一悶著おこるかも知れないと察して、夫がしきりに止めるのも構はず、夫とハチ・ムラートと一緒に、將軍の

ところへ出かける事にした。

『Vous feriez bien mieux de rester—c'est mon affaire, non pas la vôtre (お前こゝに残つてゐた方がし自身の問題なので、お前の知つた事ぢやなごよ)』

『Vous ne pouvez pas m'empêcher d'aller voir madame la générale ! (だつてわたしが將軍夫人をあなたが邪魔なさる法はないでせう！)』

『それはまたほかの時でもいいだらう。』

『わたし今ゆきたいんですの。』

どうも仕方がなかつた。ブロンツォーフは同意した。で、彼らは三人づれで出かける事にした。

三人が入つて行つたとき、メルレルは陰氣くさいや／＼しい態度で、マリヤ・ブシリエヴナを妻のところへ案内した。そして副官には、ハチ・ムラートを應接室へ通して、自分が命令するまで、どこへも出さないやうに注意した。

『どうぞ。』彼は書齋の戸を明けて、自分よりさきに公爵を入れながら、かう言つた。

書齋へ入ると、彼は公爵の前に立ちどまつて、相手に坐れとも言はずに口を切つた。

『わたしはこゝの軍長官ですから、敵軍との交渉はわたしを通じて行はるべき筈です。一體なぜあなたはハチ・ムラートの投降を、わたしに報告しなかつたのですか？』

『實はわたしのところへ密使が来て、わたしに投降したいといふ、ハチ・ムラートの希望を述べたものですから。』忿怒にかられた將軍の粗暴な言行を豫期して、興奮のあまり青さめながら、同時に相手の怒りに感染しながら、ブロンツォーフはかう答へた。

『わたしはなぜ報告しなかつたのかと聞いてをるんです。』

『わたしは報告するつもりでゐたのですが、男爵、しかし……』

『わたしは君に男爵などと呼ばれる人間ぢやない、閣下です。』

長く抑へられてゐた男爵の憤激は、このとき急に堰を破つて迸り出た。彼は以前から胸のうちに煮えくり返つてゐた事を、洗ひさらひぶちまけて了つた。

『わたしが二十七年間も皇帝陛下に奉仕してゐるのは、つい昨日けふ軍務についたばかりの人間が、親戚關係を利用して、自分に關係のない事まで、人の鼻さきで専斷を敢てするなど、さういふ事をさし許すためではないのだ。』

『閣下、どうかさういふ間違つたことは、言はないで戴きたいものですね。』とブロンツォーフが遮つた。

『わたしは本當の事を言つてゐます。だから斷然ゆるす譯に行かない……』と將軍は一そらいら立たしげに叫んだ。

この瞬間マリヤ・ブシーリエヅナが、スカートをさら／＼鳴らしながら入つて來た。脊のあまり高くない、つゝましやかな、メルレル・ザコメーリスキイ夫人がそれに續いた。

『ねえ、もう澤山でございますわ、男爵。シモン(セミヨンの佛 蘭西風の呼び方)はあなたのお氣を悪くしようなんて、そんなつもりはなかつたのでございますから。』とマリヤ・ブシーリエヅナは言ひ出した。

『いや、公爵夫人、わたしはそんな事を言つてるのぢやありません……』

『ねえ、この話はよした方がよありませんか。譬へにも言ふぢやありませんか、「悪い平和はよい争ひに勝る」つて。あら、わたしとした事が、なにを言つてるんでせう……』彼女は笑ひ出した。
(よき争ひは悪しき平和に勝る、
を間違へたもの——譯者)

怒りつぽい將軍も、この美人の魅力に満ちた微笑の虜にされた。彼の髭のかけに微笑が閃いた。

『正直なところ、わたしが悪かつたのです。』とブロンツォーフが言つた。『しかし……』

『いや、わたしも少しかつとしたもんですから。』とメルレルは言つて、公爵に手をさし延べた。

平和は克復した。そして、ハチ・ムラートは一時メルレルの手もとに置いて、その後で左翼指揮官のところへ送致する事に決定した。

ハチ・ムラートは次ぎの間に坐つてゐた。そして、人々の話してゐる言葉こそ理解しなかつたけれど、理解すべき必要のある事だけは理解した。つまり、彼らが言ひ争つてゐるのは自分のこと

で、自分がシャミールのもとから走つたのは、露西亞軍にとつて非常に重大な事件だ、といふ事であつた。したがつて、もし流刑や死刑に處せられなかつたら、自分は露西亞軍から多くを要求する事が出来る、とかう彼は悟つた。そればかりでなく、彼はかういふ事をも悟つた。ほかでもない、メルレル・ザコメーリスキイは上官でこそあれ、部下たるブロンツォーフが持つてゐるだけの勢力を有してゐない。重要なのはブロンツォーフであつて、メルレル・ザコメーリスキイではない。かういふ譯で、メルレル・ザコメーリスキイがハチ・ムラートを呼んで、いろいろと訊問を始めたとき、ハチ・ムラートは傲然たるもの／＼しい態度を示しながら、自分は白い皇帝に仕へるために山から出たので、一切の答辯はチフリスの總督たる、總指揮官ブロンツォーフ老公爵にのみ與へるつもりだ、と聲明した。

七

負傷したアヴチエーフは、要塞の入り口にある板葺き屋根の、小さな病院へ運ばれ、共同病室の明いた寢臺の一つに置かれた。病室の中には四人の傷病兵が臥てゐた。一人は高熱に苦しんでゐるチブス患者で、いま一人は目の下に青い隈のついた、青白い顔をした瘧やみで、いまにも發作が襲つて來るのを覺悟しながら、絶えず欠伸ばかりしてゐた。あとの二人は、三週間まへの進撃に負傷し

た兵士で、一人は手首を撃たれ（この方は起きてゐた）、いま一人は肩を負傷してゐた（これは寢臺に腰かけてゐた）。チブス患者を除くすべての人々は、新來の患者を取りかこみながら、運んで來た擔架卒にいろ／＼と、根掘り葉掘り尋ねてゐた。

「時によると、まるで豆でも撒くやうにどん／＼撃つたつて、なんともない事があるけれど、今度なんか、せい／＼五發くらゐしか撃たなかつたんだがなあ。」と擔架卒の一人が言つた。

「なにごともしれ／＼運なんだよ。」

「おゝ！」人々がアヴチエーフを寢臺へおろさうとした時、彼は痛みを押しこたへながら、大きな聲でかう呻いた。けれど、寢臺の上に落ちついた時、彼は眉をしかめただけで、もうそれきり唸らなくなつた。たゞ足首だけはのべつ動かしてゐた。彼は両手で傷を抑へながら、ぢつと目の前を見つめてゐた。軍醫がやつて來て、彈丸が脊中へ貫通しなかつたか調べるために、負傷者の體を向かへるやうに命じた。

「これは一體どうしたのか？」脊中や尻に幾つも交叉してゐる白い傷痕を指さしながら、軍醫は尋ねた。

「これは古い傷であります、軍醫殿。」とアヴチエーフは呻きながら言つた。

それは彼が隊の金を飲んで了つたために、答刑に處せられた名残りなのであつた。

アヴチエーフはまたもとのやうに向けかへられた。長いあひだ探針で腹の中を掻きまはして、弾丸を探つたけれど、取り出すことが出来なかつた。傷口を繃帯して、ねとくした膏藥を張りつけたのち、軍醫は行つて了つた。傷をいぢり廻はされたり、繃帯されたりしてゐる間ぢう、アヴチエーフは齒を食ひしぼり、目をつぶつたまゝ、ぢつと横になつてゐた。軍醫が出て行つたとき、彼は眼を見ひらいて、びつくりしたやうにあたりを見まはした。彼の目は傷病兵や看護卒の方に向けられてゐたが、彼はそれを認めることが出来なかつた。彼の目は何かほかのものを見て、それに驚いてゐる様子であつた。

アヴチエーフの戦友パノフと、セリョーギンがやつて來た。アヴチエーフは相かはらず、驚いたやうに目の前を見つめながら、ぢつと横になつてゐた。彼は視線を眞つすぐに、彼らの方へ向けてゐるにも拘らず、長いあひだ戦友を見わけることが出来なかつた。

『おい、ビョートル、何か家へ言つてやる事はないか？』とパノフが言つた。

アヴチエーフはパノフの顔を見つめてゐながら、なんとも返辭をしなかつた。

『なにか家へ言つてやる事はないか、と聞いてゐるんだよ。』友の冷たい骨太な手に觸はりながら、パノフはまたから尋ねた。

アヴチエーフはふと我に復つた様子で、

『あ、アントーヌイチ！』

『あゝ、おれだよ、やつて來たよ。なにか家へ言つてやる事はないか？ セリョーギンが一筆かくよ。』

『セリョーギン、』やつとの事で視線をセリョーギンに移しながら、アヴチエーフはかう言つた。

『書いてくれるか？ ……ぢや、かう書いてくれよ——倅のベトルーハが、親父さんのご長命を祈つてゐるつて……おれは兄貴を怨んでた（この話は今朝お前にして聞かせたらう）。だが、今ぢやおれも喜んでゐる。なに、達者で暮らすがいい。神さまのお蔭で仕合はせにやつて行きや、おれはそれが嬉しい、とこんな風に書いてくれ。』

かう言つた後、彼はパノフに眼を据ゑて、長いあひだ押し黙つてゐた。

『ときに、パイプは見つかつたかね？』と不意に彼は尋ねた。

パノフは返辭をしなかつた。

『パイプ、パイプは見つかつたかと聞いてゐるんだよ。』とアヴチエーフは繰り返した。

『袋の中にあつた。』

『そりやよかつた。さあ、ぼつ／＼蠟燭をくれよ、おれはこれから死ぬんだから。』とアヴチエーフは言つた。

この時ポルトライツキイが、部下の見舞ひに來た。

『どうだ、おい、よくないか？』と彼は言った。

アヴチエーフは眼をとちて、首を横に振つた。頰骨の張つた彼の顔は青ざめて、いかめしかつた。彼はなんとも答へないで、またパノフの方へ向きながら、同じことを繰り返した。

『蠟燭をくれ、もう死ぬんだから。』

蠟燭が彼の手に渡された。けれど、指が曲がらないので、指と指のあひだに挟んで、そばから持ちこへてやつた。ポルトライツキイは出て行つた。彼が去つてから五分ばかりたつた時、看護卒はアヴチエーフの心臓に耳を當てて、もう事きれたと言つた。

アヴチエーフの死は、チフリスへ送られる報告書へ、次ぎのやうに書かれた。

『十一月二十三日、クーリン聯隊の二箇中隊は、伐木のため要塞外に進出せり。正午、山圍の一團突如として伐木隊を襲ひしをもつて、散兵線は退却を開始せり。しかしてこの間、第二中隊は銃劍突撃をもつて、山圍を潰走せしめたり。この戦闘に兵卒二名輕傷を負ひ、一名戰死せり。敵は約百名の死傷者を出だせり。』

八

ペトルーハ・アヴチエーフが、ブズドギーゼンスク病院で死んだ當日、年とつた父親と、ペトルーハに兵役を代はつて貰つた兄の妻と、もう嫁入り盛りになつてゐるその娘が、かたく凍てた打穀場で、燕麥を叩いてゐた。前の晩に雪が深くつもつて、明け方から凍てが厳しくなつて來た。老人は三番鶏の聲を聞いて目を醒ました。そして、白く凍つた窓に鮮かな日影を見ると、暖爐の上から匍ひおりて、靴をはき、外套をまとひ、帽子をかぶつて、打穀場へ出かけた。そこで二時間ばかり働いたのち、老人は家へ歸つて、息子と女たちを起こした。女房たちと娘が打穀場へ來て見ると、地面は綺麗に掃き清められて、木のシヨベルがさら／＼した白い雪にさし込まれ、そのそばには箒が逆さまに立つてゐた。燕麥の束は、掃き清められた打穀場の上に、穂を向け合つて、行儀よく二列に竝んでゐた。人々はてんでに唐竿を把つて、三人でうまく拍子を合はせながら、麥を叩きはじめた。老人は麥程がつぶれるくらゐ、重い唐竿で強く叩いた。娘は上側を規則たゞしく打ち、嫁はその束を引つくり返してゐた。

月が沈んで、東が白みはじめた。もうそこに竝べられた麥束が、しまひになりかかつた頃、長男のアキームが半外套に帽子といふ恰好で、働いてゐる人たちの傍へよつた。

『お前なんだつてのらくらしてゐるだ？』父親は手をとめて、唐竿にもたれながら、から囀鳴りつけた。

『だつて、馬の世話をしてやらなけりやならんでねえか。』

『馬の世話をしてやらなけりや。』と父親は口まねをした。『そりや婆さんがするよ。さあ、唐竿を持って。いやにぶく／＼肥つて來やがつて、この酔ひどれめ。』

『一體お前が飲ましてくれたとでも言ふのか？』と息子は口の中でぶつ／＼言つた。

『なに？』老人は眉を擧めて、唐竿の打ちこみを外づしながら、威嚇するやうに問ひ返した。

息子は無言のまま唐竿を把つた。そして今度は四本の唐竿が、トラップ・タ・パ・タップ、トラップ・タ・パ・タップ……と響きはじめた。トラップ——三本の唐竿がおりの後で、老人の重い唐竿がどつしりと打ちこまれる。

『どうだ、その頸すぢは、まるで食ひ肥つた牡羊みたいだ。見ろ、おれなんざ股引きがすりさうなほど痩せてるによ。』と老人は打ちこみを外づしながらも、拍子を狂はさないやうに、空中で唐竿を一まはししながら、かう言つた。

そこに竝んでゐるだけの束を打ち終はつたので、女たちは熊手で麥稈を掻きのけ始めた。

『ペトルーハの奴は、手前の身がはりになつて行くなんて、莫迦なことをしたもんだ、手前なんかこそ兵隊にでも行つたら、その莫迦を叩き直して貰へるだらうに。ペトルーハが家にゐてくれたら、手前なんかの五層倍も役に立つたものを。』

『もう澤山だよ、父つつあん。』ちぎれた結び藁をはねのけながら、嫁はかう言つた。

『いや、手前たちのやうなものを五人六人養つたつて、一人だつて碌な稼ぎをする奴はありやしねえ。ところが、ペトルーハの奴は、一人で二人前の働きをしたもんだ。手前たちなんかとはまるで譯が違はあ……』

家の方から細い小徑づたひに、老婆が近よつて來た。しつかり足に巻きつけた毛織りの脚絆の上から、新しい木の皮靴をはいて、雪をきし／＼軋ませてゐた。男二人がまだ箕にかけない麥粒を、うづ高く掻きよせると、女たちはその跡を掃きとつた。

『いま監督が家へ見えて、お邸の仕事へ出ると言はつしやつたよ。みんなで煉瓦を運ぶんだつて。』と老婆が言つた。『わしは朝めしの支度をしといたよ。行つて食はねえかね。』

『うむ、よし。栗毛を馬車につけて出かけるがいい。』と老人はアキームに言つた。『だが氣をつけろ、この間のやうちやだめだぞ。手前の尻ぬぐひなんかさせられちや、たまつたもんぢやねえ。ちつたあペトルーハの事を考へて見るがいい。』

『あれが家にゐた時分は、始終ことばかり言つてた辭に、』とこんどはアキームも父に食つてかかつた。『あれがゐなくなると、おれを目的かたきにするんだ。』

『そりや身から出た錆で、仕方がないよ。』母もやはり腹だたしげに言つた。『お前とペトルーハち

や比べものになりやしねえ。』

『まあいいよ。』と息子は言つた。

『まあいいよもねえもんだ。こないだ粉の賣り上げを飲んで了ひやがつた癖に、まあいいよたあ、よく言へた。』

『濟んだ事はもう二度と言はねえもんだよ。』と嫁が口を入れた。

やがて一同は唐竿を置いて、家路へ赴いた。

この親子の不和はもう久しい前からの事で、ほとんどピョートルの入營以來であつた。もうその時から老人は、鷹を薦にすり代へられたやうな氣持ちがした。もつとも、掟によれば子のないものが、女房もちの代はりに行くのが本當である、それは老人も合點してゐた。アキムには子供が四人もあつたが、ピョートルにはなんにもなかつた。けれど、ピョートルは父親似の働きものであつた。はしつこくて、目はしが利いて、力があつて、辛抱づよく、それに何よりありがたい事には、仕事すきであつた。彼はいつも働いてゐた。働いてゐる人のそばを通りすぎても、彼はもと老父がよくしてゐたやうに、すぐその手傳ひをしてやつたものである。大鎌を振つて草場を一往復したり、車に乾し草を積みこんでやつたり、木を一本くらゐ伐り倒したり、薪を割つてやつたりするのである。老人は彼を手ばなすのが惜しかつたけれど、どうにもしやうがなかつた。兵隊にとられる

のは、死ぬるのも同じであつた。兵隊に採られたら最後、切りはなされた麵麩きれのやうなもので、その當人のことをよくよく考へて見たところで、たゞ胸をかきむしられるばかり、なんの役にも立たぬ話である。たゞときどき長男をたしなめるために、老人は今日のやうに、乙息子のことを想ひ起こすのであつた。けれど、母親はしよつちう彼のことを思ひ出して、もう去年あたりから、ペトルーハに金を送つてくれと老人にやかましくねだつてゐた。けれど、老人はいつも知らん顔をしてゐた。

アヴヂェーフの家は豊かな暮らしをしてゐて、老人は小金もすこし隠してゐたが、彼はどうしても臍くりにつける氣になれなかつた。ところがいま老婆は、彼が乙息子のことを言ひ出したのを聞いて、燕麥の賣り上げからほんのルーブリでも、息子のところへ送つてやるやうに、ねだりつけようと決心した。で彼女はそれを實行した。若いものらが邸仕事へ行つたあとで、老人とさし向かひになつた時、彼女は夫をくどいて、燕麥の賣り上げからルーブリだけ、ペトルーハに送ることを納得させた。かういふ譯で、箕で煽り分けられた燕麥の中から、四石ばかり吠に詰められ、その吠が木針で几帳面にとめられて、三臺の桶につみ込まれたとき、老婆は教會の伴僧に口授して書いて貰つた手紙を、夫の手に渡した。老人は町でこの手紙にルーブリ添へて、宛て名どほりに届けさせると約束した。

老人は新しい毛皮外套に長衣カウケンを著こみ、さつぱりした白い羅紗の脚絆を巻いて、手紙を受けとると、それを財布の中へしまひ込んだ。それから祈禱を唱へて、前の櫓に乗りこみ、町へ向けて出發した。後の櫓には孫が乗つてゐた。町へ著くと、老人は宿の庭番に手紙を讀んで貰つて、わが意を得たりといふやうに、注意ぶかく聞いてゐた。

ペトルーハに宛てた母親の手紙には、まづ第一に親として祝福が述べられ、第二には一同の挨拶が傳へられ、名づけ親の死が報せられてあつた。そして最後にアクシーニヤ（ビョートルの妻）が彼らと暮らすのをいやがつて、奉公に出たといふ知らせが書きそへてあつた。噂によると、アクシーニヤは立派に、眞當まことなくらしをしてゐるさうだから、安心してくれと言つて、その後へ例のルーブリの送金のこと、一筆書きくはへられてゐた。それから更に、愁ひに沈んだ老婆が涙ながらに口授くじゆするのを、一語々々もれなく伴僧の書きとつた文句が添へてあつた。

『それから、わたしの可愛い息子、わたしの大事なペトルーシエンカ、わたしはお前が戀ひしさに、目を泣き腫らして了うた。わたしの懸けがへのないペトルーシヤ、お前はわたしを置いて行つて、誰を手頼りにしろと言ふのやら……』こゝまで來ると、老婆はわつと泣き出しながら、かう言つた。

『それでもう宜しうござります。』

これがそのまゝ手紙に書きとめられた。けれどペトルーハは、妻が家を出たといふ知らせも、ルーブリの送金も、母の最後の言葉も、受けとれない約束事になつてゐたのである。ペトルーハが皇帝と、祖國と、正教の信仰を守るために、戰場で討ち死にした（これは軍隊書記の書いた言葉なのである）といふ報告と一緒に、手紙も金も、家へ送り還された。

老婆はこの知らせを受けると、時間のゆるす限りおい／＼泣いてゐたが、やがて仕事に取りかかつた。次ぎの日曜に、彼女はさつそく教會へ行つて、法要を勤めたのち、ペトルーハを過去帳の中へ書きこんで貰ひ、神の僕しもべビョートルの後世を弔ふために、聖餅せいひやくを一きれづつ善男善女に分けてやつた。

妻のアクシーニヤも、愛する夫の死を聞いて、やはりおい／＼泣き出した。彼女はたつた一年しか、亭主と一緒に暮らさなかつたのである。彼女は夫を惜しみ、臺なしになつた自分の一生を嘆いた。そしておい／＼泣きながら、ビョートルのふさ／＼したうす色の毛や、その愛情や、身なし子のワンカをかゝへた、自分の苦しい生活などを泣き口説いた。そして、ペトルーハが兄ばかり氣の毒がつて、他人の間をさすらひ歩く不幸な自分を憐れまなかつたのを、悲痛な言葉で責めるのであつた。

けれど心の深い奥底では、アクシーニヤはビョートルの死を喜んでゐた。いま彼女は、雇ひ主に

なつてゐる番頭の種を宿してゐたのである。もうからなければ、誰も彼女を悪ざまに言ふものがないばかりか、番頭も彼女をくどき落とす時に言つた通り、彼女を女房にする事が出来るからであつた。

九

露西亞公使の子息として、英吉利で教育された總督ミハイル・セミョーヌイチ・ブロンツォーフは、當時の露西亞顯官の間にあつて、珍らしく教養の高い人であつた。彼は虚榮心が強かつたけれど、概して柔らかな性質であり、目下のものには愛想よく、目上の人に對して優雅な態度を示す、宮中式の人物であつた。彼は権力と服従といふものを抜きにしては、人生を理解することが出来なかつた。彼は高位高官を極め、最高の勲章を授けられ、巧妙な軍指揮官として知られてゐたばかりでなく、クラースノエの會戦に於けるナポレオンの征服者ときへ認められてゐた。一八五二年には齡七十を越えてゐたが、それでも彼はまだみづ／＼してゐて、すべての動作が元氣に満ちてゐた。殊に感心なのは、洗煉された微妙な才智を縦横に驅使しながら、自己の権力を維持し、名聲を強固にし擴大する、見事な腕前であつた。彼は莫大な財産を持つてゐた上に、（それは彼自身のみばかりでなく、ブラーニツカヤ伯爵令嬢たる妻の財産をも含んでゐた）、總督としての巨額な俸給を受けつてゐたので、クリミヤの南海岸における宏壯な邸宅と庭の設備に、収入の大部分を費やしてゐた。

一八五二年十二月四日の夕方、チフリスにおける彼の邸に、一臺の郵便用三頭馬車トリイカが乗りつけた。コズロフスキイ將軍から、ハヂ・ムラト投降の情報を齎らした將校は、埃で全身まっ黒になつて、疲れた足の筋を伸ばしながら、歩哨のそばを通り過ぎて、總督邸の廣いポーチに進んだ。それは晩の六時ごろで、ブロンツォーフは食事に出かけるところであつた。そのとき急使の到着が報じられたのである。ブロンツォーフは猶豫なく急使に接見した。そのために食事が幾分か遅れた。彼が客間へ入つたとき、公爵夫人エリザベータ・クサエーリエヴナの周りに腰かけたり、窓ぎはに三々五々かたまつて立つたりしてゐた、三十人ばかりの招待客は、一齊に立ち上がつて、入つて來た總督の方へ顔を振りむけた。ブロンツォーフは肩章の代はりに略章をつけた、いつもの黒い軍服を着て、頸に白の十字章を吊るしてゐた。綺麗に剃り上げた顔は、氣持ちのいい微笑を浮かべ、兩眼は一座の人々を見まはしながら、心持ち細められてゐた。

柔らかな忙しげな足どりで部屋に入ると、彼は婦人客に遅刻を謝し、男客に挨拶して、グルヂヤの公爵夫人マナーナ・オルエリアニのそばに近よつた。彼女は年のころ四十五ばかり、東洋型のよく肥えた脊の高い美人であつた。ブロンツォーフは彼女を食卓へ導くために、手をさし延べた。エリザベータ夫人は、剛こばさうな口髭を生やした赤毛の將軍に腕をかした（この將軍は今度チフリスへ來た人なのである）。グルヂヤの公爵は、主婦の親友であるシャウゼール伯爵夫人の手を取つた。醫

師アンドレーフスキイ、副官その他の人々は、夫人の腕をとつたり、あるひは相手なしの一人きりで、この二組のあとに續いた。揃ひの上著を著込み、長靴下に短靴といふいで立ちの従僕らは、席につく人々のために椅子を退いたり、また進めたりした。侍僕頭は莊重な手つきで、湯氣の立つスーブを銀の壺から、人々の皿につき分けた。

ブロンツォーフは、長い卓子のまん中に座を占めた。その向かひには、彼の妻が將軍と並んで坐つた。將軍の向かひ側には、ブロンツォーフと組んで來たグルジャ美人のオルゴリアニ、その左にはすらりとして、血色のいい、黒髪のグルジャ公爵令嬢が、全身に寶石類を輝かしながら、絶えずにこにこ微笑してゐた。

『Excellentes, chère amie! (すばらしいものだよ、お前!)』急使がどんな報告を齎したか、といふ夫人の問ひに對して、ブロンツォーフはかう答へた。『Sinon a eu del a ch a roe! (セミヨンのやつ)』

それから彼は、食卓についてゐる一同の耳へ入るやうに、驚くべき報告を披露した——もつとも、それは彼一個にとつて、別に新しい知らせではなかつた——ほかでもない、シャミールの片腕となつてゐた高名な勇將ハチ・ムラートが、露西亞軍へ投降して、今日あすにもチフリスへ連れて來られる、といふ事であつた。食事をしてゐたすべての人——長い卓子の末座に坐つて、それまで何やら小聲に笑つてゐた若い連中や、副官や、役人連まで、急に鳴りを鎮めて、耳を傾けた。

『ねえ、將軍、あなたはそのハチ・ムラートにお會ひになりましたか?』公爵が話しやめたとき、夫人は隣りに坐つてゐる剛い口髭を生やした、赤毛の將軍にから問ひかけた。

『ええ、一度や二度ちやありません、公爵夫人。』

それから將軍は、一八四三年に山匪がゲルゲビルを占領した後、ハチ・ムラートがバセク將軍の支隊に遭遇して、ほとんど衆人環視の前で、ゾロトウーヒン大佐を半殺しにした、その顛末を物語つた。

ブロンツォーフは、將軍が熱心に話したのを、満足に思つたらしく、氣持のいい微笑を浮かべながら、その物語を聞いてゐた。と、不意にブロンツォーフの顔はそはくした、ものうい表情を帯びて來た。

話しに身の入つた將軍は、二度めにハチ・ムラートと出會つた物語りにかかつた。

『閣下、ご記憶でいらつしやいますか。』と將軍は言つた。『あの乾麵^{パスタ}遠征のとき、わが救助隊に伏兵戦を試みたのも、やはりあいつでしたなあ。』

『どこで?』ブロンツォーフは目を細めながら、から問ひかへした。

それはかういふ譯なのである。勇敢な將軍が「救助」と稱してゐるのは、かの不運なダルゴ遠征のことであつて、もし新たに送られた救援隊が間に合はなかつたら、全支隊は指揮官ブロンツォー

フ公爵とともに、まさしく全滅をまねかれなかつた筈である。ブロンツォーフを指揮官に戴いてゐたダルゴ遠征が、徹頭徹尾、露軍にとつて恥辱の連続であつたのは、もう周知の事實なのである。なぜと言つて、露軍は多数の死傷者と、數門の砲を失つたからである。従つて、もし誰かブロンツォーフのゐる前で、この遠征の話を持ち出すとすれば、それはたゞブロンツォーフが皇帝に呈した上奏文と同じやうな意味で、つまりこの戦争が露西亞軍の華々しい功業であつた、といふ意味でのみ語り得ることであつた。ところが救助といふ言葉は、この戦役がはな／＼しい功業どころか、多数の生命を失つた悲しむべき過失であることを、端的に意味するものであつた。一同はその事を理解したので、或るものは將軍の言葉に氣づかないやうな風をするし、或るものはどうなる事かとびく／＼してゐた。また或るものはや／＼笑ひながら、目と目を見合はせてゐた。たゞ剛い口髭を生やした赤毛の將軍ばかりは、まるでなんにも氣がつかないで、話に夢中になりながら、落ちつき拂つてから答へた。

『あの救助隊が驅けつけたときですよ、閣下。』

いつたん得意な話題へのりかかつた將軍は、「あのハヂ・ムラートがいとも鮮かに、支隊を眞つ二つに兩断して了つたので、もし救援隊が來なかつたら、」彼は救援隊といふ言葉を、特別な愛情をもつて繰り返してゐるやうに思はれた。「それこそみんな、その場に死骸を並べたに相違ない。し

たがつて……」といつた風な調子で、詳細に語りつゞけた。

けれど、將軍は最後まで語り終ることが出來なかつた。それはマナーナ・オルエリアがその場の状態を悟つて、チフリスの宿舍の居心地はどうかなどと、さまざまの質問を持ちかけながら、將軍の話しを揉み消して了つたからである。將軍はびつくりして一同を見まはした。そして、食卓の端からちつと執拗に、意味ありげな視線をそゝいでゐる自分の副官を見ると、急に合點が行つた。彼はグルジャの公爵夫人に返辭をしないで、眉を蹙めながら口を嚙むと、前に置かれてゐる皿の料理を、ろくろく咬みもせず、大急ぎで喰べはじめた。それは彼にとつて得體の分からぬ形をした喰べもので、味さへ不思議なものに思はれた。

みんなばつが悪くなつて來た。けれどその場の氣まづさは、グルジャの公爵によつて救はれた。彼はきはめて愚鈍な人物であつたけれど、なみはづれて巧妙な宮中式の追従ものであつた。ブロンツォーフ公爵夫人の反対側に坐つてゐたが、まるで何ひとつ氣のつかないやうな顔をして、ハヂ・ムラートがメフトゥーリイのアフメート・ハンの寡婦を掠奪した顛末を、大きな聲で話した。『夜村へ入りこんで、必要なものを引つさらふと、そのまゝ部下を引きつれて逃げて了つたのです。』

『なぜその女でなければならなかつたでせう？』と公爵夫人は尋ねた。

『それはあの男が、アフメート・ハンと仇同志だつたけれど、ハンの死ぬまで出くはす機会がなかつたので、結局その後家さんに復讐した譯なのです。』

公爵夫人は、グルジャの公爵の隣りに坐つてゐた、仲よしのシュアゼール伯爵夫人に、この話しを佛蘭西語に翻譯して聞かせた。

『Quelle horreur! (なんて恐ろしい事だ!)』伯爵夫人は目を閉ぢて、頭を振りながら言つた。

『いや、違ひます。』とブロンツォーフは微笑しながら言つた。『わたしの聞いたところでは、あの男は武士的作法をもつて、捕虜の婦人に對したばかりでなく、あとで釋放してやつたさうです。』

『でも、身のしろ金と引き替へでせう。』

『いや、それは無論ですが、それでも彼の行爲は高潔なものですよ。』

かう言つた公爵の言葉は、それから後のハチ・ムラートに關する會話の調子を一定した。宮中生活に馴れた人たちは、ハチ・ムラートの價値を大きくすればするほど、ブロンツォーフ公爵の機嫌がいいわけだと悟つた。

『あの男の勇敢さは驚くべきものです! 實に立派な人物です!』

『さうですとも、一八四九年には、白晝テミール・ハン・シューラへ暴れこんで、店といふ店をみんな叩き毀したですからね。』

食卓の末席に坐つてゐたアルメニヤ人は、その當時テミール・ハン・シューラに住んでゐたので、ハチ・ムラートの表はしたこの勳功を詳細に物語つた。せんたいに、食事はハチ・ムラートの話で持ちきりであつた。一同は先を争つて彼の勇氣や、智力や、寛仁大度を賞讃した。誰かその中で、彼が二十六人の捕虜を殺すやうに命令した、といふ話を持ち出した。けれどそれに對しても、『それがどうしたのです、à la guerre, comme à la guerre! (戦争は戦争らしくしな) (くちやなりませんよ!)』といふ決まり文句の反對に揉み消されて了つた。

『あれは偉大な人物です。』

『もしあの男が歐羅巴に生まれてゐたら、第二のナポレオンになつたかも知れませんよ。』人に取り入る天賦の才能を持つてゐた、愚かなグルジャの貴族がかう言つた。

彼はナポレオン撃破の殊勳によつて、白十字章を頸にかけてゐるブロンツォーフを喜ばすためには、なんでもナポレオンの事を言ひさへすればよいといふ事を、ちやんと心得てゐたのである。

『さあ、ナポレオンとまでは行かないでせうが、すごい騎兵の將官くらゐのところは、間違ひないでせうな。』とブロンツォーフは言つた。

『ナポレオンでなければ、ミュラートでせう。』

『だから、あの男の名前もハチ・ムラートなんですよ。』

『ハチ・ムラートが去つた以上、こんどこそシャミールもお了ひですな。』と誰かが言った。
『彼らも今度こそは（この今度こそと言ふのは、つまりブロンツォーフが出馬したら、といふ意味なのであつた）、もう支へきれないと感じてゐるでせうよ。』といま一人が言った。

『Tout cela est grâce à vous ! (これもみんなあなたのお蔭ですわ!)』とマナーナ・オルゴリアニが言った。

ブロンツォーフ公爵は、四方から浴びせかけられる阿諛の波を、調節しようと骨折つた。けれどもなんとやつても、愉快な事に相違なかつたので、彼はこの上もない上機嫌で、相手の婦人を食卓から客間へ案内した。食後、客間でコーヒーが出た時、公爵は一同に對して、かくべつ愛想がよかつた。彼は剛さうな赤い口髭を生やした將軍に近づいて、相手の無作法に氣がつかかなかつたやうな振りをして見せた。

すべての客を一巡したのち、公爵は歌留多机に向かつて腰をおろした。彼は昔風のロムベルといふやり方しかなかつた。公爵の相手はブルジャの公爵と、公爵の侍僕にロムベルのやり方を習つたアルメニヤの將軍と、最後に上流社會で勢力のある、有名な醫師アンドレーフスキイであつた。

アレクサンドル一世の肖像のついた、金の煙草いれをそばに据えて、ブロンツォーフは上等の歌留多の封を切り、札を撒かうとした。と、そのときチ・ワンニといふ伊太利人の侍僕が、銀盆の上

に手紙を載せて入つて來た。

『また飛脚でございます、御前。』

ブロンツォーフは歌留多を置いて、客に失禮を謝しながら、封を切つて讀みはじめた。

手紙は息子から來たもので、ハチ・ムラートの投降と、メルレル・ザコメーリスキイとの衝突を報じてゐた。

公爵夫人はそばへ寄つて、息子がどんな事を書いてよこしたかと尋ねた。

『やはり例のことだ。Il a eu quelques désagrémens avec le commandant de la place, Simon a eu tort. But all is well that ends well. (要塞長官との間にちよつと厭なことがあつたらしい。セミン) 』
と彼は妻に手紙を渡しながら言つた。そして、うやくしく待つてゐる相手の人々に向かつて、歌留多を手を取つてくれと頼んだ。

まづ最初の一まはりが済むと、ブロンツォーフは煙草いれを開いて、いつも特別機嫌のいい時にする癖を出した。それは年よりらしい皺のよつた白い手で、佛蘭西煙草を一つまみ取り出し、それを鼻のそばへ持つて行つて、そのまゝばつと撒いて了ふのであつた。

翌日、ハチ・ムラートがブロンツォーフ邸へ出頭したとき、公爵の應接室は人でいっぱいだった。そこには剛い口髭を生やした昨日の將軍が、大禮服にありたけの勳章をつけて、暇乞ひに来てゐた。またそこには兵站部の金を私したといふかどで、軍事裁判に附せられやうとしてゐる聯隊長もゐた。醫師アンドレーフスキイの保護を受けて、ブートカの專賣權を握り、こんど契約の繼續を運動してゐる、アルメニヤ人の富豪もゐた。年金の支給か、遺兒の官費教育を請願にやつて来た、全身黒づくめの戦死將校の未亡人もゐた。廢止された教會領地を手に入れようと運動してゐる、すばらしいグルジャ風の衣裳を著た、零落したグルジャの公爵もゐた。高架索征服の新しい方法を建議した、非常な祕密書類を抱へてゐる地方警察署長もゐた。それから公爵を訪問した事を、國へ歸つて話したいばかりに來た、韃靼の汗もゐた。

一同は順番を待ちながら、うす色の髭をした美しい青年副官に案内されながら、一人づつ公爵の部屋へ入つて行つた。

ハチ・ムラートがびつこを引きながら、元氣のいい足どりで應接室へ入つて來たとき、一同の眼はたちまち彼の方へそゝがれた。彼は自分の名前があちこちで囁かれるのを聞いた。

ハチ・ムラートは、襟に細い銀モールを入れた蔭いろの下著の上に、まつ白な長いチュルケス外套を著てゐた。足には黒い皮の脚絆をつけ、手袋のやうにびつたり足の甲を包んだ、同じやうな

柔らかい靴をはいてゐた。頭には頭布イブツを巻いた毛皮帽子をかぶつてゐた。彼はこの頭布イブツのために、アフメート・ハンの密告で、クリュゲナウ將軍に捕縛されたのであつて、つまりこの頭布イブツこそは、彼をシャミールの味方にした原因なのである。ハチ・ムラートは、應接室の嵌木床ベネットの上をすばやく歩きながら、軽いびつこのために、足の短い方へすりとした全身を傾けてゐた。左右の距離の遠い两眼は、落ちつき拂つて前方を眺めながら、誰の顔も見えてゐないやうであつた。

美しい副官はハチ・ムラートに會釋しながら、公爵に取りつぐあひだ、腰をかけてゐてくれと頼んだ。けれど、ハチ・ムラートは坐るのを辭退して、短刀にかるく手をかけ、片足をうしろに引いたまま、蔑さげすむやうな眼つきで一座の人々を見まはしながら、そのまゝ續けて立つてゐた。

通譯のタルハーフ公爵が、ハチ・ムラートに近よつて、話しをしかけた。ハチ・ムラートは氣がすゝまぬらしく、ちぎれちぎれに返辭をした。やがて書齋の中から、警察署長の不平を言ひに來た、クマイク族の公爵が出來て來た。それに續いて出て來た副官が、ハチ・ムラートを呼んで、書齋の戸口まで案内すると、かれ一人だけ戸の中へ入れた。

ブロンツォーフは卓子の端に立つたまゝ、ハチ・ムラートに接見した。總指揮官の老人らしい色の白い顔は、昨日のやうにこゝしてゐないばかりか、むしろ嚴格で莊重に見えた。

緑いろの日よけをつけた大きな窓が、幾つか竝んで、すばらしく堂々たる卓子を据ゑた大きな部

屋へ入ると、ハチ・ムラードは白いチュルケス外套の襟が重なつてゐる邊に、日焼けのした手を當てた。そして目を伏せたまゝ、クムイク語を巧みに操りながら、ゆつくり明瞭に、うや／＼しい語調で話した。

『わたくしは偉大なる陛下、ならびに貴官の宏大なる庇護のもとに身を委ねます。最後の血の一滴まで、白哲の皇帝のために忠勤をつくす事を誓ひます。そして、貴官およびわたくしにとつて、共通の敵であるシャミールとの戦ひに、何かのお役に立ちたいと希望してをります。』

通譯の言葉を聞き終ると、ブロンツォーフはちらとハチ・ムラードを眺めた。ハチ・ムラードもちらとブロンツォーフの顔を見やつた。

この二人の目は両方から出會つて、言葉に言ひ現はせない多くのものを、互に語り合つたのである。しかも、それは通譯の言つた事とは、まるで似つかぬものであつた。彼らは言葉を用ひずに、すつかり正直な心持ちを打ち明けたのである。ブロンツォーフの目はこんな事を言つた——自分はハチ・ムラードの言つた事を、一ことも信用しない、自分は彼が全露國民の敵であつて、しかも永久に變はらない事を知つてゐる。いま彼が屈服してゐるのは、たゞ事情に迫られたがために過ぎない。ハチ・ムラードも相手の腹を見ぬいてゐる癖に、自己の忠誠を誓つてゐるのである。

またハチ・ムラードの眼はかう言つてゐた——この老人は戦争などといふ事よりも、來世のこと

を考へるのが順序なのだが、しかし年こそ取つてゐるけれど、なか／＼の古狸だから、用心しなければならぬ。

ブロンツォーフもこの氣持を察しながら、それでもハチ・ムラードに向かつて、戦争の成功に必要と思つたことを話して聞かせた。

『君、かう言つてくれたまへ。』とブロンツォーフは通譯に言つた（彼は若い將校に對して『君』といふ言葉を使つてゐた）。『わが皇帝陛下は剛毅にましますと同時に、また仁慈深くわたらせられるから、わたしからお願ひ申し上げたら、たぶん過去の罪科をお赦しになつて、皇軍の勤務に採用して下さるに相違ない。通譯したかね？』と彼はハチ・ムラードを見ながら尋ねた。

ハチ・ムラードはもう一度、胸のまん中に手を當てて、生き生きした調子で何か言ひ出した。

通譯の傳へたところによると、彼はかう言つたのである——彼は一八三九年にアヴリヤ地方を統治してゐた時代にも、露西亞に對して忠勤を盡くしたので、もし彼の敵であるアフメイト・ハンが、彼の身を破滅させるために、クリュゲナウ將軍に對して中傷などしなかつたら、決して露西亞に叛きなどはしなかつた筈である。

『分かつてゐる、分かつてゐる。』とブロンツォーフは言つた（もつとも、彼は分かつてゐたとしても、とつづくにそんな事を忘れてゐたに相違ないのである）。『分かつてゐる。』と言つて腰をおろしな

がら、彼は壁のそばに置いてある圓榻を、ハチ・ムラートに指さした。けれどハチ・ムラートは、かうした高貴な人の前で、腰をおろすだけの勇氣がないといふやうに、逞しい肩を竦めて、やはり席につかなかつた。

『アフメート・ハンもシャミールも、どちらもわたしの敵です。』と彼は通辯に向かつて言葉をつづけた。『どうか公爵にさう言つてください。アフメート・ハンも死んで了つたので、復讐することが出来なかつたけれど、シャミールはまだ生きてゐるから、彼に仇を報いない中は、決して死なないつもりです。』彼は眉を擡め、齒をかたく食ひしりながら、かう言つた。

『さう、さう。』とブロンツォーフは落ちついた調子で言つた。『だが、一體どうしてシャミールに復讐するつもりなんだ？』と彼は通譯に言つた。『それに、腰をかけても構はないつて、さう言つてくれたまへ。』

ハチ・ムラートはまた著席を辭退した。そして、通譯の取りついで質問に對して、自分が露西亞軍に投降したのは、彼らを助けてシャミールを亡ぼすためだ、と答へた。

『よろしい、よろしい。』とブロンツォーフは言つた。『だが、結局どんな風にするつもりなんだらう？ まあ掛けたまへ、掛けたまへ。』

ハチ・ムラートは腰をおろして、もし自分がレズギヤ方面の戦線へ派遣されて、一支隊を興へら

れたならば、誓つてダゲスタンの全地方を起たせて見せる、さうすれば、シャミールはもう支へきれなくなるだらう、と言つた。

『それは結構だ。それは差し支へない。』とブロンツォーフは言つた。『わたしも考へて見よう。』

通譯はハチ・ムラートに、ブロンツォーフの言葉を傳へた。ハチ・ムラートは考へこんだ。

『どうか總督にさう言つてください。』彼はまた言ひだした。『わたくしの家族は敵の手中に陥つてゐるのです。だから家族が山中にゐる間は、わたくしは手足を縛られたも同然で、ご奉公が出来かねる次第です。もしわたくしが公然と彼に敵對すれば、彼はわたくしの妻を殺し、母を殺し、子供らを殺すでせう。そこで、わたくしは公爵に家族を救ひ出して戴きたいのです、わたくしの家族を敵の捕虜と交換して戴きたいのです。そのとき始めて、わたくしは命にかけても、シャミールを亡ぼしてお目にかけてまへ。』

『よろしい。よろしい。』とブロンツォーフは言つた。『その事はよく考へて見よう。ところで、これからこの人を參謀長のところへ連れて行つて、自分の立場や、意圖や、希望などを、詳細に陳述させてくれたまへ。』

それでハチ・ムラートとブロンツォーフとの第一回の會見は終つた。

その晩、東洋風に裝飾された新しい劇場で、伊太利のオペラが演じられた。ブロンツォーフは自

分の棧敷きに陣どつた。すると、例の頭布イブをつけてびつこを引いてゐる、ハチ・ムラートの一きは目だつた姿が、土間に現はれた。彼は自分の付き添ひと決められたブロンツォーフの副官、ロリス・メリコフと一緒に入つて来て、第一列に腰をおろした。回教徒らしい東洋風の威厳を保ちながら、驚歎の表情を示さなければかりか、まつたく無關心な態度で、第一幕を見終つたのち、ハチ・ムラートは席を起つた、そして、悠然と見物を見まはしながら、一同の注意を一身に集めたまゝ、場外へ出て行つた。

その翌日は日曜日で、いつもの通りブロンツォーフ家では夜會が催された。大廣間には煌々と燈火が輝いて、冬の園に隠された音楽隊が、演奏を續けてゐた。兩腕から頸筋や胸をむき出した夜會服の婦人たちが（そこには若い人ばかりでなく、かなり年をとつた婦人も交じつてゐた）、華やかな軍服をつけた男と抱き合つて、くるくゝ廻はつてゐた。食器棚ブッフェのそばでは、赤い燕尾服を著こみ、長靴下に短靴をはいた従僕たちが、シャムパン酒をつぎ分けたり、婦人客に菓子をくばつたりしてゐた。總督夫人グランド・ダウもやはり年に恥ぢず、同じやうに半裸體の姿で、愛想のいい微笑をたゞへながら、客のあひだを歩き廻はつてゐた。そして、ゆうべ劇場でとつてゐたのと同じ無關心な態度で、客を見まはしてゐるハチ・ムラートに、通譯を介して二こと三こと、愛想のいい言葉をかけた。主婦につづいてその他の裸體婦人が、ハチ・ムラートのそばに近よつた。そして、恥づかしげもなく彼の前

に立つて、にこにこ笑ひながら、誰も彼も同じことばかり尋ねた。つまり、いま見てゐる事が氣に入つたか、と言ふのである。主ホストのブロンツォーフは、金モールの肩章に金モールの綬をつけ、頸に白十字章をさげた姿で、彼のそばへ近よつた。そして、すべての人々と同じやうに、ハチ・ムラートの目にしてゐる一切のことが、彼の氣に入らない筈はないと確信してゐるらしく、同じやうな質問を向けた。で、ハチ・ムラートはブロンツォーフに對しても、みんなに言つたのと同じやうに、自分たちの方ではこんな事をしない、と簡単に答へて、それがいいか悪いかといふやうな意見は吐かなかつた。

ハチ・ムラートはこの舞踏會の席でも、家族の救助問題について、ブロンツォーフに話しを持ちかけて見たが、ブロンツォーフは聞こえなかつたやうな振りをして、わきの方へ離れて了つた。ロリス・メリコフは後でハチ・ムラートに向かつて、こゝはさういふ用談をすべき場所でない、と言つた。

十一時が打つたとき、ハチ・ムラートはマリヤ夫人から貰つた時計で、その正否を調べて見たのち、もう歸つてもいいかと、ロリス・メリコフに尋ねた。ロリス・メリコフは、歸つても差し支へないけれど、しかし残つた方がよからうと答へた。が、それにも拘らず、ハチ・ムラートはその場に居残らないで、彼の自由と言つて與へられた四輪車に乗つて、自分の宿舎に指定された家へ歸つ

ハチ・ムラートがチフリリスへ来てから五日めに、總督の副官ロリス・メリコフは、總指揮官の命令で彼を訪問した。

『わたしの頭も手足も、總督にご奉公する事を喜んでをります。』いつもの外交的な表情で首をさげ、片手を胸に當てがひながら、ハチ・ムラートはかう言つた。『どうかなんでもご命令を願ひます。』優しくロリス・メリコフの顔を見つめながら彼はかう言つた。

ロリス・メリコフは卓子のそばに置かれた肘椅子に腰をかけた。ハチ・ムラートは、そのま向かひにある低い圓櫛に腰をおろして、兩肘を膝につき、頭を垂れながら、ロリス・メリコフの言ふことに、注意ぶかく耳を傾け始めた。縫紉語を自由に話すロリス・メリコフは、ハチ・ムラートの過去は大體公爵に知れてゐるけれど、彼自身の口から、生涯の歴史を殘らず聞いて來るやうに所望された、とから切り出した。

『あなた一つ話してください。』とロリス・メリコフは言つた。『わたしがそれを書きとめて、後で露西亞語に翻譯しますから。すると、公爵は皇帝陛下のご覽に供される筈です。』

ハチ・ムラートは黙つてゐた（彼は決して人の話しを遮らないばかりでなく、いつも相手がまだ何か言ひはしないかと、暫く待つてゐるのが癖であつた）。やがて彼は頭を上げ、毛皮帽子をうしろへ振り落とすと、例のマリヤ夫人をさへ魅了した、一種特別の子供らしい微笑を浮かべた。

『それは構ひません。』自分の生涯の歴史が皇帝に讀まれるのだと思ふと、さすがに嬉しくなつたらしく、彼はかう答へた。

『どうか始めからすつかり話してください、急がないで。』ロリス・メリコフは、衣囊から手帖を取り出しなが言つた。

『よろしい。しかし、話すことは澤山あります、非常に澤山あります。いろ／＼の事件が山ほどあるので。』とハチ・ムラートが言つた。

『もし一日で話しきれなければ、また日を變へて、その續きを言へばいいですよ。』とロリス・メリコフが言つた。

『最初から始めますか？』

『ええ、一ばん最初から。どこで生まれて、どこで暮らした、といふ事から。』

ハチ・ムラートは頭をたれて、長い間そのまゝの姿勢でゐた。やがて圓櫛のそばに置いてあつた棒を取り上げ、短刀に仕込んである象牙の柄をつけた、剃刀のやうに鋭い金かざりの小柄を取りだ

し、それで棒を削りながら、同時に話しはじめた。

『から書いてください、生まれはツェルメス、われ／＼山民の言葉で言へば、驢馬の頭ほどの小さな町です。』と彼は語りはじめた。『そこからあまり遠くない、著弾距離の二倍くらゐの所に、汗たちの住んでゐるフンザフがあるのです。わたし達の家族は汗たちと親しい間がらでした。わたしの母は兄のオスマンを生んだとき、汗の長男アブヌツァール・ハンに乳を飲ませてゐました。それから、また汗の次男ウンマ・ハンをも養つて、無事に育て上げました。けれどそのために、二ばんめの兄アフメートは死んで了ひました。さて、その次ぎにわたしが生まれた時、汗の妻もやはりブラーチ・ハンを生みました。母はもう乳人に行くのを厭だと申しました。父が行けと言つても、母は承知しないのです。「また自分の子を死なすから、行くのは厭だ。」とかう言ふのです。そのとき父は、痲痺のはげしい人間だったので、短剣で母を斬りました。もしそばのものが連れて逃げなかつたら、母は殺されて了つたに相違ありません。かうして、母はたうとうわたしを手ばなしませんでした。そして、その後自分で歌を作りました……しかし、こんな事は話さなくともいいですか？』

『いや、それもやはり必要です、みんな話してください。』とロリス・メリコフは言つた。
ハチ・ムラートは考へこんだ。彼は自分の母を思ひ出した。彼女が小家の屋根で、毛皮外套につつまれながら、彼を抱いて寝かせつけようとした時、彼は母に脇腹の傷あとを見せてくれと、せが

んだものである。

『さうです。かうして、母は乳人に行きませんでした。』と彼は頭を一ふりして言つた。『汗の妻はほかの女を乳人に雇ひましたが、それでもやはり、わたしの母が好きだつたのです。母はわたし達を汗の御殿へ連れて行つてくれたので、わたし達は汗の子供たちと一緒に遊びました。汗の妻もわたし達を可愛がつてくれました。汗の子供は三人でした——兄オスマンの乳兄弟にあたるアブヌツァール・ハンと、わたしの義兄弟になつたウンマ・ハンと、一ばん末のブラーチ・ハンでした。このブラーチ・ハンは、シャミールに崖から投げ落とされたのですが、しかしそれは後のことです。わたしが十五ばかりの頃、村々を義士たちが遍歴するやうになりました。彼らは木刀で石を叩きながら、「回々教徒よ、ハザブート（異教徒に對する正義の戦ひ）だ！」と叫んだものです。チェチェン人はそんなこの義士に加はりました。アブリア人もだん／＼と、その仲間に入り始めました。わたしはそこら御殿に住んでゐて、まるで汗の兄弟かなんどのやうに、したい放題のことをして、萬事ゆたかに暮らしてゐました。馬もあれば、武器もあり、金にも不自由しないから、面白をかしく日を過ごして、心配ごとなどは少しもありませんでした。こんな風に暮らしてゐる中、カジ・ムラが殺されて、ガムザートがその後を襲ひました。ガムザートは汗たちのところへ使者をよこして、もし汗たちが義戦に加はらなければ、フンザフを廢墟にして了ふと嚇かしました。そこで、一思案しなければ

トのところへやりました。ガムザートはブラーチ・ハンを鄭重に取り扱つて、兄二人をも自分の手もとへ寄越すやうにと、使ひをもつて言はせました。彼は自分の父が兄弟の父に仕へたやうに、自分も三人の兄弟に仕へたいと思ふ、とかういふ言葉を傳へたのです。汗の妻は弱い愚かな女でしたが、氣まゝ勝手に暮らしてゐるすべての女と同じやうに、生意氣な方でした。彼女は二人の息子を**エルスグー**手ばなすのを恐れて、ウンマ・ハンだけやりました。わたしも一緒にいって行きました。一里ばかり手前まで來ると、武士たちがわれ／＼二人を出迎へて、歌をうたつたり、射撃をしたり、二人のまはりで馬の曲乗りをしたりしながら、歓迎の意を示しました。先方へ到着すると、ガムザートは天幕の中から出て、ウンマ・ハンを近づき、彼を汗として迎へました。ガムザートはかう言ひました。「わたくしはあなたの一家に、決して危害を加へた事もなければ、また加へようと思ひません。ですから、あなた方もわたしを殺さないやうに、人々を義戦に勧誘する邪魔をしないでください。わたくしは全軍を率ゐて、わたくしの父があなたのご尊父に仕へたやうに、あなたに仕へるつもりです。どうかわたくしをあなたの家に住まはしてくださいます。わたくしは顧問役としてあなた方を助けるから、あなた方は自分のしたい放題にすればいいのです。」

「ウンマ・ハンが口の重い方でしたから、なんと言つていいか分からないで、押し黙つてゐました。そこでわたしは彼の代りに、もしさういふ譯なら、ガムザートにフンザフへ來て貰ひたい。汗

の妻も汗たちも、禮をもつて彼を迎へる事だらう、とかう言ひました。けれど、わたしは最後まで言ひ終ることが出来ませんでした。そのとき始めて、わたしはシャミールと顔を合はせたのです。彼はやはりその場に、元首のそばにゐたのです。

「お前ではない、汗に尋ねてゐるのだ。」と彼はわたしに申しました。

「わたしは口を噤みました。ガムザートはウンマ・ハンを天幕の中へ案内しました。やがてガムザートはわたしを呼んで、自分の方の使者と一緒に、フンザフへ行くやうに命じました。で、わたしは出かけました。使者たちは汗の妻に向かつて、長子をもガムザートのところへやるやうに、説き始めたのです。わたしは裏切りと見てとつたので、その申し出に應じてはいけない、と汗の妻に勧めました。けれど女といふものは、卵に髪の毛といつたくらゐしか、頭に智慧がないものですから、汗の妻はガムザートの言葉を信じて、息子に出發を命じました。アブヌツァール・ハンは應じませんでした。そのとき汗の妻は、「どうやらお前は恐れてゐるらしいね。」と言ひました。まるで蜜蜂と同じやうに、どこを刺せば一ばん痛いかといふ事を、ちゃんと知つてゐるのです。アブヌツァール・ハンはかつとなつて、それきり母親に口をきかないで、馬に鞍を置くやうに言ひつけました。わたしも一緒に出發しました。ガムザートはウンマ・ハンの時にも増して、われ／＼を鄭重に出迎へました。彼は山をくだつて、著弾距離の二倍くらゐのところまで、馬を進めたものです。そ

の後は、小旗を持つた騎馬の連中が従つて、歌をうたつたり、射撃をしたり、曲乗りを見せたりしました。わたし達が陣營に近づいたとき、ガムザートは汗を天幕の中へ案内し、わたしは馬のところに残りました。

『わたしが山の麓にをりますと、突然ガムザートの天幕の中で、銃聲が起きました。わたしは天幕のそばへ馳けよりました。ウンマ・ハンは血の海の中に突つ伏してゐるし、アブヌツァール・ハンは武士たちと戦つてゐました。その顔は半分斬り割られて、ぶらさがつてゐるのです。彼はそれを片手で抑へながら、片手に短刀を持つて、近よるものを縦横に斬りまくつてゐました。彼はわたしの目の前で、ガムザートの弟を斬り倒し、さらにもう一人に向かはうとしましたが、そのとき武士たちは一齊に鐵砲を放したので、彼はその場に倒れて了ひました。』

ハチ・ムラートは言葉をとめた。その日に焼けた顔は赤黒くなつて、目は血ばしつて來た。

『わたしは急に恐ろしくなつて、逃げ出しました。』

『へえ？』とロリス・メリコフは言つた。『あなたは決して、恐れたりなんかしない人だと思つてゐましたよ。』

『それから後は決して恐れませんでした。それ以來、わたしはいつもこの恥辱を思ひ出しました。そして思ひ出すと、もうなんにも恐ろしくなくなりました。』

一一一

『しかし、今はもう澤山です。祈禱をしなければならぬ。』とハチ・ムラートは言つて、チェルケス外套の胸の内衣囊から、ブロンツォーフの時計を取り出した。そして、大事さうにばねを押して、首を横にかたむけ、子供らしい微笑を懐へながら、ちつと耳を澄ました。時計は十二時と十五分を報じた。

『親友ブロンツォーフ、贈物。』と彼はにこ／＼しながら言つた。

『さう、いい時計です。』とロリス・メリコフは言つた。『それぢや祈禱をおしなさい、わたしは待つてゐますから。』

『ヤクシー(しい)』とハチ・ムラートは言つて、寢室へ引つこんだ。

一人きりになると、ロリス・メリコフは手帖を取り出して、ハチ・ムラートの話しの要點を書きとめた。それから煙草に火をつけて、部屋の中をあちこち歩き始めた。寢室と反対側の戸口に近づいたとき、雑語で早口に何やら言つてゐる賑やかな話し聲が、ロリス・メリコフの耳に入つた。彼はハチ・ムラートの武士たちだと察したので、戸を明けて中へ入つた。

部屋の中には山民獨得の酸っぱいやうな、皮くさい匂ひが籠もつてゐた。窓ぎはの床に敷いた大

外套の上には、破れて油じみた下著をきた、目つかちで赤毛のガムザーロが陣どつて、馬勒を編んでゐた。彼は持ち前のしや嘎れた聲で、何やら熱心に喋つてゐたが、ロリス・メリコフが入ると同時に口を噤んで、彼の方へなんの注意も向けずに、自分の仕事をつゞけた。その前には、陽氣なハン・マゴーマが立つて、白い齒をむき出し、睫毛のない黒い目を輝かせながら、のべつ同じことばかり繰り返してゐた。美男子のエルダールは袖をたくし上げて、男性的な腕を現はしながら、釘に掛けられた鞍の腹帯を拭いてゐた。一ばん主な働き手で、財政監督の任に當つてゐるハネーフィは、部屋の中にもなかつた。彼は臺所で食事の支度をしてゐたのである。

『いつたい何をそんなに議論してゐるんだね?』ロリス・メリコフはハン・マゴーマに挨拶しながら、かう問ひかけた。

『あいつは始終シャミールを褒めてばかりゐるんです。』ロリスに手をさし延べながら、ハン・マゴーマは言つた。『シャミールは偉い人間だ、學者で、聖人で、勇者だと言ふんです。』

『どうして自分から追ん出て行きながら、そんなに褒めてばかりゐるんだらう?』
『追ん出て行きながら褒めてゐるんで。』齒をむき出し、目を光らせながら、ハン・マゴーマは言つた。
『どうだね、本當にあの人を聖人だと思つてゐるのか?』とロリス・メリコフが尋ねた。

『もし聖人でなかつたら、人民どもがあの人を言ふことを聞く筈がありませんよ。』とガムザーロは

早口に言つた。

『シャミールはさうぢやないが、マンストールはたしかに聖人だつたよ。』とハン・マゴーマは言つた。『あれこそ本當の聖人だつた。あの人元首だつたときは、人民がまるで別だつたよ。あの人村々を廻はると、みんな家のそとへ出て、あの人外套の裾に接吻しながら、自分の罪を懺悔して、悪いことをしないと誓つたものです。年寄りたちもさう言つてゐますよ、その當時は人がみんな聖人のやうな暮しをして、煙草も吸はなければ酒も飲まず、祈禱を怠るやうな事もなかつた。お互に怨みを忘れて、流した血まで赦し合つたものださうです。その時分は金でも品物でも拾つたものは、棒に縛りつけて、路ばたに立てて置いたといふ事です。その時分は神さまも人間に成功を授けてくださつて、今のやうな具合ぢやなかつたと言ひますよ。』とハン・マゴーマは言つた。

『今でも山の奥ぢや、酒も飲まなけりや、煙草も吸はない。』とガムザーロが言つた。

『お前のシャミールはラモロイだよ。』ハン・マゴーマは、ロリス・メリコフに目ませをしながらかう言つた。

「ラモロイ」といふのは、山民に對する侮蔑の言葉であつた。

『ラモロイは山の人間だ。』とガムザーロは答へた。『山の中にこそ驚が棲むんだよ。』

『偉いぞ、うまくこじつけやがつた。』ハン・マゴーマは敵の巧みな答辯を喜んで、白い齒を見せな

がら、かう言つた。

ロリス・メリコフの手にしてゐる銀の煙草いれを見て、彼は一本無心した。ロリス・メリコフが、お前たちに煙草は禁物ぢやないかと言つたとき、彼は片目をぼちりとさせて、ハチ・ムラートの寢室の方を顎でしゃくりながら、見てゐない時には構はない、と答へた。そして、すぐに喉へ吸ひこまないで吹かしはじめた。彼は煙を出すときに、その赤い唇を不器用らしく尖らせた。

『そりやよくないよ。』とガムザーロはいかつい調子で言つて、部屋から出て行つた。ハン・マゴーマは、その方へも一ど目をぼちりとさせて、煙草をぶか／＼吹かせながら、絹のベシユメイト下著と白い毛皮帽子を買ふには、どこがよからうかななどと、ロリス・メリコフに尋ねはじめた。

『どうしたんだ、お前はそんなに澤山金を持つてゐるのか？』

『ありますよ、それくらゐのものは。』とハン・マゴーマは瞬きしながら答へた。

『いつたいその金をどこから手に入れたか、まあその男に聞いてごらんなさい。』エルダールは微笑を含んだ美しい顔を、ロリス・メリコフの方へ向けながら、かう言つた。

『なに、博奕で勝つたんですよ。』とハン・マゴーマは早口に言つた。

彼は昨日チフリスの町をぶら／＼してゐると、『繪か字か』(金を投げて裏表を)をやつてゐる、一團の露西亞人とアルメニア人に行き會つた。それは大きな賭けで、金貨三枚のほかに、銀貨が澤山

あつた。ハン・マゴーマはすぐそのやり方を飲みこんで、衣囊イヌの中にあつた銅貨をちやら／＼鳴らしながら、その輪の中へ割りこんで、ありたけの金を賭けると言つた。

『どうしてありたけなんだ？ 一體その場にあるだけの金を持つてゐたのか？』とロリス・メリコフは尋ねた。

『わたしはたつた十二カペイカしか持つてゐませんでしたよ。』とハン・マゴーマは齒をむきながら答へた。

『ふむ、で、もし負けたら？』

『これですよ。』

ハン・マゴーマはピストルを指さした。

『どうなんだね、それを渡すつもりだつたのかね？』

『なんのために渡すんです、逃げ出すんですよ。もし止める奴があつたら、殺してやりますよ——それだけの事です。』

『それでどうしたね、勝つたかい？』

『アイヤ、すつかり掻き集めて、さつさと引き揚げましたよ。』

ハン・マゴーマとエルダールの人物は、ロリス・メリコフもすつかり呑みこんだ。ハン・マゴーマ

マは内部に溢れる生の力を、どうしたらいいか知らないでゐる、陽氣な遊蕩兒であつた。彼はいつも浮き浮きとして、自分の命でも人の命でも、輕はずみに玩んでゐた。この命がけの遊戯のために、こんども露西亞軍に投降したのであるが、明日にもまたこの遊戯のために、再びシャミールの手へ歸りかねない男なのである。エルダールの人物もはつきり呑み込めた。彼は落ちつきのある強い、しつかりした男で、自分の主君に心から心服しきつてゐた。ロリス・メリコフに不可解に思はれたのは、たゞ赤毛のガムザーロばかりであつた。この男はシャミールに心服してゐたばかりでなく、すべての露西亞人に對して、抑へることの出来ない嫌惡と、侮蔑と、憎惡を感じてゐる。それはロリス・メリコフにも見えすいてゐた。したがつてロリス・メリコフは、なぜ彼が露西亞軍に投降したのか、合點が行かなかつた。ハチ・ムラートの投降、乃至シャミールとの軋轢云々の物語は、單なる狂言にすぎないで、その實彼が露西亞軍にくだつたのは、露西亞軍の弱點を見ぬいた後、ふたゝび山へ逃げて歸つて、露西亞軍の手うすな方面へ主力を向けるためではあるまいか——からいふ考へがロリス・メリコフの頭にも浮かんだし、二三の長官連も彼と意見を同じうしてゐた。しかも、ガムザーロはその全存在をもつて、この想像をたしかめてゐるのであつた。

「あの連中や當のハチ・ムラートなどは、自分の計畫を隠すことが出来るけれど、」とロリス・メリコフは答へた。「この男は包みきれない憎惡によつて、自分の本性を暴露してゐるのだ。」

ロリス・メリコフは彼と會話を試みて、退屈ではないかと聞いてみた。けれど、ガムザーロは仕事の手を休めないで、例の片目でロリス・メリコフをはずに見ながら、しは嘎れた聲でぶつきら棒に唸つた。

『いや、退屈なんかしない。』

そのほか何を聞かれても、彼の答へはそれと同じ調子であつた。

ロリス・メリコフが護衛たちの部屋にゐる間に、もう一人ハチ・ムラートの部下が入つて來た。それは顔から頸へ髭がぼう／＼と伸びて、毛皮でも貼りつけたやうに、毛むくじやらの胸を突き出した、アフリヤ人のハネーフィであつた。彼はいつも何か仕事に没頭してゐる岩乗な働き手で、エルダールと同様、理窟なしに主人に服従しきつてゐるのであつた。

彼が護衛の部屋へ米を取りに入つたとき、ロリス・メリコフは彼を呼びとめて、どこからやつて來たのか、すつと前からハチ・ムラートのところにあるのかと、根掘り葉掘りし始めた。

『五年前からですよ。』とロリス・メリコフの問ひに對して、ハネーフィはかう答へた。「わたしはあの方と同じ村の人間なのです。親父があの方の伯父さんを殺したので、あの方の一黨がわたしを殺さうとしました。』殆ど一つに繋がりが合つた眉の蔭から、平然とロリス・メリコフの顔を眺めながら、彼はかう言つた。「そのときわたしは、義兄弟にして貰ふやうに頼んだのです。』

『義兄弟にするとはどういふ事だね？』

『わたしは二箇月のあひだ顔も剃らなければ、手足の爪も切らないで、先方へ押しかけて行きました。すると、わたしはパチマート——あの方のお母さんのところへ連れて行かれました。わたしはパチマートから乳を貰つて、それであの方の義兄弟になつたのです。』

隣りの部屋で、ハチ・ムラートの聲が聞こえた。エルダールは、すぐさま主人が呼んでゐるのを知つて、手を拭きながら、大股に客間へ入つて行つた。

『あちらへ呼んでをられます。』やがて引き返して来た彼は、かう言つた。ロリス・メリコフは、陽気なハン・マゴーマにもう一本煙草をやつて、客間へ赴いた。

一三

ロリス・メリコフが客間へ入つたとき、ハチ・ムラートは愉快さうな顔つきで彼を出迎へた。

『どうです、續きを話させようか？』彼は圓楯に腰をおろしながら、かう言つた。

『え、是非とも。』とロリス・メリコフは言つた。『わたしはあなたの護衛のところへ行つて、みんなと話しをしましたよ。ひとり氣さくな面白い男がゐますね。』と彼はつけ足した。

『さやう、ハン・マゴーマは輕はずみな奴でしてな。』とハチ・ムラートは言つた。

『それから、あの若い美少年も氣に入りましたよ。』

『あ、エルダール、あれは若いけれど、鐵のやうにしつかりした奴です。』

二人は暫くだまつてゐた。

『では先をお話しませうか？』

『どうぞ、どうぞ。』

『わたしはハン兄弟が殺されたところまで言ひましたね。さて彼らを殺したのち、ガムザートはンザーフへ乗りこんで、汗の宮殿に落ちつきました。』とハチ・ムラートは話し出した。『しかし、そこには汗たちの母が残つてゐたので、ガムザートはそれを自分の前へ呼び出しました。すると、汗の母は彼の非業を責め始めたので、彼は部下のアセルデルに目くばせしました。こちらは汗の母のうしろへ廻はつて、一打ちに殺して了ひました。』

『なぜ汗の母まで殺したんです？』とロリス・メリコフは尋ねた。

『どうも仕方がないぢやありませんか。前足で跨いだ以上、後足も入れなければならぬ道理ですからね。一族を全部根こそぎにしなければならなかつたのです。で、それを實行した譯なのです。シヤミールは一ばん末の汗も手にかけて、崖から投げ捨てました。』

『かうしてアプリア全部が、ガムザートに従へられました。たゞわれ／＼兄弟だけが、それを潔し

としなかつたのです。わたし達は汗の代りに、彼の血を見ねばやまない氣持ちだつたのです。われわれは歸順したやうな振りをしながら、どうかして彼の血を奪つてやらうと、たゞそればかり考へてゐました。われ／＼は祖父と相談して、彼が宮殿から出るときを待ち伏せして、討ち取らうと手はずを決めました。ところが、誰かそれを盗み聞きして、ガムザートに知らせたものですから、彼は祖父を呼びつけて、かういふのでした。「氣をつけるがよい、もしお前の孫たちがわしに悪事を企ててゐるといふのが本當なら、お前も彼らと一つ横木にぶら下がらねばならぬぞ。わしは神さまの仕事をしてゐるのだから、わしの邪魔をする譯には行かないのだ。もう行つてもよい。たゞわしの言つた事をよく憶えて置け。」

「祖父は家へ歸つて、事の様子をわたし達に話しました。その時わたし達はもうべん／＼と待たないで、祭の初日に寺院で決行しようと思ひました。けれど、仲間がみんな尻ごみして了つたので、われ／＼兄弟二人だけになりました。」

「わたし達はめい／＼二挺づつのピストルを持つて、その上から大外套を纏ひ、寺院をさして出かけました。ガムザートは三十人の部下を連れて入つて來ました。みんな抜き身の刀を持つてゐるのです。ガムザートの傍には、氣に入りの部下アセルデルがつき添つてゐました——例の汗の母の首を打ち落とした男です。われ／＼の姿を見ると、彼は大外套をぬげと叫んで、わたしの傍へ近よ

りました。わたしは手に短刀の用意してゐたので、いきなりその男を刺し殺して、ガムザートに飛びかかりました。けれど兄のオスマンが、もう彼をピストルで撃ちました。しかし、まだガムザートは生きてゐたので、短刀を揮つて兄に飛びかかりました。その時わたしは彼の頭に斬りつけて、息の根をとめたのです。とはいへ、彼の部下は三十人からゐるのに、わたし達はだつた二人きりでしたから、兄のオスマンはたうとう殺されて了ひました。わたしは血路を開いて窓から飛びだし、そのまゝうまく逃げをほせました。」

「ガムザートが殺されたといふ事が分ると、人民どもは一度に蜂起しました。部下たちは散り散りに逃げて了ひ、逃げなかつたものは一人のこらず殺されて了ひました。」

ハチ・ムラートは話しをやめて、重々しく息をついた。

「それまでは萬事よかつたのですが、」と彼は言葉をつゞけた。「その後ですつかりだめになつて了ひました。シャミールがガムザートの後を襲つたのです。彼はわたしのところへ使者を送つて、一緒に露西亞軍討伐に向かへ、もし拒むなら、ファンザフを廢墟にして、わたしも殺して了ふと威嚇しました。わたしは自分から彼の方へも行かなければ、彼を自分のそばへも寄せつけはしない、と言ひました。」

「なぜ行かなかつたのです？」とロリス・メリコフは尋ねた。

『それは出来ない事だつたのです。シャミールには兄オスマンと、アブメンツァール・ハンの血がかかつてゐたからです。わたしは彼の招きに應じませんでした。それからローゼン將軍が、わたしに士官の位を贈つて、アブリヤの長官に任命しました。それだけならよかつたのですが、ローゼンはアブリヤの統治者として、始めカジクムイフの汗、マホメット・ミルザを任命し、その後アフメイト・ハンを据ゑました。この男がわたしを憎むやうになつたのです。彼は自分の息子の嫁に、殺された汗たちの妹サルタネートを所望したのですが、その縁談が纏まらなかつたのです。彼はそれをわたしのせゐにして、酷く憎むやうになつたのです。そして自分の護衛を送つて、わたしを殺させようとしたが、わたしは巧みに遁れて了ひました。そのとき彼は、わたしの事をクリュゲナウ將軍に讒訴して、わたしがアブリヤ人に向かつて、露西亞軍の兵士に薪をやるなど言ひつけたか、なんぞのやうに言ひ觸らしたので。彼はまたその上に、わたくしが頭布をかぶるやうになつたのは、……つまりこれの事なんです。』ハチ・ムラートは、毛皮帽子の上に巻いた頭布を指さしながら、かう言つた。『これはほかでもない、わたしがシャミールに内通した證據だ、とこんな事まで吹きこみました、將軍はそれを信用しないで、格別わたしに手を下さうとせませんでした。けれど、將軍がチフリスへ去つたとき、アフメイト・ハンは自分の思ひ通りにしました——一中隊ばかりの兵士を連れて、わたしを引つ捕へ、手錠をはめて、鎖で大砲に縛りつけたのです。』

『わたしは六晝夜、かういふ有様で過ごしました。七日めに鎖をとかれて、テミール・ハン・シニールへ連れて行かれました。装填した銃を持つた四人の兵士らが、護送して行くのです。手は縛られたまゝです。もし逃げ出さうとしたら、殺して了へといふ命令なのでした。わたしはそれを知つてゐました。モクソフのほつりを通りかかつた時、道はだん／＼狭くなつて、右手は五十間もある崖でした。わたしは兵士のそばを離れて、右側の崖ぶちへ移りました。兵士はわたしを止めようとして、わたしは崖から飛びおりて、とめようとした兵士と一緒に引きずり落としました。兵士は即座に死にましたが、わたしはこの通り生き残つた譯です。肋も、頭も、手も、足も、みんな折つて了ひました。匍はうとしても、それさへ出来ないくらゐでした。ぐら／＼と目まひがして、そのまま睡つて了ひました。ふと目が醒めて見ると、體ぢう血でべと／＼なのです。それを牛飼ひが見つけて、人々を呼び集め、村へ擔いで行きました。肋も頭ももと通りになつて、足もなほりましたが、たゞすこし短くなつたのです。』

かう言つて、ハチ・ムラートは曲がつた片足をさし伸ばした。

『しかし、ちゃんと使へますから、まあいいです。』と彼は言つた。『みんながこの話を聞いて、わたしのところへやつて来るやうになりました。わたしは全快して、ツエルメスへ移りました。そのときアブリヤ人がまたわたしに、地方を治めてくれと頼みますので、』ハチ・ムラートは落ちつ

た、自信のある、誇らしげな調子でかう言つた。『わたしは承諾しました。』

ハチ・ムラートは急に立ち上つて、鞍囊の中から折り鞆を取りだし、そこから二枚の黄ばんだ手紙を抜き、つて、ロリス・メリコフに渡した。それはクリュゲナウ將軍から來た手紙であつた。ロリス・メリコフはそれに目を通した。第一の手紙にはかう書いてあつた。

『ハチ・ムラート少尉補、貴官が余の部下に所屬せる間、余はその勤務に満足し、貴官をもつて善良なる人物と認めたるが、最近アフメート・ハン中將の余に報じたるところによれば、貴官は裏切り人となり、頭布を著してシャミールと誼みを通じ、露西亞長官に對する反抗を人民に教唆せりと言ふ。余は貴官を逮捕して、余の手もとまで送致すべく命じたるが、貴官は道より遁走せり。余はその事の善惡を知らず。なんとすれば、貴君に罪ありや否やを知らざればなり。乞ふ、余の言ふところを聞け、もし貴官が大皇帝陛下に對して良心のやましきを感じず、身になんらの罪狀なしと自覺せば、すみやかに余のもとへ來たれ。何人をも恐るゝの要なし。余は貴官の擁護者なればなり。汗も貴官になんらの危害をも加ふることなし。なんとすれば、彼みづから余の配下に屬すればなり。故に貴官は何ごゝをも恐るゝの要なし。』

それからクリュゲナウは、自分がいつも約束を重んじ、公明正大を期するものである事を説き、重ねてハチ・ムラートに、自分のところへ來るやうに勧告してゐた。

ロリス・メリコフがこの手紙を読み終つたとき、ハチ・ムラートは更に第二の手紙を取りだし、けれど、それをロリス・メリコフに手渡す前に、彼は第一の手紙にどう答へたかといふ話をした。

『わたしはかう書いてやりました——自分が頭布をかぶつてゐるのは、シャミールのためではなくて、自分の魂の救ひのためである。またシャミールの味方になる事は出來ない、またさうしようとも思はない。なぜと言へば、わたしの父と、兄弟と、親戚が、間接に彼のために殺されたからである。それかといつて、自分の名譽を傷つけた露西亞に降することも出來ない。フンザフでわたしが縛られてゐる時、一人の卑怯者がわたしに……だからこの男が生きてゐる限り、露西亞軍に降るわけに行かないと、かう返事してやりました。それに何よりも、わたしは偽りもののアフメート・ハンを恐れたのです。そのとき將軍はわたしにかういふ手紙をくれました。』ハチ・ムラートはもう一枚の黄ばんだ紙きれを、ロリス・メリコフに渡した。

『余の書簡に對する貴官の返書落掌、多謝、』とロリス・メリコフは讀んだ。『貴官の記すところによれば、貴官は歸順を恐るゝにあらずして、一人の異教徒が貴官に加へたる侮辱によつて、これが實行を妨げらるゝとの事なり。されど露西亞の國法は公明なるをもつて、大膽にも貴官を侮辱したる徒輩の刑罰を、貴官は眼前に目撃するを得べし。そは余の敢て斷言するところなり。余はすでに

この件の調査を命じたり。乞ふ、ハチ・ムラート、しばらく耳を藉せ。貴官は余を信ぜず、余の潔白を信ぜざりし故に、余は汝に不満を抱くべき権利を有するものなれど、概して山民の有する猜疑心を熟知するが故に、余は敢て貴官の過失を赦すべし。もし貴官の良心にして疚しからずんば、また貴官の帯びたる頭布が、眞に靈魂救済のみを目的とするものならば、貴官は青天白日の身なるをもつて、敢然として露西亞政府および余を直視するを得べし。しかして、貴官を侮辱したる犯人は處罰せられ、貴官の財産が返還せらるゝは、余の言明して憚らざるところなり。かくて貴官は、露西亞國法のいかなるものなりやを、みづから感得するに至らん。しかのみならず、露西亞人は一切の事態を別様に觀察するものなり。取るに足らざる一卑劣漢が貴官を侮辱したる事實は、露西亞人の見るところによれば、貴官の品位を落とすに足らざる些事にすぎず。余自身もヒムリヤ族に頭布著用を許可し、これを當然のことと認むるものなり。したがつて、貴官はなんら恐るゝ事なき旨を、こゝに再言す。いま貴官のもとへ派遣したる使者とともに、余のもとに來たれ。このものは余の忠實なる部下にして、貴官の敵の奴隷にあらず。政府の特別なる恩寵を受くるものの親友なり。』

それから先の方でもクリュゲウナは、再びハチ・ムラートに歸順を勧めてゐた。

『わたしはそれを信じなかつたので、』ロリス・メリコフが手紙を読み終つたとき、ハチ・ムラートはかう言つた。『クリュゲウナのところへ行かなかつたのです。第一、わたしはアフメイト・ハン

に復讐しなければならなかつたのですが、露西亞人の手を経ては、それが出来なかつたからです。丁度そのとき、アフメイト・ハンはツェルメスを包圍して、わたしを掴まへるか、殺すかしやうと企てました。わたしの手勢はあまり少かつたので、それを撃退する事が出来なかつたのです。すると、その時シャミールの使者が、わたしのところへ手紙を持って來ました。彼はアフメイト・ハン撃破に助力を與へ、彼を誅戮しようとして約束した上、わたしにアヴリヤ全體の支配權を授けたのです。わたしは長いこと考へたのち、つひにシャミールに組みました。それ以來、わたしは絶えず露西亞軍と戦ひつゞけた譯です。』

それからハチ・ムラートは、自分の軍事行動を殘らず物語つた。それは非常に多くの數に上つてゐたが、ロリス・メリコフも大體その話は聞いてゐた。彼の遠征や侵入は、行動が並み並みならず迅速で、攻撃の仕方が大膽で、しかも常に成功を收めてゐるといふ點に於て、驚歎すべきものであつた。

『わたしとシャミールとの間には、決して友情といふものではありませんでした。』とハチ・ムラートは自分の物語を結んだ。『けれど、彼はわたしを恐れてゐました。そして、わたしは彼にとつて必要な人間なりました。けれど或るとき何かの拍子に、シャミールの死後宗首たるべきものは誰だらう、といふ問ひを持ちかけられました。わたしはそれに答へて、太刀先の鋭いものが宗首になるの

だと言ひました。それがシャミールの耳に入つたものですから、彼はわたしを遠ざけようと思つて、タバサランへ遣はしました。わたしはそこへ行つて、千頭の羊と、三百頭の馬を奪つて來ました。けれどシャミールは、わたしの仕事を見當ちがひだと言つて、わたしから領主の位を剝奪し、ありたけの金をさし出すやう命じました。わたしは金貨千枚を送りましたが、彼は自分の部下を遣はして、わたしの全財産を奪つて了ひました。シャミールはわたし自身の出頭をも要求しましたが、わたしを殺さうといふのは分かつてゐたので、わたしはその命に従ひませんでした。彼はわたしに捕り手をさし向けたので、わたしはそれを斬り拂つて、チロンツォーフ閣下のところへ、投降したのです。たゞ家族を連れて來ることは出来ませんでした。母も、妻も、息子も、彼の手もとにをります。どうか太守にさう傳へてください、家族があらにゐる間は、何もすることが出来ません。』

『お傳へませう。』とロリス・メリコフは言つた。

『どうか骨折つてください、斡旋してください。わたしの持つてゐるものは、みんなあなたに上げます。たゞ公爵の方へよろしくご助言願ひます。わたしは縛めの身で、その繩の一端はシャミールの手に握られてゐるのです。』

この言葉とともに、ハチ・ムラートはロリス・メリコフに對する物語を終つた。

一四

十二月二十日、チロンツォーフは次ぎのやうな書面を、陸軍大臣チエルマイショーフに送つた（その手紙は佛蘭西語で書いてあつた）。

『親愛なる公爵閣下、小官が先便閣下に書面を呈せざりしは、まづハチ・ムラートに對する處置を決定せんと存じたるが故に御座候。小官は兩三日來、健康つねならざるを感じをり申し候。前便において、ハチ・ムラートの當地來著を御報申し上げ候が、同人は八日チフリリスに到着、翌日小官と面會いたし候。爾來八日乃至九日間、小生は彼と會談を重ね、今後彼がわが軍のために、いかなる事をなし得るやにつき、熟考いたし居り候。殊にさし當り露西亞側として、彼はいかなる處置を講ずべきやにつき、頭を悩ましをる次第に御座候。餘の儀には御座なく候へども、彼は家族の運命にいたく心膽をくだき、家族がシャミールの掌中にある限り、手足をいましめられたるも同様にて、露西亞側より示されたる好意ある待遇と寛大なる處置に對し、自己の感謝を證明し、一意奉公に身を捧ぐるを得ざる由、頻りに申しをり候が、右は彼の衷心を披瀝したるものに相違なき事、充分に察せられるゝ次第に御座候。自己の立場の不安定、愛する血縁の人々の運命に對する配慮は、彼を病的狀態に導き、小官の命令にて彼の附き添ひとなりたる人々も、彼が夜間おち／＼と安眠せず、

ほとんど食物も喉を通さず、絶えず祈禱のみいたしをり候由、小官に報告いたし候。彼は數人のコサックとともに郊外へ遠乗りに出でたき旨、付き添ひの人々に許可を乞ひをり候が、そは長年の習慣上必要なる運動にて、また同時に彼にとりて、唯一の可能なる氣ばらしと存じられ候。彼は毎日小官のもとを訪れ、彼の家族に關しなにかの情報を得ざりしやと尋ね、各方面の戦線にて得たる小官配下の捕虜を集めて、これを彼の家族と交換するやう、シャミールに提議いたしくれよと、しきりに小官に懇願いたしをり候。なほこの際彼は多少の金員をも、シャミールに提供すべしと申しをり候。彼のために金員の寄附を辭せざる人々も、若干これあるべき模様に御座候。彼は絶えず小官に向かひて、「余の家族を救ひ、しかる後露西亞軍に奉公する可能を與へよ（彼の意見によれば、レズギヤ方面の戦線がもつとも適當の由に候）。もし一月を経過するも、偉大なる勳功を建て得ざる場合には、いかやうにても存分に罰せらるべし。」と繰り返し申し述べ候。

「小官はこれに答へて、彼の申し分一々もつとも至極なるを認め、彼の家族が人質として露西亞側の手に渡されず、依然として山中にとゞまる限り、彼の言葉を信ぜざる人々は、露西亞の軍中にもその數多かるべき旨を申し述べ候。また國境にて捕虜を集むるためには、出來うる限りの事をなすべく、家族の身のしろ金として、彼自身の調達したる額に補助を與ふる事は、國法上小官にその權限これなき次第に候へども、他の方法をもつて助力を與ふべしと、約束つかまつり候。しかる後、

小官は彼に向かひて、直截に自己の所信を披瀝し、シャミールはいかなる事ありとも、彼の家族を手ばなす事なかるべく、恐らく公然とこの點を彼に明言するならん、と申し聞かせ候。シャミールは一切の罪を赦し、従前の位置を與ふことを條件として、彼に復歸を慫慂し、もしこれに従はざる時は、老母、妻、および六人の子女を殺戮すべしと、威嚇するに相違これなく候。もしシャミールのかゝる聲明を聞きたる場合には、いかなる態度を探る覺悟にや、率直に語り得ざるかと質問いたし候ところ、ハチ・ムラートは眼を上げ、手を高く空さまにさし伸べつゝ、すべては神のおん手にありといへども、斷じて敵に身を屈するを潔しとせず、なんとなればシャミールにわれを赦す心なく、したがつてわが命も長からざるを確信すればなり、とかやうに答へ申し候。彼の家族の殺戮に關しては、彼もシャミールが輕々にこれを實行するものとは、考へをらぬ模様に御座候。その理由は、(一)、彼をして自暴自棄に陥らしめ、一そう危険なる敵となす恐れあること、(二)、ダゲスタンには多くの有力なる人々ありて、シャミールにこの行爲を諫止するに相違なきこと、以上の二つに御座候。最後に、ハチ・ムラートは幾度となく小官に向かひて、將來に對する神のみ心が那邊に存するとも、目下彼の腦中には家族を救ふの一念のほか、何もものなき由を繰り返し、何とぞ神のみ名において彼に援助を與へ、チエチユニヤ附近へ歸還を許しくれよと、切に哀願つかまつり候。チエチユニヤ附近なれば、露西亞長官の許可と仲介により、家族との聯絡の方法を講じ、そ

の現状に關して不斷の情報を得、救助方法の發見に便宜多き次第に御座候。敵地といへども、この部分における多數の人民ならびに若干の領主は、多少なりとも彼に敬慕の念を抱きをるをもつて、すでに露西亞軍に征服せられ、あるひは中立の立場にあるこれら住民の間に赴かば、彼は露西亞側の援助を受けつゝ、目的貫徹に有利なる諸種の聯絡方法を、容易に講じ得る次第に御座候。實にこの目的こそ、晝夜を通じて片時も彼の腦裡を去らざるものにして、いつたんこの目的を成就せんか、彼は全く心を安んじて、露西亞のために活躍し、われらの信頼を獲得するの可能を與へらるべしと存じ候。彼は二三千人の勇敢なるコサツクの護衛とともに、ふたたびグロズナヤに送還されるやう、しきりに懇願いたしをり候。この護衛は彼のためには敵を防ぐ守りとなり、われらのためには彼の述べたる意圖の誠實を、保證するものに御座候。

『親愛なる公爵閣下、彼はかゝる要求がいかに小官を當惑せしめたるかは、よろしく御賢察くださいなれなく候。まつたく一々事件の生ずるたびに、重大なる責任はたゞちに小官の雙肩に落下し來たる有様に御座候。絶対に彼の言を信頼するは、極度の不用意と申さざるべからず。さりとして彼の手よりあらゆる遁走の手段を奪はんとせば、彼を監禁するのほかこれなく、これは單に公明を缺くのみならず、政策としても拙なるものと愚考つかまつり候。かゝる處置を講じなば、その風説はたちまちダゲスタン全地方に傳はりて、同地における露西亞行政を、はなはだしく阻害するものと存じ候。』

なんとなれば、多少なりとも公然シャミールを敵とするの意圖を有し、露西亞軍に投ずるのやむなきを認めたる勇猛果敢なる宗首の副將、ハチ・ムラートの露軍内に於ける位置を注視しつゝある一人の、出鼻をくじく事とも相成るべく候。しかもこの種の人々は、相應多數に上りをり候。もし一たんハチ・ムラートを捕虜として待遇せんか、シャミールに對する彼の背叛が露西亞軍に與へたる美果は、ことごとく霧散するに相違これなく候。

『かくのごとき次第にて、小官としては現在採りたる態度以外に、ほどこそすべき策なしと愚考つかまつり候。たゞしその際、もしハチ・ムラートが再び遁走を企つる事あらば、小官の重大なる過失の責めは、遁れ得ざることと觀念つかまつり候。すべて勤務に於て、なかんづく、かゝる紛糾せる事態に面しては、過失を恐れず、責任を一身に負ふの覺悟なくして、坦々たる大道を一路直進することとは、たとへ不可能と言ひ得ざるまでも、きはめて困難なる儀にこれあり候。したがつて、正しき大道と信じたる以上、これに従つて直往するよりほかはこれなく、それ以上は運賦天賦に御座候。『親愛なる公爵閣下、なにとぞこの件を皇帝陛下の睿覽に供したまはりたく、もし聖上にして小官の處置を嘉したまはば、小官の喜びこれに過ぎ申さず候。以上閣下に御報申し上げ候ことは、すべてザワドーフスキイ、コズロフスキイ兩將軍にも通報済みにて、特にコズロフスキイ將軍には、ハチ・ムラートと直接交渉方を申し入れ置き候。またハチ・ムラートにも、同將軍の許可なくして

は、何ごとをも敢てせず、またいづくへも出發せざるやう、豫じめ注意いたし置き候。小官は彼に向かひて、もし露西亞の護衛兵と共に遠乗りに出づるならば、そは露西亞側にとりて、かへつて好都合なりと聲明いたし候。事實シャミールは、露西亞側がハチ・ムラートを監禁しつゝありなどと、あらぬ風説を放つ恐れも充分にこれあり候。たゞし小官は、彼がズドギーゼンスクに斷じて赴かざるやう、かたく言質を取り置き申し候。なんとすれば、彼が最初に投降して、己れの親友と見なしをり候愚息は、同地の長官にこれなきをもつて、なんらかの誤解（不快事）の生じ得る懸念もこれあるが故に候。もつともズドギーゼンスクは、われに敵意を藏せる大部落にあまり近接せるに反し、グロズナヤは彼の腹心と聯絡を保つために、萬事好都合なる地點と存じ候。

『彼自身の希望により、一步も彼を離れざる二十人の精銳なるコサツクのほか、小官はロリス・メリコフ大尉をさし向け申し候。同大尉は優秀聰明なる模範的將校にて、韃靼語を解し、ハチ・ムラートをよく存じをり候。またハチ・ムラートも眞底より同大尉を信頼しをる模様は御座候。ハチ・ムラートは當地來著以來十日間と申すもの、絶えず公爵タル・ハーノフ中佐と二つ家に起居いたしをり候。中佐はシュン郡の長官にて、目下所用により當地に滞在の中にこれあり候が、これこそ眞に模範的人物として、小官も絶対に信頼いたしをり候。中佐も同じくハチ・ムラートの信頼を獲得し、かつ韃靼語を巧妙に操り得るをもつて、もつとも婉曲なる態度を要する祕密交渉は、すべて中

佐を介して行ひをり候。

『小官はハチ・ムラートに關し、タル・ハーノフの意見を徴し候ところ、彼も小官とせん／＼同意見にして、あるひは小官の採りたる處置のごとくするか、あるひはハチ・ムラートを獄に投じて、あらゆる嚴格なる方法をもつて監禁するか（一旦よからぬ待遇を示せば、彼の監視は容易ならぬ業と相成るべく候）、あるひは彼をせん／＼國外に放逐するか、この兩者いづれかによるほかなし、とかやうに申し述べ候。とは申せこの最後の二案は、ハチ・ムラートとシャミール間の確執より生ずる、露西亞側の利益を無に歸するのみならず、かへつてシャミールの權力に對する山民の不平の増進、および彼らの反逆の可能を阻害するは、必然の儀にこれあり候。タル・ハーノフ公爵も、ハチ・ムラートの誠意を信するむねを小官に語り、かつシャミールは決して彼を赦すことなく、赦罪の約束を與へたるにも拘らず、死刑の命令を下すに相違これなく、ハチ・ムラート自身も、これに寸毫疑ひをさし挟まざるは、もつとも至極の儀と申しをり候。タル・ハーノフ公爵がハチ・ムラートとの交渉に際し、不安を感じたる唯一の點は、宗教に對する彼の執著に御座候。シャミールがこの方面よりハチ・ムラートを動かし得ることは、公爵も敢て否定せざるほどにこれあり候。しかしすでに申し述べ候ごとく、シャミールは彼の歸還後、即時にもせよ、あるひは多少の時日を置くにもせよ、とにかく彼の生命を奪ふことなしと稱して、ハチ・ムラートを安心せしむることは、斷じて不可能

の儀にこれあり候。

『親愛なる公爵閣下、この軍中挿話に關し小官の申し上ぐべき事は、まづ／＼以上のごとくに御座候。』

一五

この報告は十二月の二十四日に、チフリスから發送された。一八五二年の元旦を明日に控へた大晦日に、急使は十頭ばかりの馬をへと／＼になるまで追ひ立て、十人ばかりの馭者を血のにじむほど打ちのめした擧句、當時の陸軍大臣たるチエルヌイシヨーフ公爵にこの報告を手渡しした。かうして一八五二年一月一日、チエルヌイシヨーフは他の書類とともに、このブロンツォーフの報告をも、皇帝ニコライ一世に呈出した。

チエルヌイシヨーフはブロンツォーフを嫌つてゐた。それはブロンツォーフが廣く世間から尊敬を受けてゐたためでもあり、莫大な富を抱へてゐたためでもあつたが、特にブロンツォーフが本當の貴族であるにも拘らず、自分が要するに一個の *parvenu* (なり上がり者) に過ぎないからであつた。しかし一ばん主な理由は、皇帝がブロンツォーフに對して、特別な恩寵を示してゐるからであつた。かういふ譯で、チエルヌイシヨーフはブロンツォーフを傷つけるために、出来るだけすべての機會を

利用しようと努めてゐた。このまへ高架索戰役に關する報告のときに、チエルヌイシヨーフはブロンツォーフに對する皇帝の不滿を、巧みに呼びさます事が出来た。それは長官の不注意によつて、露西亞の小支隊が山匪のために、ほとんど全滅した事件に關するものであつた。いまも彼はハチ・ムラートに對するブロンツォーフの處置を不利な方面から皇帝に奏上しようと考へてゐた。彼はかういふ事を皇帝の耳に吹きこまうと思つたのである。ほかでもない、ブロンツォーフはいつも露西亞軍の利益を犠牲にして、土民に保護を與へ、時としては、彼らの非を看過するやうな行動をとつてゐるが、今度もハチ・ムラートを高架索に残して置いたのは、賢明の策と言はれない。察するところ、ハチ・ムラートはわが軍の防禦方法を見ぬくために、殊さら露西亞軍に投じたものと思はれるから、ハチ・ムラートを露西亞の中央部に送致して、彼の家族が山中から救ひ出され、彼の忠順を充分信頼し得るやうになつた時、はじめて彼を利用するのが當を得た方法である。

けれど、このチエルヌイシヨーフの策略は成功しなかつた。それは要するに、一月一日の朝ニコライ帝が特に不機嫌で、たとへ誰の口から出たいかなる獻策にもせよ、單なる反對心理のために、容れる譯に行かなかつたからである。殊にチエルヌイシヨーフの獻策は、尙ほ更容れる氣づかひがなかつた。ニコライは彼を當分かけがへのない人物として、不快を忍びながら重用してゐたけれど、彼が十二月黨員の事件に關して、ザハール・チエルヌイシヨーフを陥れ、その財産を横領しようと

試みたのを知りぬいて、彼をこの上ない陋劣漢と見なしてゐたのである。かういふ譯で、ニコライの不機嫌のために、ハチ・ムラートは高架索にとどまる事となつた。そして、もしチュルヌイシヨーフが別の時機に奏上したら、起こり得たかも知れないと想像されたやうな變化は、つひに彼の身に起こらないで済んだ。

それは朝の九時半であつた。零下二十度といふ極寒の霧の中を、先の尖つた空いろ天鷲絨の帽子をかぶつた、髭むくじやらな、肥つたチュルヌイシヨーフの馭者が、皇帝の乗用と同じやうな小さな櫓の馭者臺に腰かけながら、冬宮の車寄せへ勢ひよく乗りつけて、仲のよいドルゴルーコフ公爵の馭者に、さも親しさうに頸をしゃくつて挨拶した。こちらはもう大分まへに主人をおろして、綿の入つた厚い外套の尻の下に手綱を敷いたまゝ、凍えた手を擦りながら、宮殿の車寄せのそばに立つてゐた

チュルヌイシヨーフは、ふつくらした灰いろの海狸を襟につけた外套を著こみ、鳥の羽のついた三角帽をきちんとかぶつてゐた。熊の膝かけを撥ねのけると、彼はオーゾーシユウスなしかじかんだ足を、そつと用心ぶかく櫓のそとへ伸ばした（彼はオーゾーシユウスといふものを知らないのを、自慢にしてゐた）。そして元氣さうに拍車を鳴らしながら、門番がうや／＼しく開いた戸口から、絨毯づたひにホールへ入つた。控室で、彼のそばへ駆けよる老侍僕の手へ、外套を抛り出した

のち、チュルヌイシヨーフは姿見に近よつて、鏡を當てた鬘から注意ぶかく帽子をぬいだ。彼は鏡に映る自分の姿を見ながら、馴れた老人らしい手つきで、兩鬢や額の上の巻き毛を撫でつけ、十字章や、綬や、皇帝の頭字エンゼルの大きな肩章をなほした。そして、よく言ふことをきかぬ老いの足を弱々しく運びながら、坂になつた階段の絨毯づたひに上へのぼり始めた。

禮服を著て戸口に立ちながら、うや／＼しく敬禮をする侍僕のそばを通りぬけて、チュルヌイシヨーフは謁見室に入つた。新しく任命された侍從武官が、新しい制服や、肩章や、綬を輝かしながら、うや／＼しく彼を迎へた。まだ宮中ずれのしてゐない、血色のいい顔には、黒いちび髭をはやし、兩鬢の毛はニコライ一世と同じやうに、目尻の方へ向けて撫でつけられてゐた。陸軍次官のブシリーイ・ドルゴルーコフ公爵は、皇帝ニコライと同じやうな頬髭や、口鬚や、兩鬢の髪などで飾られた鈍い顔に、退屈さうな表情を浮かべながら彼に挨拶した。

『L'empereur? (皇帝は?)』居間の戸口を目ざしながら、チュルヌイシヨーフは侍從武官に問ひかけた。『Sa Majesté vient de rentrer (陛下はたつた今お歸り)』いかにも好い氣持ちらしく、自分の聲のひびきに耳を傾けながら、侍從武官はかう言つた。そして、水をなみ／＼と満たしたコップを頭に載せても、一滴もこぼれないだらうと思はれるほど、柔らかく滑らかに歩きながら、音もなく開かれる戸口に近よつた。そして、これから入らうとする場所に對する尊敬を、全身に現はしながら、戸

の蔭に姿をかくした。その間にドルゴルーコフは折り靴を開いて、中に納めた書類を調べにかかった。チェルヌイシヨーフは眉を擧めて、足を踏み伸ばすやうに歩きながら、これから皇帝に上奏すべきことを思ひめぐらしてゐた。チェルヌイシヨーフがちやうど居間の戸口に立つた時、扉がふたたび開かれて、前より一そう笑み輝いてゐる、うやくしげな副官の姿が、その中から現はれた。彼は手真似で大臣と次官を、皇帝の居間へさし招いた。

冬宮は火災後もう大分まへに再建築が終つてゐたが、ニコライ一世はまだやはり二階に住んでゐた、彼が大臣や高官に謁して、報告を聞くことにしてゐた居間は、窓の四つついた、非常に天井の高い部屋であつた。アレクサンドル一世の大きな肖像が、正面の壁にかかつてゐた、窓の間には二つの事務卓が置いてあつた。壁ぎには幾つかの椅子が並んで、部屋のまん中には大きな書物卓が据ゑられ、その前にはニコライ帝の肘かけ椅子と、謁見を許された人々の椅子が置いてあつた。ニコライは肩に紋章をつけた黒いフロックを着て、肥えた腹の上からかたく縛つた巨大な體軀を、椅子の背にもたせながら、卓子のそばに坐つてゐた。そして生の通よつてゐないやうな目で、入つて来る二人をちつと見つめてゐた。禿かくしの鬘とたくみに繋がり合ふやうに、丁寧に撫でつけられた鬘の蔭から、大きな険しい額を覗かせた長い白い顔が、今日は特別ひやうかで、ちつと動かないやうに思はれた。いつもどんよりした彼の目が、今日は一層ぼやけて見え、びんと上へ捻りあげ

た老人らしい口鬚と、高い襟に突き上げられてゐる、剃刀を當てたばかりの脂ぎつた頬と、小さな腸づめのやうに規則たゞしく剃り残された頬鬚と、襟に押しつけられた下顎とは、彼の顔に不満といふより、むしろ忿怒の表情を添へるのであつた。

かうした氣分の原因は疲勞なのであつた。またその疲勞した原因は、彼が前の晩に假面舞踏會に行つたからである。彼はいつもの通り、てつべんに鳥のとまつた近衛騎兵の兜をかぶつたまゝ、彼の傍へ押しよせて來ては、その自信に満ちた堂々たる巨軀の前に、おづ／＼と道を讓る群集の間を歩き廻はつてゐたが、ふと或る一つの假面が目にとまつた。それは前の舞踏會に、肌の白さと、見事な體格と、優しい聲で、彼の老人らしい色情をそゝつて置きながら、次ぎの舞踏會で逢ふと約束したまゝ、姿を消した女なのである。昨日の舞踏會で、彼女はニコライのそばへ近よつた。で、彼はもうその女を放さうとしなかつた。そして、この目的のため特に用意してある、棧敷きへ連れて行つた。そこでは女とさし向かひになれるのであつた。棧敷きの戸口まで無言で行きつくと、ニコライは目で案内人を捜しながら、あたりを見まはしたけれど、誰もその邊に見あたらなかつた。ニコライは眉を擧めて、自分で棧敷きの戸を明けながら、まづ女を中へ入れた。

『Il y a quel qu'un (こゝに誰か)』と假面は歩みを停めながら言つた。

棧敷きは本當にもう人に占領されてゐた。天鷲絨ばりの長椅子の上には、ひとりの槍騎兵將校が、

若い女にびつたり寄りそひながら、腰かけてゐた。女は白つぽい毛をふさ／＼と渦まかせた美人で、身にはドミノを纏ひ、面は外づしてゐた。威丈だかにすつくと立つたニコライのもの凄い姿を見ると、白つぽい毛をした女は大急ぎで顔を面で隠した。槍騎兵將校は恐ろしさのあまり體が剛ばつて、長椅子から起ち上がらうともせず、ちつと据わつた目でニコライを見つめてゐた。

自分に對して人々の感じる恐怖は、ニコライにとつてもう馴れつこになつてゐたけれど、この恐怖はいつも愉快に感じられた。彼はどうかすると、恐怖に掴まれてゐる人々に、思ひがけなく優しい言葉をかけて、その對照によつて度膽を抜くのも好きであつた。で、今も彼はそれを試みたのである。

『おい、君、君はわたしより若いんだから、』恐怖のあまり化石のやうになつてゐる將校に向かつて、彼はかう言つた。『その場所を譲つてくれてもいいだらう。』

將校は飛びあがつた。そして青くなつたり、赤くなつたりしながら、脊を低くかゞめて、無言のまま假面のあとから、棧敷きを出て行つた。ニコライは相手とさし向かひになつた。假面は家庭教師として備ひ入れた瑞典婦人の娘で、やつと二十歳になつたばかりの、美しい、純潔な處女であつた。この娘はニコライに向かつて、まだ子供の時分から肖像畫を見て彼に戀ひし、彼を神のごとく崇め慕ひ、なんとかしてその注意を惹かなければならぬと決心した、ところが、かうして目的を達

したのでから、もうこの上はすこしも心残りはない、といふやうな事を物語るのであつた。娘は、いつもニコライが女と逢ひ曳きする場所へ連れて行かれた。ニコライはそこで彼女と、一時間以上を過ごした。

この夜、彼が自分の居間へ歸つて、いつも自慢にしてゐる狭くて堅い寢臺に身を横たへ、彼の言葉を藉りて言へば、ナポレオンの帽子と同じくらゐ有名なマントにくるまつた時、彼は長いあひだ寢つくことが出来なかつた。娘の白い顔に浮かんだ憎えたやうな、同時に歡喜に満ちた表情が、目の前に現はれるかと思ふと、いつも自分の愛人と定めてゐるメリードヴの逞しい、肉づきのいい肩が思ひ浮かべられた。彼はこの二人の女の比較を試みた。けれど、妻ある男の放縱がよくないなどといふ考へは、まるで彼の頭に浮かばなかつた。もし誰かそんな事を言つて、非難するものがあつたら、彼は驚き呆れたに相違ない。けれど、當然の行ひをしたと信じてゐるにも拘らず、彼の心には何か知ら不快な後味が残つてゐた。で、この氣持ちを消すために、彼はいつも自分を落ちつかしてくる想念——自分は偉大な人間であるといふ想念を、玩味しはじめた。

彼は遅く寢ついたにも拘らず、七時すぎにはもう床を離れて、偉大な飽満した體を氷でこすり、いつも決まつた身じまひをした後、子供の時分から唱へつけてゐる『聖母マリヤよ』、『われは信ず』、『われらの父よ』などといふいつもの祈禱を、ほとんどなんの意味もなく唱へ終つて、外套に

軍帽といふ姿で、小玄關から河岸通へ出た。河岸通の中ほどで、彼自身と同じくらゐ堂々たる體軀をした、制服制帽すがたの法律學校生徒に出あつた。自由思想の巢として日ごろ嫌つてゐる學校の制服を見ると、ニコライは眉を蹙めたけれど、脊の高い見事な體格と、蝦のやうに反り返つて、肘を張りながら敬禮する、一生懸命な態度は、彼の不満を柔らげた。

『姓はなんと言ふか？』と彼は尋ねた。

『ポロサートフでございます、陛下。』

『なか／＼感心な奴だ！』

學生は帽の庇に手を當てたまゝ、ぢつと立つてゐた。ニコライは歩みをとめた。

『お前は軍務に就きたいか？』

『いえ、決して、陛下。』

『ばか？』

ニコライはつと顔をそむけて、そのまゝ先へ歩き出した。そして、頭に浮かんだ最初の言葉を、聲高に繰り返しはじめた。『コベルズイン、コベルズイン』と彼は昨日の娘の名を幾たびか繰り返した。

『さげない、さげない。』彼は口にしてゐる事を考へるのではなくて、口で言つてゐる事に注意を轉

換して、内部の感情をもみ消さうとするのであつた。『實際おれがゐなかつたら、露西亞はどうなるだらう。』また不満の念が押しよせるのを感じて、彼はかう獨りごちた。『いや、おれがゐなかつたら、露西亞どころか、歐羅巴がどうなるか分かりやしない。』彼は自分の義弟に當るプロシヤ王のことを思ひ出した。そして、その意氣地なさと思かさを考へながら、頭を振るのであつた。

あとへ引き返して、宮殿の車寄せへ近づいた時、ふとエレーナ・パーヴロヴナ(皇弟ミハイルの大公の未亡人)の

馬車が目に映つた。馬車は赤い四季施を著た従僕を乗せて、サルティコフの車寄せへ入つて行つた。エレーナ・パーヴロヴナはニコライの目から見ると、空虚な人間の權化とも言ふべきものであつた。それは單に科學や詩學のみならず、民衆政治といふやうな問題すら喋々と論議して、まるで彼らが自分ニコライよりも、巧みに人民を治めて行く事が出来るやうに、信じてゐる連中なのであつた。かういふ連中がどんなに抑へつけられても、また後から後からと浮かび上がってくるのを、彼は知つてゐた。最近死んだ弟のミハイル・パーヴロギッチが思ひ出された。すると、いま／＼しい憂鬱な氣持ちが、彼の心を捕へた。彼は暗く眉を蹙めながら、また頭に浮かんできた最初の言葉を、口の中で呟きはじめた。そして、宮殿へ入つた時に、はじめて獨りごとをやめた。

居間に入つて鏡の前に立ちながら、頬髭や、鬢の毛や、額につけた入れ毛を撫でつけ、口髭をびんと捻り上げたのち、いつも報告を聞くことにしてゐる書齋へ、まつすぐに歩いて行つた。

彼が一ばんに謁見したのは、チエルヌイシヨーフであつた。チエルヌイシヨーフはニコライの顔、といふより、主として眼つきによつて、彼が今日かくべつ不機嫌なのを悟つた。彼は昨日の皇帝の冒険を知つてゐたので、その不機嫌の原因をも察した。ニコライはそつげなくチエルヌイシヨーフに挨拶して、腰をおろすやうに勧めると、例の氣のない目をぢつと相手にそゝいだ。

チエルヌイシヨーフの報告で第一ばんに擧げられてゐたのは、今度發見された經理部員の瀆職事件であり、次ぎはプロシヤ國境に於ける露西亞軍隊の移動の件、次ぎは第一回の發表に洩れた人々の新年の行賞、更にその次ぎはハチ・ムラート投降に關するブロンツォーフの報告、そして最後に、教授の暗殺を企てた醫科大學生に關する不快な件であつた。

ニコライは無言のまま唇を噛みしめ、薬指に金指環を一つはめた大きな白い手で、書類の頁を延ばしながら、チエルヌイシヨーフの額と前髪から目を放さずに、瀆職事件の報告を聞いてゐた。

ニコライは、人間はすべて盗みをするものだ、と信じてゐた。彼はいま、經理部員を罰する必要がある、といふ事を承知してゐたので、彼ら一同を奪官して、列兵勤務に追ひ落とさうと決心したが、しかしそれでも、彼らの後任者が同じことをするのを、防ぐわけに行かない、といふ事もやはり承知してゐた。官吏の本質は盗みをする事なので、彼の義務はそれを罰することであつた。したがつて、どんなに飽き飽きしても、彼は忠實にこの義務を履行しなければならなかつた。

『どうやら露西亞の國には、たつた一人しか正直な人間がゐないらしい。』と彼は言つた。

チエルヌイシヨーフは、この露西亞にたつた一人しかない正直な人間が、ニコライ自身だといふ事を即座に悟つたので、もつともと言ふやうに微笑した。

『それに相違ございません、陛下。』と彼は言つた。

『ちよつと待つてくれ、裁可の判を捺すから。』書類を取つて、卓子の左かはへ置き換へながら、ニコライはかう言つた。

その後でチエルヌイシヨーフは行賞と、軍隊移動の件を報告しはじめた。ニコライは表を眺めて、幾つかの名前を抹殺し、二箇師團のプロシヤ國境移動の件について、簡明直截な指令を與へた。

ニコライは、プロシヤ王が一八四八年以後、人民に憲法を與へたのを、どうしても赦すことが出来なかつた。したがつて、この義弟に對して手紙や口先では、きはめて親しい感情を披瀝しながらも、彼は萬一の用心としてプロシヤ國境に軍隊を配備する必要を認めた。それはプロシヤ人民が反逆を企てた場合（ニコライはいたる所に反逆の可能を見た）、ちやうど匈牙利人の暴動から奧太利を救ふために、露西亞軍隊を派遣したのと同じやうに、義弟の王位を保護するためなのであつた。またこれらの軍隊は、プロシヤ王に對するニコライの忠言に、より多くの重みと意義を加へるため

にも、必要なのであつた。

「さうだ、もしおれがゐなかつたら、いま露西亞はどうなつてゐるか知れやしない。」彼はから考へた。

『さあ、それから何だ?』と彼は言つた。

『高架索から急使でございます。』とチエルヌイシヨーフは言つて、ハチ・ムラート投降の件に關し、ブロンツォーフの書いて来たことを上奏し始めた。

『ほう、』とニコライは言つた。『それは幸先さいさきがいいなあ。』

『陛下のお立て遊ばしたご作戦が、だん／＼明瞭に成果を現はして參りました。』とチエルヌイシヨーフは言つた。

彼の戰術的才能に對するこの讚辭は、ニコライにとつてかくべつ愉快であつた。彼は自分の戰術的才能を誇つてはゐたけれど、内心そんなものない事を意識してゐたからである。で、彼はいつもつと詳細な讚辭が聞きたかつたのである。

『それはどういふ意味かね?』と彼は聞いた。

『から思ふのでございます。もし早くから陛下のご作戦に従つて、林を伐り食糧を奪ひながら、徐徐に確實に前進を續けてゐましたなら、高架索はもうとつくに征服されて居た筈でございます。ハ

チ・ムラートの投降も、一にこれに歸因するものと考へます。彼はもうこのうへ支へることが出来ないと思つたのでございませう。』

『さうだ。』とニコライは言つた。

森を伐り食糧を奪ひながら、漸次敵領へ侵入する作戦は、エルモーロフとゼリヤンミノフの案であつて、一舉にしてシャミールの本據を突き、この山匪の巢窟を破壊せよと言ふ、ニコライの計畫とはぜん／＼正反對のものであつた。彼の計畫にしたがつて、一八四五年に遂行せられたダルゴ遠征は、あれほど多くの人命を犠牲にしなければならなかつたのである。が、それにも拘らず、ニコライは森林伐採と糧道蹂躪の方法による徐々の侵入といふ計畫をも、自分のものにしてつたのである。森林伐採と糧道蹂躪による徐々の侵入といふ計畫が、彼自身のものであると信じるためには、彼が一八四五年に企てられた、ぜん／＼正反對な軍事行動の主唱者である事を、隠すやうにするのが當然だと思はれたけれど、彼はそれをも隠さうとしないで、四十五年の遠征計畫をも漸次侵入の計畫をも、同時に自慢らしく吹聴した。そして、この兩計畫が明瞭な自家撞著であるのに、氣がつかないやうな振りをしてゐた。彼をとり圍んでゐる人々の明瞭な事理に反した、見えすいた不斷の阿諛は、完全に彼の頭をくらまして了つて、もう自分の矛盾も目に入らなければ、自分の言行が事實や、論理や、單純な常識に一致するかどうかさへ、考へないやうになつて了つた。彼は自分

の命令がどんなに無意味な、不正な、非論理的のものであらうとも、たゞ自分がそれを發したとの理由で、意味のある正しい、互に一致したものになつて來ると、心の底から信じ切つてゐた。

高架索方面の報告後、チエルメイシヨーフが上奏した、醫科大學生事件に關する彼の裁決も、やはりさういふ風なものであつた。

それはほかでもない、二度まで試験に失敗した青年が、三度目の試験を受けたとき、試験官がまともや彼を不合格と宣告した時、病的に神経の緊張した學生は、それを試験官の不公平と見て、机の上にあつたペン・ナイフを把るが早いか、一種の發作にかられて夢中で教授に飛びかかり、數箇所を傷を負はしたと言ふのである。

『姓はなんと言ふのか？』とニコライは尋ねた。

『ブヂェゾーフスキイでございます。』

『波蘭人か？』

『波蘭の出身で、カトリック教徒でございます。』とチエルメイシヨーフは答へた。

ニコライは眉を擡めた。

彼は波蘭に多くの惡を働いた。この惡を辯明するためには、すべての波蘭人が卑劣漢であると、確信する必要があつた。で、ニコライは彼らを卑劣漢と見なして憎んでゐた。自分の行なつた惡事

の程度に比例して、彼らを憎んでゐたのである。

『すこし待て。』と彼は言つた。そして目を塞ぎながら首をたれた。

チエルメイシヨーフは一度や二度でなく、ニコライからこの言葉を聞いてゐたので、皇帝が何か重大な問題を決定しなければならぬ時には、幾秒間か精神を集中しさえすれば、或る靈妙な作用が起つて、まるで内部の聲が彼になすべき事を告げるかのやうに、この上もなく正確な決定が自然に出來あがるのを承知してゐた。彼はいま醫科大學生の事件で、心中に呼び醒まされた波蘭人に對する憎惡の念を、どうしたらもつと完全に満足させられるかと考へた。すると、内部の聲は次ぎの決定を彼に暗示した。

彼は報告をとつて、その餘白に持ち前の大きな筆蹟でかう書いた。

『死に相當す。されど幸にして露西亞に死刑の制度なし。また余もこれを創設し能はず。答を持つる一千人の隊伍の間を十二回通過せしむべし。ニコライ。』と彼はいつも不自然に大きな華押で署名した。

ニコライは、一萬二千の答が疑ひもなく惱ましい死を意味するばかりでなく、過度な残忍を意味するといふ事も、よく知りぬいてゐた。實際、どんな強健な人間を殺すのでも、答五千で充分だつたからである。けれど彼は、血も涙もない残酷漢になるのが、愉快だつたのである。そして、露西

亞に死刑がないと考へるのが、愉快だったのである。

大學生に對する決定を書き終ると、彼はそれをチエルヌイシヨーフの方へ押しやつた。

『さあ、』と彼は言つた。『讀んで見ろ。』

チエルヌイシヨーフは一讀した。そして、この決定の賢明さに對する、ちや／＼しい驚きのしるしに、低く頭をさげた。

『それから、學生どもをみんな練兵場へ引き出して、その刑罰を見物させるがよい。』とニコライは言ひ足した。

『みんなのためになるだらう。おれはあの革命的精神を退治てやるのだ。根こそぎに引きぬいてやるのだ。』と彼は考へた。

『承知いたしました。』とチエルヌイシヨーフは言つた。それからちや／＼暫く無言ののち、とさかのやうな前髪をちよつと撫でてから、また高架索からの報告に話しを戻した。

『それではブロンツォーフ公爵へ、なんと返事をいたしましたら宜しうございませう？』

『わたしの方針を固く守るのだ。チエチュナに於ける人家を破壊し、糧道を絶ち、進撃で悩ますのだ。』とニコライは言つた。

『ハチ・ムラートのことは、なんとご命令あそばしますか？』とチエルヌイシヨーフは尋ねた。

『なに、それはブロンツォーフが高架索で使ふつもりだと、手紙にも書いてるではないか。』

『それは冒険ではございますまいか？』チエルヌイシヨーフは、ニコライの視線を避けながら言つた。『ブロンツォーフ公爵は、あまり人を信頼しすぎやしないかと思ひますが。』

『ちや、お前はどうしようと言ふのだ？』ブロンツォーフの處置を悪く見せようとするチエルヌイシヨーフの腹を見ぬいて、ニコライは鋭い調子で問ひ返した。

『はい、わたくしは彼を露西亞へ連れて來た方が、安全だと考へますが。』

『お前はさう考へるか。』とニコライは嘲けるやうに言つた。『ところが、わたしはさう思はん。わたしはブロンツォーフと同意見だ。さう書いてやりなさい。』

『かしこまりました。』とチエルヌイシヨーフは言つた。そして起ち上がりながら、會釋をしはじめた。

ドルゴルーキイも同じく會釋して出て行つた。彼はその謁見ちうニコライの問ひに對して、軍隊移動のことを二こと三こと言つたばかりである。

チエルヌイシヨーフのあとで、別れの挨拶に來た西部地方の總督、ビービコフが通された。

露西亞正教に轉ずることを拒んで、暴動を起こした農民に對して、ビービコフのとつた處置を裁許したのち、彼は叛民一同を軍事裁判に附するやうに命じた。それはつまり、笞を持った兵士たち

の列をくぐらすのと、同じ意味であつた。そのほかに、彼は或る新聞の主筆を列兵勤務に送れと命じた。それは、數千の國有農民を帝室所屬に移管する記事を、掲載した廉によるものである。『わたしは必要だと思ふから、さうするのだ。』と彼は言つた。『それについて、かれこれ言ふことは一切ゆるさん。』

ビービコフは、ウニアト教徒に對する處置の殘酷なことも、國有農民、すなはち唯一の自由な人民を帝室所屬、すなはち皇族の農奴に移す行爲の不正なことも、充分に知りぬいてゐた。けれど、言葉を返すのは不可能であつた。ニコライの命令に同意しないのは、彼が四十年といふ長い年月を要して獲得し、いま漸く享樂しつゝある輝かしい地位を、ことごとく喪失する事なのであつた。そこで彼はこの殘酷な、氣ちがひめいた、不正な皇帝の意志を、おとなしく實行するといふしるしに、白いものの交じり始めた黒い頭を、うや／＼しくさげた。

ビービコフを退出させたのち、ニコライは立派に義務を遂行したといふ意識で、一つ仲びをしなから時計を見て、外出のために著がへをしに行つた。肩章や勳章や綬のついた制服を着て、彼は謁見の廣間へ出て行つた。そこには百人以上の制服をつけた男や、胸や肩を剝き出したきらびやかな服装の婦人たちが、一定の場所にすらりと居流れて、彼の出御を戦々兢々として待つてゐた。

彼は胸をつき出し、強く締めつけた帯の上下から腹を盛りあがらせながら、生氣のない眼つきを

して、人々の前に姿を現はした。すべての視線が戦々兢々として、うや／＼しく自分の方へ向けられてゐるのを感じると、彼は一そら莊重な態度を採つた。見憶えのある顔に視線が出會ふと、彼は誰に誰といふ事を想ひ起こしながら、歩みをとめた。そして時に露西亞語、時に佛蘭西語で、二こと三こと言葉をかけ、冷たい生氣のない視線で相手を刺し通しながら、彼らの言ふことを聞いてゐた。

一同の祝賀を受けてから、ニコライは教會へ赴いた。

神もこの世の人々と同じやうに、おのれの僕を通して、ニコライに挨拶を送り讃辭をさへ上げた。彼は飽き飽きしたけれど、やむを得ないもののやうに、これらの挨拶や讃辭を受けとつた。これはすべて當然かくあるべき事なのであつた。なぜと言つて、全世界の安寧と幸福は、彼ひとり左右されてゐたからである。彼はそのために疲れながらも、やはり世界に助力の手をさし延べるのを、拒まないのであつた。祈禱式の終りに、髪を綺麗に撫でつけたすばらしい衣裳の助祭が、『聖壽長久』を唱へはじめ、唱歌隊が見事な聲を揃へながらこの言葉を引きとつた時、ニコライはふと後を振り返つた拍子に、窓ぎはに立つてゐるネリドワとその肩に氣がついた。そして昨日の娘と比較しながら、結局こちらの方へ團扇を上げた。

祈禱式のあとで、彼は皇后のところへ行つて、子供たちや妻と戯れながら、幾分間か家庭團樂の中に過ごした。それからエルミタージ美術館をぬけて、宮内大臣ブルコンスキイのところへ赴き、な

にかの話しの序に、自分の手もと金の中から、昨日の娘の母親に年金をさげてやるやうに頼んだ。そこから彼はすぐいつもの散歩に出かけた。

晝食はこの日ボンペイの廣間でとる事になつた。ニコライとミハイル、二人の幼い皇子のほか、リーゼン男爵、ルヂェヴースキイ伯爵、ドルゴルーキイ、プロシヤ公使、それにプロシヤ王の侍従武官が招待された。

皇帝と皇后の出御を待つてゐる間に、プロシヤ公使とリーゼン男爵の間には、最近波蘭から傳へられる不安な情報について、興味のある會話が交換された。

『La Pologne et le Caucase, ce sont le deux catheres de la Russie. Il nous faut 100000 hommes à peu près dans chaq'un de ces deux pays (波蘭と高加索、これは露西亞にとつて二つの試煉地です。この二つの國に、どちらも十萬づつからの兵員が必要です。』とリーゼンが言つた。

公使は、へえ、さうですかといつたやうな、わざとらしい驚きの表情をして見せた。

『Vous dites, la Pologne. (波蘭と仰しや。』と彼は言つた。

『Oh, oui, c'était un coup de maître de Maeterlich de nous en avoir laissé l'embaras, (え、う、だつたんですよ、われ／＼を困らしたのは。』
彼がかう言つたとき、皇后が例のごとく頭を慄はせ、凍りついたやうな微笑を浮かべながら、入

つて来た。それにつゞいてニコライも現はれた。食事の間に、ニコライはハチ・ムラートの投降を物語り、高架索戦役も森林伐採と要塞建設の手段によつて、山匪を壓迫する自分の作戰計畫のお蔭で、もうやがて終局を告げるに相違ないと言つた。

公使はプロシヤ王の侍従武官と、ちらと目くばせした後(彼らはずい今朝ほど、自分を偉大な戦術家とうぬ惚れてゐる、ニコライの不幸な弱點を話し合つたばかりなのである)、口をきはめてこの計畫を褒めそやし、これこそニコライの偉大なる戦術的才能を、完全に證明するものであると言つた。

食後ニコライは舞踊劇に出かけた。そこでは肉襦袢を著た半裸體の女が、幾百人となく舞臺を跳ねまはつてゐた。一人の女がとくに彼の目にのいたので、ニコライは舞臺監督を呼んで、彼に感謝の意を表し、ダイヤモンド入りの指環を贈るやうに命じた。

翌日チェルヌイショーフが報告に来たとき、ニコライはもう一度、ブロンツォーフに對する指令を確かめた。それはハチ・ムラートが投降した今日、特にチェチュニヤを攻め惱まし、哨兵線をもつて壓迫する、といふ事であつた。

チェルヌイショーフはこの意味で、ブロンツォーフに書面をしたゝめた。やがて別の急使が馬を追ひ立て、馭者の顔を血の出るほど叩きのめしながら、チフリスへと櫓を走らした。

このニコライ一世の命令にしたがつて、一八五二年の一月に取りあへず、チェチュニヤ侵襲が行はれた。

侵襲を命ぜられた支隊は四個の歩兵大隊と、二百のコサック兵と、八門の砲から成つてゐた。縦隊は道路づたひに進んだ。縦隊の両側には、まるで切れめのない鎖のやうに、獵兵が丘を登つたり下つたりしながら従つた。彼らは深い長靴をはき、毛皮の半外套をつけ、毛皮帽子をかぶり、肩に銃を擔ひ、腰には薬筒をつけてゐた。敵地を進むときの常として、できる限り静寂が守られた。ただ時々溝をこす時に砲がたたく音をたてたり、沈黙の命令を理解しない砲兵の馬が、鼻をぶるぶる鳴らしたり、聲高に嘶いたりするか、でなければ痲癩を起した長官が、しは嘎れた押し殺したやうな聲で、隊列があまり延びすぎたとか、縦隊から離れすぎたとか、くつつきすぎたとか言つて、部下を嗚りつけるくらゐのものであつた。たゞ一度、獵兵の列と縦隊の間にあつた茨の中から、腹が白くて脊中の灰いろをした牝山羊と、脊中へくつつくほど曲がつた小さな角を生やした、同じやうな牡山羊が飛び出したために、ちよつと沈黙が破られたばかりである。美しい臆病な動物は前足を縮めながら、大きく跳び上がつて、縦隊のすぐそばまで近々と走つて來たので、幾たりか

の兵士らは銃剣で刺し殺すつもりで、笑つたり叫んだりしながら、その後を追つて駈け出したが、山羊はくるりと後へ引き返して、獵兵隊の列を突き破つた。そして幾たりかの騎兵と中隊の犬に追はれながら、鳥のやうに山中へ遁れて了つた。

まだ冬であつたけれど、太陽はだん／＼高く半空に近よつて來た。早朝出發した支隊が、四里エルスばかりも歩いたらうと思はれる午時分には、力こし暑いくらゐるばかり／＼して來た。しかもその光線があまり輝かしいので、銃剣の反射を見ても目が痛いくらゐであつた。大砲の眞鍮などは、まるで小さな太陽のやうに燦爛と輝きはじめた。

うしろにはたつたいま渡つた清らかな急流があり、前にはあまり深くない谷間に耕やされた、畑や草場が開けてゐた。その先には森で蔽はれた神祕めかしい黒い山が聳え、その黒い山のうしろには、空に岩石のそり立つた頂きが覗き、それよりも一つ高い地平線には、永遠に美しい、永遠に變幻きはまりなき、寶石のごとく光り輝く、雪の山なみが浮かんでゐた。

第五中隊の先頭には、黒の軍服を着て毛皮帽子をかぶり、劍を肩にかけた、脊の高い美しい將校が歩いてゐた。それは近ごろ近衛から轉じて來た、ブツトレルといふ男であつた。彼は生の喜びと、同時に死の恐怖と、活動の希望と、一つの意志に支配される偉大な集團に所屬してゐるといふ意識、こんなもの入り交じつた勇ましい感情を経験してゐた。ブツトレルが戦闘に出るのは、こ

れが二度めであつた。で、彼はこんな事を考へてゐた——今すぐにも自分の方に弾丸が集中し始めるけれど、自分は飛びすぎる砲丸のもとに首も曲げず、銃丸の唸りに一顧の注意も拂はないばかりか、この前と同じやうに、一そう高く頭をそらし、目に微笑を浮かべて、僚友や兵士らを見まはしながら、思ひ切つて平然たる聲で、何かよそ事を話し出すのだ。

支隊は坦々たる道からそれて、唐もろこし畑の中を通つてゐる、餘り踏み固められてゐない道へ出た。そして次第に森へ近づき始めたとき、不意にどこからとも知れず、無氣味な唸り聲を立てながら砲弾がとんで来て、輜重隊のまん中へんに當たる、道ばたの唐もろこし畑の中へ落ちて、その地面を掘り抉つた。

『そろ／＼始まるぞ。』ブットレルは愉快さうに笑ひながら、そばへ寄つた僚友にから言つた。

はたせるかな、一發の砲弾につゞいて、小さな旗を持つたチェチュニヤ騎兵の密集團が、森の中から現はれた。そのまん中には、大きな緑いろの旗が飄つてゐたが、非常に遠目のきく年とつた曹長が、近眼のブットレルに向かつて、これは當のシャミールに違ひないと教へた。密集團は坂をくだつて、右手にある最寄りの丘の頂きに現はれ、やがてまた下へくだり始めた。厚地の黒い軍服に、頂きの白い毛皮帽子を被つた小柄な將軍が、自慢の逸物に跨がつてブットレルの中隊に近づき、丘をおりて来る敵の騎兵隊に向かつて、右の方へ前進するやうに命じた。ブットレルは命じられた方

へ、敏速に自分の中隊を引率して行つたが、まだ谷まで下り切らない中に、引きつゞき二發の銃弾發射の音がうしろの方に聞こえた。彼は振りかへつてみた。鳩羽いろをした煙の塊りが二つ、二門の砲の上に立ち昇つて、谷に沿うて長く延びて行つた。敵は大砲の存在を豫期しなかつたらしく、退却をはじめた。ブットレルの中隊は、山匪に向かつて射撃を開始したので、低地は一めん硝煙に裏まれて了つた。たゞ低地のすこし小高いところに、山匪がコサックの追撃を防ぎながら、急いで退却する様子が見うけられた。支隊は山匪を追つて前進をつゞけた。すると第二の丘の傾斜に、山の部落が現はれた。

ブットレルは中隊を率ゐながら、コサックに續いて駆け足で部落に入つた。住民は一人もゐなかつた。兵士らは穀類も乾し草も、民家さへも焼き拂へといふ命令を受けた。部落ぜんたいに、えがらつぽい煙が擴がつた。その煙の中を兵士らが右往左往しながら、見つかり次第のものを家の中から引つぱり出してゐた。しかし主なものは、山民が持つて逃げることに出来なかつた鶏類で、彼らはそれを手どりにしたり、鐵砲で撃ち殺したりしてゐた。將校連は、なるべく煙から離れた所に腰をおろして、辨當を喰べたり酒を飲んだりした。曹長はいくつかの蜜蜂を、巢のまゝ彼らのところへ持つて來た。チェチュニヤ人は影も形も見えなかつた。正午すこしまはつた頃、進出の命令がくだつた。中隊は部落の外づれで縦隊に整列した。ブットレルはその後尾につく事となつた。隊が動き

だが早い、チェチュニヤ人が姿を現はして、支隊のあとからついて来ながら、絶えず發射をやめなかつた。

支隊がやゝ開けたところへ出ると、山匪はもうついて来なくなつた。ブットレルの部下は誰ひとり負傷者を出さなかつた。で、彼はこの上なく元氣な、浮き浮きした氣持ちで歸つて行つた。今朝渡つた小川を再び徒渉して、支隊が唐もろこし畑や草場の上に長く延びたとき、唱歌手が各中隊の前へ出て、高々と歌ひ出した。風がなくて、空氣が爽かにすが／＼しく澄み切つてゐたので、百^{エルス}里も離れてゐる雪の山なみが、つい鼻の先にあるやうに思はれた。唱歌手が歌ひやめる時、規則たゞしい足音と銃のがちや／＼鳴る音が耳に入つて、それが歌のはじまりや切れめに必要な、背景のやうに思はれた。ブットレルの第五中隊で歌つてゐた歌は、見習士官が聯隊の讚美に作つたもので、踊り歌の節で歌はれ、各節ごとに、『こんな者ではないぞ、獵兵、おゝ、獵兵よ』といふ囃しがついてゐた。

ブットレルは自分の直屬上官たる、ペトロフ少佐と並んで馬を進めてゐた。彼は少佐と同じ家に暮らしてゐたのである。彼は近衛を出て高架索へ來ることにした自分の決斷が、うれしくて嬉しくて堪らなかつた。彼が近衛を出た主な原因は、ペテルブルグで歌留多の勝負に負け、無一物になつて了つたからである。彼はもし近衛に残つてゐたら、歌留多を慎しむだけの力がないだらうと、そ

れを心配した。しかも、賭ける金といつては一文もないのである。けれども、今はさういふ事がすつかり片づいて了つて、今までとはまるで違つた、美しい、勇ましい生活が始まつた。彼はいま自分の破産状態も、拂ひ切れないほどの借財も、すつかり忘れて了つた。高架索、戦争、兵士、將校、酔つばらひでしかも善良な勇士たち、ペトロフ少佐——これらすべてがあまりに美しく、氣持がよいので、時々どうかすると、現在の生活が嘘のやうな氣がした。ペテルブルグにゐて、煙草の煙の濛々たる部屋の中で、歌留多の隅を折つたり、全額賭けの冒險を試みたりしながら、銀行親を憎んだり、しめつけられるやうな頭の痛みを感じてゐるのでなく、この美しい地方に住んで、勇敢な高架索人に圍まれてゐるといふ事が、なんだか本當にならないやうな氣がするくらゐであつた。『こんなものではないぞ、獵兵、おゝ、獵兵よ』と彼の中隊の唱歌手たちは歌つてゐた。馬はこの音樂に合はせて、樂しげな足どりで進んだ。中隊で伺つてゐるトレゾールカといふ、毛むくじやらの灰色の犬が、まるで長官のやうに尻尾をきり／＼と巻いて、仔細らしい顔つきをしながら、ブットレル中隊の先頭に立つて走つた。ブットレルの心の中は勇ましく、落ちついて、浮き浮きしてゐた。戦争も彼の目には、たゞ自分を危険に曝し、死地に身を落とし入れながら、それによつて行賞にあづかり、この地の同僚や露西亞に残した友人の尊敬を贏ち得る、といふ事に過ぎないのであつた。戦争の他の一面——將卒や山民の戦死と負傷は、かういふと妙に聞こえるけれど、まるで彼の想像

に浮かばないのであつた。彼は自分の詩的戦争観を損はないために、無意識的に、戦死者や負傷者を決して見ない事にしてゐた。今日もさういふ譯で、味方に三名の戦死者と、十二名の負傷者が出来たけれど、彼は仰むけに倒れてゐる死骸の傍を通りすぎながら、たゞ蠟のやうな手の奇妙な恰好と、頭についてゐると赤いしみを横目に見たばかりで、立ち停まつて詳しく見ようとしなかつた。山兵は彼にとつて、馬に乗つた勇士チヤットとしか見えなかつた。彼はそれに對して、自衛しなくてはならないのであつた。

『まあ、かう言つたやうな具合なんだよ、君。』歌の切れめに少佐はかう言つた。『君たちがベテルブルグでやつてゐるやうに、右へならへ、左へならへ、とか言ふやうなのは違ふんだよ。かうして一稼ぎすると、そのまゝ家へ歸つて来る。するとマッシュールカが、うまい肉饅頭だの、すばらしい茶汁チャイを勧める、といふ寸法だ。悪くない生活だらう！ さうぢやないか？ さあ、今度は「曉の空は白みけり」だ。』と彼は自分の好きな歌を命令した。

少佐は或る看護卒の娘と、夫婦のやうに暮らしてゐた。彼の女は始めマールシカと呼ばれてゐたが、いまではマリヤ・ドミートリエヅナと言はれるやうになつた。マリヤ・ドミートリエヅナは白つぽい髪をした、顔ちうそばかすのある美しい女で、三十からになるけれど、子供がなかつた。過去はどうであらうとも、今では彼女は少佐の貞淑な生活の友で、まるで保母のやうに彼の面倒を見てゐ

た。それは、とき／＼正體なく酔ひつぶれる少佐にとつては、必要な事なのであつた。

要塞へ著いて見ると、なにもかも少佐の豫想どほりであつた。マリヤ・ドミートリエヅナは、少佐とブツトレルのほか、まだ支隊から招待された二人の將校にも、自分の拵へたらうまい料理をたつぷり馳走した。少佐はたらふく飲んだり食つたりしたので、もう物も言ふことが出来なくなつて、自分の部屋へ行つて寝て了つた。ブツトレルもやはり疲れてゐたけれど、すこし飲みすぎたチヒチヒリで、いい気持ちになりながら、自分の部屋へ歸つて行つた。そして著物を脱ぐか脱がないかに、毛のふさふさした美しい頭の下へ手を當てがひながら、夢もなくぐつすりと寝いつて了つた。

一七

侵襲によつて破壊された薩祖部落は、ハチ・ムラートが露西亞軍に投降する前、一夜をすごした村であつた。

ハチ・ムラートを泊めたサドーは、露西亞軍が部落へ押しよせて來たとき、家族を連れて山の中へ逃げこんだ。やがて村へ引き返したとき、サドーは自分の小家サドグが無慙に破壊されてゐるのを見いだした。屋根は落ち、外廊の戸や柱は焼きはらはれ、家の中は泥だらけになつてゐた。彼の息子――例の感激に満ちた表情でハチ・ムラートを見つめてゐた、輝かしい目をした美しい少年は、外

套をかぶせた馬の脊に乗せられて、死骸となつて回教寺院へ運ばれた。彼は銃劍で脊を刺し通されてゐた。ハチ・ムラートが訪ねて来たとき、かひなくしく彼に仕へた上品な顔だちの女は、いま胸の破れた肌著をきて、しなびた乳をだらりと垂らし、髪をおどろに振り亂したまゝ、息子の死骸のそばに立つて、血の出るまで我とわが顔を掻きむしりながら、絶えず泣き叫んでゐた。サドーは鶴はしとシヨベルを持つて、我が子の墓穴を掘るために、親類の人たちと一緒にどこかへ行つた。年とつた祖父は崩れた小家の壁ぎはに坐つて、杖を削りながら、鈍い目で前の方を見つめてゐた。彼はたつたいま、自分の養蜂場から歸つて来たばかりである。そこにあつた二山の乾し草は焼きはらはれ、彼が手づから植ゑて丹念に育てあげた、杏や櫻の木は折られたり、焼かれたりしてゐた。けれど、それより一ばん情ないのは、蜜蜂の巣箱がみんな焼かれた事であつた。女どもの泣き立てる聲が聞こえた。小さな子供らも、母親と一緒におい／＼泣いてゐた。餌がなくて飢ゑきつた家畜も、しきりに叫え立ててゐる。年かさの子供たちは遊ばうともしないで、憎えたやうな目で大人を眺めてゐた。

泉もわざと汚されたので、水を汲むことが出来なかつた。寺院も同じやうに穢されてゐるので、僧は伴僧といつしよにそれを掃除してゐた。露西亞人に對する憎しみは、誰も口に出すものがなかつた。老若すべてのチエチエニヤ人一同が経験した感情は、憎悪などよりもつと強いものであつた。

た。それは憎悪でなくて、露西亞の犬どもを人間と認めない気持ちであつた。この動物どもの愚かしい残忍性に對する、嫌悪と怪訝の念であつた。したがつて、鼠や蜘蛛や狼などと同じやうに、彼らを殲滅しようといふ希望は、自衛の感情と同様に、きはめて自然的なものであつた。村の住民にとつては、二つのうち一つを選ぶよりほかなかつた。このまゝこゝに踏みとゞまつて、長年の苦心の後にかくもやすやすと、無意味に破壊された一切のものを、再び恐ろしい努力を拂ひながら、また同じ災害がいつなんどき襲つて来るかも知れないと覺悟しながら、もとの姿に復興させるか、それとも宗教の掟や、露西亞人に對する嫌悪と侮蔑の念にさからひながら、彼らに屈服するか？老人たちは暫く祈禱した後、シャミールに使ひを送つて助けを乞ふことに、聲を揃へて議決した。そしてすぐさま、破壊されたものの復興に著手したのである。

一八

侵襲のあつた翌朝、ブットレルはもうあまり早くもない時刻に、裏口からそとへ出た。彼はいつもベトロフと一緒に、朝の茶をのむ事にしてゐたが、それまでにちよつと散歩して、新鮮な空氣を呼吸するつもりだつたのである。太陽はもう山蔭から出て了つたので、往來の右手に並んだ家々の白壁が、目に痛いほどその光線を反射させてゐたが、そのかはり左手の方を見ると、いつもながら

心が楽しく落ちついて来た。そこには、次第に高まりながら遠ざかつて行く、木立に蔽はれた黒い山々と、いつも雲に見せかけようと骨を折つてゐる、つや消しの白い雪の山並みがあつた。

ブットレルはこれらの山々を眺め、胸いつばいに息を吸ひこみながら、自分が生きてゐるといふ事を喜んだ。この美しい土地で生きてゐるのが、ほかならぬ彼自身だといふ事を、うれしく感じたのである。また自分が昨日の戦闘に、見事な振るまひをしたといふ事も、多少うれしかつた。攻撃のときは言ふまでもないが、かなり激戦状態となつた退却の時などは、特に立派な態度をとつたものである。また昨日行軍から歸つたとき、ペトロフの同棲者であるマーシャ、ではないマリヤ・ドミートリエヴナが、いろ／＼と馳走をして、彼ら一同にくだけた優しい應待ぶりを見せたが、彼にはかくべつ愛想がよいやうに思はれた。この追憶も快いものであつた。豊かな毛を大きく巻いた、肩はゞの廣い、胸の高く盛りあがつた、そばかすだらけの善良な顔に、微笑を輝かしてゐるマリヤ・ドミートリエヴナは、壯健な青年であるブットレルを、われともなしに惹きつけるのであつた。彼はマリヤが自分を欲してゐるやうにさへ思はれた。けれど、それは善良で單純な戦友に對して、よくない事だと考へたので、彼はマリヤ・ドミートリエヴナに極めて單純な、うや／＼しい態度を保つた。この事もわれながら快く感じられた。で、彼はいまこの事を考へてゐたのである。彼のかうした冥想は、ふと前の方に聞こえる夥しい馬蹄の、忙しさうな響きに破られた。それは

幾人もの騎手が、埃つばい道を疾驅してゐるやうな風であつた。彼が頭をあげて見ると、通の外づれから一團の騎手が、なみ足で近づいて來るのが目に映つた。二十人ばかりのコサツクの先頭に、二人の人が馬を進めてゐた。一人は白いチェルケス外套を著て、頭布を巻いた高い皮帽子をかぶつてゐた。いま一人は髪は黒い、鉤鼻をした露西亞將校で、軍服にも武器にもふんだんに銀をつけてゐた。頭布を巻いた騎手の乗つてゐる馬は頭の小さい、目の美しい、金色がかつた毛いろをした、見事な馬であつた。露西亞將校を乗せてゐるのは脊の高い、洒落たカラバフ産の馬であつた。馬すきのブットレルは、すぐさま第一の馬の逞しい力を見てとつたので、いつたい何ものだらうと立ち停まつた。將校はブットレルに問ひかけた。

『これ指揮官うちですか？』語尾の變化しない言葉とアクセントで、露西亞人でない事を暴露しながら、彼はから尋ねた。ブットレルはこれがさうだと答へた。

『これは誰ですか？』ブットレルは將校に近よつて、頭布を著た男を目でさしながら、から尋ねた。『ハチ・ムラートですよ、これが。こゝ來ました。軍長官のうち泊まります。』と將校が言つた。

ブットレルはハチ・ムラートの事も、その露西亞軍投降のことも知つてゐたが、こんな小さな要塞で彼を見ようとは、夢にも想像しなかつたのである。

ハチ・ムラートはさも親しげに彼を眺めてゐた。

『今日は、コシキールディ。』と彼は習ひ覺えた雑語の挨拶を言つた。

『サウプール(ご機嫌)』とハチ・ムラートは頷きながら答へた。彼はブットレルのそばに寄つて、手をさし延べた。その二本指に鞭がぶらさがつてゐた。

『長官ですか?』と彼は尋ねた。

『いや、違ひます。長官はこゝにゐますから、行つて呼んで上げませう。』ブットレルは將校に向かつてかう言ひながら、入り口の階段に足をかけて戸を押した。

けれど、マリヤ・ドミートリエヅナの謂はゆる正面玄関の戸は、鍵がかかつてゐた。ブットレルは二つ三つ戸を叩いて見たが、返辭がないので、ぐるりと裏口の方へ廻はつた。自分の從卒を呼んで見たが、やはり返辭がなかつた。二人もゐる從卒が一人も見つからないので、彼は臺所口へ廻はつた。マリヤ・ドミートリエヅナは頭を布でしぼり、兩袖をたくし上げて、肥えた白い兩腕をあらはし、顔をまつ赤にしながら、自分の手と同じやうにまつ白な、平たく延ばした握ね粉を、饅頭にするために小さく切つてゐた。

『從卒どもはどこへ行つたんでせう?』とブットレルは尋ねた。

『飲みに行つたんですよ。』とマリヤ・ドミートリエヅナは言つた。『どうしたんですの?』

『戸を明けて貰ひたいんです。家の前に山匪の大軍が押しかけてるんですよ。ハチ・ムラートが來

たんです。』

『まあ、いい加減なことばかり。』とマリヤ・ドミートリエヅナは、微笑しながら言つた。

『冗談ぢやないんですよ、本當に。玄関口に立つてゐます。』

『まあ、本當に?』マリヤ・ドミートリエヅナは言つた。

『あなたを騙したつて、仕様がないうちやありませんか。まあ、行つて見てごらんなさい。入り口の階段のそばに立つてゐますから。』

『それは大變だ。』マリヤ・ドミートリエヅナは兩袖を引きおろし、大きな鬚にさしたピンを手でいちつて見ながらかう言つた。『わたし行つて、イヴン・マトゼーギツチを起こして來ますわ。』と彼女は言つた。

『いや、僕自分でいきますよ。』とブットレルは言つた。

『なら、それでもいいわ。』とマリヤ・ドミートリエヅナは言つて、また自分の仕事にとりかかつた。

イヴン・マトゼーギツチは、ハチ・ムラートが訪ねて來たと聞いても、ハチ・ムラートがグロースナヤにゐる事を、もちやんと知つてゐたので、すこしも驚かなかつた。彼はなかば身を起こし、まづ紙を出して煙草を巻き、それをぼか／＼吹かしながら、大きな聲で咳きをしたり、あんな

厄介ものを送つてよとした長官を罵つたりした。やうやく著がへを始めた。著がへを終ると、彼は從卒に薬を持つて來させた。薬といふのは、フートカだと承知してゐる從卒は、すぐそれを彼にさし出した。

『この混合酒ほど悪い酒はありやしない。』フートカを飲みほして、あと口に黒麵麴をたべながら、彼はぶつ／＼言つた。『昨日チヒーリを飲んだので、いまだに頭が痛みやがる。さあ、もうこれでもいい。』と彼は支度を終へて、客間へ行つた。そこにはブットレルがハチ・ムラートと、同伴の將校を案内してゐた。

ハチ・ムラートに同行して來た將校は、左翼長官の命令をイヴン・マトゾーギッチに傳へた。それはハチ・ムラートを引き受けた上、斥候を通じて山民との交渉を許しながらも、コサックの護衛なしには、決して要塞外へ出してはならぬとの事であつた。

この書類を読み終つたイヴン・マトゾーギッチは、ちつとハチ・ムラートの顔を見つめて、またもや仔細に書類を點検しはじめた。かうして、書類からハチ・ムラートへと、幾度も目を移したのち、彼はやつとハチ・ムラートに視線を落ちつけながら、彼はかう言ひ出した。

『ヤクシー、ベツク、ヤクシー(承知しました、大承知しました)しばらくこゝに住まふがいい。僕はこの男をそとへ出すなといふ命令を受けてゐるんだから、その事を當人に言つといてくれたまへ。命令は神聖

だからな。ところで、どこへ置いたものかな——君、どう思ふ、ブットレル？——役所の方にしよらかね？』

ブットレルが答へる暇もない中に、臺所から來て戸口に立つてゐたマリヤ・ドミートリエヅナが、イヴン・マトゾーギッチに聲をかけた。

『なぜですの？ こゝへ置いたらいいぢやありませんか。客間クナールと納戸を明け渡しませうよ。さうすれば目も届くわけですからね。』彼女はかう言つて、ハチ・ムラートをちらりと見たが、兩方の視線がぶつつかると、急いで顔をそむけた。

『さうですね、僕も奥さんの仰しやる事が、もつともだと思ひますよ。』とブットレルが言つた。

『まあ、まあ、あつちへ行きなさい。こゝは女の出る幕ぢやない。』とイヴン・マトゾーギッチは眉を蹙めながら言つた。

かういふ話しの間ぢう、ハチ・ムラートは短劍の柄に手をのせ、ほんの心持ち輕蔑したやうな微笑を浮かべながら、ちつと腰かけてゐた。彼はどこに住まつても同じだと言つた。たゞ一つ自分の望みでもあり、また總督グバトールから許されてもゐる事は、ほかでもない、山民と聯絡を保つことである。だから、彼らを自分のところへ來させて貰ひたい。イヴン・マトゾーギッチは、希望どほりにしようと思つて、それからブットレルに向かつて、客に喰べるものを持つて來たり、部屋の用意などして

ゐる間、客の相手をして欲しい、自分は役所の方へ行つて、必要な書類を書き、必要な命令を興へて来るから、と頼んだ。

新しい知人に對するハチ・ムラートの關係は、すぐさま明瞭な形をとつて現はれた。イヴン・マトギーツチに對しては、最初一瞥した瞬間から、嫌惡と輕蔑の念を感じて、いつも彼に對しては尊大な態度を採つた。彼のために食事の用意をして、客間へ運んで來たマリヤ・ドミートリエヴナは、かくべつ彼の氣に入つた。彼の氣に入つたのは、この婦人の單純な性質と、彼にとつて異國的な感じのする特殊な美と、無意識に彼に反應するこの婦人の好感であつた。彼は彼女を見ないやうに、彼女と話さないやうに努めたが、その目はわれともなく彼女の方へ向けられて、その動作を注視するのであつた。

ブットレルとは知合ひになると早々、隔てのない親しみを感じた。彼は喜んでこの青年將校と語り、その經歷を尋ねたり、自分の生涯を物語つたり、斥候のもたらした家族に關する情報を傳へたりしたばかりでなく、將來自分のとるべき行動についても、彼と相談するやうにさへなつた。

斥候のもたらす情報は、香ばしくないものであつた。彼が要塞ですごした四日の間に、二ど斥候が尋ねて來たけれど、それは二度とも好からぬ知らせであつた。

一九

ハチ・ムラートの家族は、彼が露軍に降つてから間もなく、エヂェノ村へ移されて、シャミールの判決を待ちながら、監視の下に置かれることとなつた。女達——老母のタチマートと、二人の妻——と五人の小さい子供は、百人長イブラギム・ラシードの小家に、監視付きで暮らしてゐた。

ハチ・ムラートの息子で、十八になる青年ユスーフは、同じやうに自分の運命の決定を待つてゐる七人の囚人と一緒に、牢の中に入れられた。牢といふのは、深さ七尺以上もある穴であつた。

判決はなか／＼下らなかつた。それはシャミールが領内にゐないからであつた。彼は露西亞軍との戦ひに出征してゐたのである。

一八五二年の一月六日に、シャミールは露西亞軍との會戦後、エヂェノへ凱旋して來た。露西亞側の言葉によると、彼は大敗してエヂェノへ逃げ歸つたとのことであるが、彼自身と彼の部下の説に従へば、彼等は大捷を博して、露西亞軍を撃退したといふことである。この戦鬪で、彼は珍らしく自ら銃を放ち、劍を抜いて、いきなり露軍の眞つた中へ、馬を乗り入れようとしたが、彼に従つてゐた部下達がそれを止めた。その中の二人は、即座にシャミールの馬前で戦死した。

晝頃、シャミールは部下の一隊に取圍まれながら、自分の居城に近づいた。部下達は彼のまはり

で、馬の曲乗りをしたり、小銃やピストルを放つたり、絶えず『リヤ、イリヤフ、イリ、アラ』(アラの神に光榮あれ)と歌ひつゞけてゐた。

この大部落エヂェノの村民は、残らず往來や屋根の上に立つて、自分たちの主君を出迎へた。そして、凱旋を祝ふしるしに、やはり小銃やピストルを打つた。シャミールは白いアラビヤ馬に跨がつてゐた。馬は住まひへ近づくに随つて、浮き浮きと手綱をしやくり始めた。馬具はごく單純なもので、金や銀の飾りが一切なかつた。眞ん中に細い筋の入つた、細工の細かい赤革の馬勒と、コップのやうな形をした金屬性の鎧と、鞍の下から覗いてゐる赤い鞍褥と、たゞそれだけであつた。宗首は、頸と袖口に黒い毛皮を覗かせた鳶色羅紗の外套を着て、細いすなりとした腰の邊を黒い革帶でぎゆつと引き締め、それに短劍を吊るしてゐた。頭には上の平たくなつた高い總つきの毛皮帽子を被り、それに白い頭布を巻き付け、一方の端を頸の邊に垂らしてゐた。緑色の柔らかい靴を穿いた足頸と脛は黒い脚絆に包まれ、その上からありふれた紐で縛られてゐた。

全體に宗首は、金銀の輝かしい飾りを一さい身に著けてゐなかつた。著物にも武器にも金や銀の飾りを附けた、部下たちを取巻かれてゐる、飾り氣のない服装をした、脊の高い逞しげな彼の姿は、彼の豫期してゐたやうな莊重な印象を、群衆に與へた。彼はいつも、かういふ印象を與へるのが上手であつた。短く刈り込んだ赤い鬚に隈取られ、いつも小さな眼を細めた彼の蒼白い顔は、ま

るで化石したもののやうに、びくりとも動かなかつた。彼は部落を通過しながら、自分の方へ注がれた數千の視線を感じたけれど、その目は誰も眺めようとしなかつた。ハチ・ムラートの妻たちも、家の人々と一緒に廻廊へ出て、領主の入城を見物してゐた。たゞハチ・ムラートの母パチマートだけは、出て見ようとしなくて、いつものやうに白髪を振り亂し、長い手で瘦せた膝を抱へたまま小家の床の上にじつと坐つて、灼けつくやうな黒い目をしばたきながら、煖爐の中に燃え残る小枝を見つめてゐた。彼女は息子と同じやうに、いつもシャミールを憎んでゐたが、今はこれまでより一そら烈しい憎惡を感じたので、彼を見物に出る氣がしなかつたのである。

ハチ・ムラートの息子も、やはりシャミールの花々しい凱旋を見なかつた。彼は惡臭紛々たる暗い穴の中で、發射の音や歌聲を聞きながら、生命に充ち満ちて、しかも自由を奪はれた若人でなければ、到底味はへないやうな苦痛を経験した。わる臭い穴の中に坐つて、自分と一緒に幽閉せられ、多くは互に憎み合つてゐる、意地のわるい、不幸な、弱り果てた汚らしい人々を見ながら、彼は空氣と光りと自由を享樂し、逸物に跨がつて宗首の周圍を見事に乗りまはしながら、鐵砲を撃つたり、『イリヤフ、イリ、アラ』と聲を揃へて歌つてゐる人々を、心の底から羨ましく思つた。

部落を通りすぎると、シャミールは大きな廣庭へ乗り込んだ。それはシャミールの宮殿の建つてゐる、奥庭へ通じるものであつた。武装した二人のレズギヤ人が、外庭の明け放した門の兩脇に立つ

てゐた。外庭は人間で一杯であつた。その中には、自分の用事で遠方からやつて来た人もあれば、請願者もあり、また裁判や判決のために、シャミール自身から呼び出されたものもあつた。シャミールが門内に入ると同時に、集まつてゐた人々は一齊に起ち上がつて、両手を胸に當てながら、忝しく宗首を歓迎した。中にはそこに膝をついて、シャミールが外門から内門へ通り過ぎるまで、ずっとそのまゝでゐる者もあつた。シャミールは自分を待つてゐる人々の間に、多くの不愉快な顔も見だし、厄介なうるさい請願者も少からず發見したが、彼は相變はらず化石したやうな顔をして、その傍を通りすぎた。そして内門の中へ入ると、門のすぐ左側にある廻廊の傍で馬をおりた。行軍に伴なふ緊張のために、彼はぐつたりしてゐた。しかし、それは肉體的疲勞といふより、精神的疲勞であつた。なぜといつて、シャミールは今度の戦争を味方の勝利と公表はしたものの、この戦ひが結局失敗に終つて、多くのチェチュニヤ部落が焼き拂はれて荒廢に歸し、輕薄で變はり易いチェチュン人どもの間に動搖が生じ、露西亞領に近く住んでゐるものは、もう露軍に投じようと思へてゐるのを、よく承知してゐたからである。

これらはすべて苦しいことであつた。それに對して何か方法を講じなければならぬ。けれどこの瞬間、シャミールは何にも考へたくなかつた。いま彼が欲してゐるのは、たゞ一つのことばかりであつた。それは休憩と家庭的愉快であつた。多くの妻の中でも一ばん氣に入つてゐる、目の黒い、

足の速い、十八になるキンチン女、アミネートの愛撫である。

けれど今は、男の住まひと女の住まひを隔ててゐる、塀のすぐ向かふにゐるアミネートに逢ふことなどを、考へるわけにゆかなかつた（アミネートは彼が馬からおりるところを、昨かの妻妾たちと一緒に、塀の隙間から見えてゐるに相違ない、彼はそれを信じて疑はなかつた）。彼女の傍へ行くことが出来ないばかりでなく、羽蒲團の上に身を横たへて、疲れを休めることすらできなかつた。今は何よりも先づ第一に、正午の塗油式を行はなければならなかつた。そんなことをする氣には、まるでなつてゐなかつたけれど、それを忘るるのは、全國民の宗教的指導者の位置にある彼として、許すべからざることであつたし、また彼自身にとつても、それは日々の食事と同じやうに、必要缺くべからざることであつた。で、彼は齋戒沐浴を行ひ、祈禱にかかつた。祈禱を済ますと、自分を待つてゐる人々を呼び出した。

第一番に入つて来たのは、彼の舅であり教師である、チェマール・エチンといふ脊の高い、品のいい老人であつた。彼は雪のやうに白いあご鬚を生やし、赤々と血色のいい顔をしてゐた。神に祈りを捧げたのち、彼はシャミールに行軍中の出来事をたづね、留守中に山中で起こつたことを話しはじめた。

骨肉の仇討ちや、家畜の盜難や、喫煙・飲酒など回教聖書の掟に違反して罰せられた人々や――

ありとあらゆる事件の中で、チェマール・エチンは次ぎのやうなことを報告した。それはハチ・ムラートが家族を露西亞側へ移すために、人を差向けたけれど、その計畫が露顯して、家族はエチエノ村へ移され、領主の裁決を待つために監禁されてゐる、といふことであつた。次ぎの客間では、これらの事件を評議するために、老人連が集まつてゐた。チェマール・エチンはシャミールに向かつて、彼等はもうこれで三日間、宗首の歸りを待ちつゞけたのだから、今日すぐにも會議を終へて、彼等を解散させたがよいとすゝめた。

ザイデートといふ鼻の尖つた、色の黒い、不快な顔つきをした妻の一人が、彼のところへ食事を持つて來た。彼はこの女が嫌ひだつたけれど、しかし彼女は多くの妻の中でも、一ばん年長で権力があつた。シャミールは居間で食事を済ますと、客間へ出かけて行つた。

顧問役になつてゐる六人の老人が、彼を迎へるやうに起ち上がった。灰色、胡麻鹽、赤毛など、さまざまな色をしたあご鬚を生やし、頭布を巻いたのや巻かないのや、思ひ思ひの毛皮帽子を被り、新しい下著やチュルクス外套を著込み、その上から短劍を著けた革帯を締めてゐた。シャミールは彼等一同に較べて、首から上だけ抜け出るほど脊が高かつた。彼等はシャミールに做つて、手のひらを上に兩手を擧げ、目をとちて祈禱を唱へた。それから兩手で顔をつるりと撫でて、顎鬚を上から下へ撫でおろし、その先で兩手を合はせた。それが済むと、一同は腰をおろした。シャミール

は、その眞ん中に置かれた一段高いクッションに腰をおろした。やがて當面の問題に關する評議がはじまつた。

さまざまな罪を犯した人々の事件は、回教法令によつて裁斷された。二人の竊盜犯は片手を切り落とし、一人の殺人犯は首を刎ね、三人の者は放免といふことに、判決が下された。それから最後に重大な問題に移つた。それはチェチエン人の露西亞軍投降に對する處置の考究である。この裏切りに對する對抗策として、チェマール・エチンは次ぎのやうな宣言を起草した。

『余は全能の神とともに、永遠の平和を汝らに望むものなり。聞くところに依れば、露西亞人は汝等を愛撫して、歸順を勧誘するが如し。汝ら彼らを信じて歸服することなく、須らく隠忍すべし。もし現世に於てその酬いを享くことなくば、來世に於て必らず報いらるべし。汝等は曾て露軍に武器を奪はれたることを想起せよ。もし當時一八四〇年に於て、神汝等に叡智を授け給はざりしならば、汝等は夙に露軍の一兵卒となり、汝等の妻はシャロヴール（幅廣きすばんの一種）を穿たずして外出し、凌辱の憂き目を見たりしならん。過去によりて未來を判ぜよ。異教徒と共に生活せんよりは、むしろ露軍との争鬪に死するに如かず。しばらく隠忍せよ。余はコーランと劍を用ちて、汝等のもとに到り、汝等を率ゐて露軍に向かふべし。但し刻下の場合としては、露軍投降の企圖を抱くは勿論、かゝる假想を試むることさへ、嚴に禁ずるものなり。』

シャミールはこの宣言を裁可して、これに署名し、その頒布方を許した。

かういふ問題のあとで、ハチ・ムラートの事件も評議にかかった。これはシャミールにとつて、非常に大きな問題であつた。彼は自認することを望まなかつたけれど、もしあの敏捷で、大膽で、勇敢なハチ・ムラートが味方についてゐたら、今チエチエニヤに持ち上がつてゐるやうな事件は、起こらなかつたに相違ない、といふことをよく知り抜いてゐた。ハチ・ムラートと和解して、ふたたび彼の功勞を利用することができれば、これほど結構なことはないが、もしそれが出来ないにしても、彼が露西亞軍を援助するなどといふことは、到底認容するわけにゆかない。従つていづれにせよ、彼を呼びつけなければならぬ。呼びつけて、殺して了はなければならぬ。その方法としては、彼を暗殺し得るやうな人間をチフリスへ送るか、それとも彼をこゝへ呼び寄せて、こゝで片付けてしまふかである。第二策に對する唯一の手段としては、彼の家族、とりわけ彼の息子である。ハチ・ムラートが自分の長男に熱烈な愛を注いでゐることは、シャミールも承知してゐた。かういふわけであるから、彼の息子を囹とするに如くはない。

顧問の老人達がこのことを評議し終つた時、シャミールは目をとちて口をつぐんだ。

それは他でもない、彼はこれから彼の爲すべきことを啓示する、豫言者の聲に耳を傾けてゐるのであつた。顧問の老人たちもそれを知つてゐた。莊重な五分間の沈黙ののち、シャミールは目を見

開いた。そして前より一そう兩眼を細めながらかう言つた。

『ハチ・ムラートの息子をこゝへ連れて來い。』

『あれはこゝに居ります。』とチエマール・エチンは言つた。

果してハチ・ムラートの息子のユスーフは、もう呼び出しを覺悟しながら、外庭の門際に立つてゐた。彼は瘦せて青ざめた顔色をし、著物はぼろ／＼になつて悪臭を放つてゐたが、それでも姿も顔も美しく、黒い目は祖母パチマート似で、灼けつくやうに輝いてゐた。

ユスーフはシャミールに對して、父親のやうな感情を持つてゐなかつた。彼は過去の事情を全部知らなかつたし、知つてゐたにしても、自らそれを體驗しなかつたので、なぜ父がああ執拗にシャミールと反目・嫉視してゐるのか、わけが分からなかつた。彼はたゞ一つのことしか望んでゐなかつた。それは彼が太守の息子としてフンザーフで送つてゐたやうな、輕快・安逸な生活を續けることであつた。従つてシャミールと抗争することは、まったく不必要に感じられた。彼は父に反して、ことさらシャミールに隨喜、渴仰し、山中でも評判になるほどの感激と、崇拜の情を捧げてゐた。今も彼は宗首に對して戦々兢兢たる敬虔の念を抱きながら、客間へ入つて來た。戸口で立ちどまつた拍子に、目を細めたシャミールの執拗な視線にぶつかつた。彼はしばらく佇んでゐたが、やがてシャミールに近寄つて、指の長い、大きな、白い手に接吻した。

『お前がハチ・ムラートの息子か？』

『さうでございます、宗首。』

『お前は何をしたか知つてゐるか？』

『存じて居ります、領主。そして遺憾におもつて居ります。』

『字は書けるか？』

『わたくしは僧侶になる準備をして居りました。』

『それでは父親にから書いてやるがよい——もし今大祭までにわしのところへ歸つて來たら、わたしは彼を赦してやつて、萬事もと通りにしてやる。が、もしさうでなくて、彼が露西亞軍にとゞまるならば、』とシャミールは眉を険しくひそめた。『わたしはお前の祖母と母を、村の者に引き渡し、お前は斬首の刑に處してしまふぞ。』

ユスーフは顔の筋一本動かさなかつた。彼はシャミールの言葉を合點したといふしるしに、頭を下げて會釋した。

『その通りに書いて、わしの使者に渡すがよい。』

シャミールは口をつぐんで、長い間ユスーフの顔を見つめてゐた。

『父親にさう書いてやれ——わたしはお前を可哀さうに思ふから、殺すことはしないけれど、すべて

の謀叛人と同じやうに、兩の目を剝り抜いてやる、とな。さあ行け。』

ユスーフは、シャミールの面前では平靜に見えたけれど、客間から連れ出された時、いきなり護衛の者に飛びかかつて、その鞘から短刀を引き抜き、ひと思ひに自害しようとした。けれど、人はその兩手を捉へて縛り上げ、また穴の中へ連れて行つた。

その晩、夜祈禱が終つて、あたりがすっかり黄昏れた時、シャミールは白い毛皮外套を羽織つて、妻妾たちの置かれてゐる屋敷の一隅をさして、塀の外へ出て行つた。そして、アミネートの部屋へ足を向けた。けれどアミネートはそこにゐなかつた。彼女は年上の妻妾たちの所にゐたのである。その時シャミールは人目に立たぬやうにしながら、戸の蔭にかくれて彼女を待つてゐた。けれどアミネートは、シャミールが絹の切れを自分にくれないで、ザイデートにやつたといふので、腹を立ててゐた。彼女はシャミールが庭へ出て、自分の部屋へ入つて行つたのも、自分を捜してゐるのも見てゐながら、わざと自分の部屋へ歸らなかつた。彼女は長い間、ザイデートの部屋の戸口に立つたまゝ、自分の部屋を出たり入つたりしてゐる、シャミールの白い姿を見ながら、低い聲で笑つてゐた。空しく彼女の歸りを待つたのち、シャミールはもう夜半の祈禱の時刻に、自分の居間へ引き返した。

ハチ・ムラートは要塞の中なるイブン・マトギーツチの家で、一週間ばかり暮らした。マリヤ・ドミートリエヴナは、毛むくじやらのハネーフィが（ハチ・ムラートはハネーフィとエルダールの二人だけしか供に連れなかつた）、あぶなく彼女を斬り殺しかけたといつて、彼を臺所から突き出したことがあるにも拘らず、ハチ・ムラートに對して特殊の尊敬と、同情の念を抱いてゐるらしい。彼女は食事の世話をエルダールに委せてしまつて、今では自分で給仕などしなくなつたけれど、何かにつけて彼の顔を見、彼の氣に入るやうに努めてゐた。彼女はまた、ハチ・ムラートの家族に關する談判にも、熱心な興味を示して、彼に妻や子供がいくたりあつて、その歳はいくつか、といふやうなことで承知してゐた。そして、いつも斥候がやつて来るたびに、その交渉の結果を誰かれの差別なく、根掘り葉掘り尋ねるのであつた。

ブットレルはその一週間に、すつかりハチ・ムラートと仲よくなつて了つた。時々ハチ・ムラートが、彼の部屋へやつて來ることもあつたし、また時にはブットレルが、彼の部屋へ訪ねて行くこともあつた。二人は通辯を介して話しをしたが、どうかすると、自分自身の方法で語り合ふこともあつた。それは手眞似、といふよりも主に微笑であつた。ハチ・ムラートは、ブットレルが氣に入

つたらしかつた。それはブットレルに對するエルダールの態度で分かつた。ブットレルがハチ・ムラートの部屋へ入ると、エルダールはさも嬉しさうに、輝かしい齒を見せながら彼を出迎へ、大いそぎでクッションをすゝめたり、劍を吊つてゐる時には、それを外づしてやつたりした。

ブットレルは、ハチ・ムラートの義兄弟になつてゐる、毛むくじやらのハネーフィとも近づきになつて、互に相親しむやうになつた。ハネーフィは山の歌をたくさん知つてゐて、それを上手に歌つた。ハチ・ムラートはブットレルを喜ばすために、ハネーフィを呼んで、自分のいいと思つた歌を名ざしながら、彼に歌はせるのであつた。ハネーフィの聲は高い中音で、その歌ひ方は極めて明瞭で、しかも表情に満ちてゐた。それらの歌の一つは、殊にハチ・ムラートの氣に入つてゐたが、ブットレルもその莊重で憂鬱な旋律に感動させられた。ブットレルは通辯に頼んで、その内容を譯して貰つた。

その歌はハネーフィとハチ・ムラートとの間にあつた、復讐事件を主題としたものであつた。歌の文句は次ぎのやうであつた。

『わが墓の上なる土は乾き果てん。而してわが生みの母よ、汝はわれを忘るべし。墓畔には名もなき草生ひ茂りて、わが老いたる父よ、汝の悲しみは草に埋もれ果つべし。わが妹の目に涙は乾き、悲しみはその胸より飛びさるべし。』

『されどわが兄よ、わが死に報いさるかぎり、汝はわれを忘れさるべし。而してわが弟よ、わが傍

らに屍を横たへざるかぎり、汝もわれを忘るゝことなからん。

『あゝ弾丸よ、汝は火の如く熱く、人に死を齎らせども、われに忠なる奴隷たりしは、汝ならずや？ 黒土よ、汝はわれを蔽へども、汝を馬蹄に踏みにじりしは、われならずや？ 死よ、汝は冷やかなりといへども、われは汝の主なりしを。大地はわが骸を抱き、天はわが魂を收むるならん。』

ハチ・ムラートはいつも目をとちたまゝ、この歌を聞いてゐた。そして、歌聲が靜かに尾を引きながら消えて行く時、いつも露西亞語でかう言つた。

『よろしい歌、かしい歌。』

何か一種特別な力に満ちた山の生活の詩趣が、ハチ・ムラートの到著と、その一行との接近によつて、一そう強くブツレルを魅了した。彼は自分でも下著や、チェルケス外套や、革の柔らかな長靴などを作つた。彼は自分も山民の一人で、ハチ・ムラートなどと同じやうな生活を營んでゐるやうな氣がした。

ハチ・ムラートが出發する日に、イヴン・マトエーギツチは幾人かの將校を集めて、彼のために送別會を開いた。將校連は、マリヤ・ドミートリエヅナが茶をつぎ分けてゐる、卓子の傍に坐るものもあれば、フートカヤ、高架索酒や、下物などの置いてある、卓子の傍に陣取るものもあつた。そのとき旅装を整へたハチ・ムラートが、素早い柔らかな足取りで、跋をひきながら部屋へ入つて

來た。一同は起ち上がつて、順々に彼と握手した。イヴン・マトエーギツチは彼を圓榻に招じたが、彼は一禮して、窓際の小椅子に腰をおろした。彼が入つた時、一座を襲つた沈黙も、一向彼をまごつかさなかつたらしい。彼は注意ぶかく一同の顔を見廻はしたのち、サモヴールや下物の載つてゐる卓子に無關心な目を止めた。はじめてハチ・ムラートを見た、ペトローフスキイといふ元氣のいい將校が、チフリスは氣に入つたかと、通辯を介して彼に尋ねた。

『アイヤ。』と彼は言つた。

『さうだといふのです。』と通辯が説明した。

『どういふところが氣に入つたんです？』

ハチ・ムラートは何か答へた。

『何よりも芝居が氣に入つたさうです。』

『なるほど、ぢや總指揮官の舞踏會は氣に入りましたかね？』

ハチ・ムラートは顔を擧げた。

『どの國民にもそれぞれ習慣があるものですな。わたし共の方では、女があんな身なりをする事はありません。』マリヤ・ドミートリエヅナの方をちらと見て、彼はかう言つた。

『どうです。氣に入らなかつたのですか？』

『わたし共の國にはからいふ諺があります。』と彼は通辯に言つた。『犬が馬に肉を食はせ、驢馬が犬に秣を食はせて、兩方とも飢ゑ死にしまつた。』と彼はにつこり笑つた。『どんな國民でも、自分の習慣がよく見えるのですよ。』會話はそれ以上續かなかつた。將校連はそれぞれ茶を飲んだり、下物を摘まんだりしはじめた。ハチ・ムラートは、すゝめられた茶のコップを受け取つて、それを自分の前に置いた。

『いかゞです、クリームは？』フランス麵麩は？』とマリヤ・ドミートリエヅナはすゝめた。

ハチ・ムラートは會釋した。

『それぢや、もう左様ならだね！』とブットレルが彼の膝に觸はりながら言つた。『今度はいつ會ふだらう？』

『左様なら、左様なら。』とハチ・ムラートは微笑しながら、露西亞語で言つた。『親友ブルル。いつまでも君の親友だ。さあ、アイダー、もう出かける時だ。』これから乗り出すべき方向を示すかのやうに、頭を一振りしながら、彼はかう言つた。

部屋の戸口に、何か大きな白いものを肩に掛け、手に劍を持つたエルダールの姿が現はれた。ハチ・ムラートがさし招くと、エルダールは大股にその方へ近づいて、白い外套と劍を渡した。ハチ・ムラートは立ち上がつて外套を取り、それを腕に掛けたのち、何やら通辯に言ひながら、マリヤ

・ドミートリエヅナに渡した。

通辯は説明した。

『あなたがこの外套をお賞めになつたから、進呈すると仰しやるのです。』

『何だつてそんなことを？』とマリヤ・ドミートリエヅナは、顔を赧くして言つた。

『さうしなくちやいけないのです。さういふ仕きたりなんです。』とハチ・ムラートは言つた。

『では、有難く戴きませう。』マリヤ・ドミートリエヅナは、外套を受け取りながら言つた。『どうか首尾よく息子さんが救ひ出せますやうに。』と彼女は言ひ添へた。『ウラン、ヤクシー(立派な勇士だ)』と彼女は言つた。『どうか家族の方を無事に救ひ出したさるやう、蔭ながら祈つてゐますと言つて頂戴。』

ハチ・ムラートはマリヤ・ドミートリエヅナを見やつて、わが意を得たりといふやうに一つ頷いた。それから、彼はエルダールの手から劍を取つて、イヴン・マトギーヅチに差出した。イヴン・マトギーヅチは劍を受け取つて、通辯にから言つた。

『どうかわしの栗毛に乗つて行くやうに言つてくれ給へ。ほかに返禮の仕様がないから。』

ハチ・ムラートは顔の前で手を振りながら、自分は何も要らないから、決してそんなものを受け取らない、といふ心を示した。やがて、彼はまづ山々を指さしたのち、自分の心臓に手を當てなが

ら、出口の方へ歩いて行つた。一同はそのあとに續いた。部屋に残つた將校たちは劍を抜いて、刀身をしきりに吟味してゐたが、これは本當のグルダ(古刀の一種)だ、といふことに衆議一決した。

ブットレルはハチ・ムラートと一緒に、入り口の階段に出た。けれどその時、誰しも思ひがはいやうなことが持ち上がった。もしハチ・ムラートの慧眼と、決断と、敏捷さがなかつたら、彼の死をもつて終るやうな事になつたかも知れないのであつた。

ターリヤ・カチュといふクマイク村の人々は、ハチ・ムラートに對して深い敬慕の念を抱き、この有名な首領の顔を見るために、幾たびも要塞へやつて来てゐたが、ハチ・ムラートの出發する三日前、金曜日に自分たちの寺へ来てほしいと使ひをよこした。ところが、同じターリヤ・カチュに住んでゐて、かねがねハチ・ムラートを憎み、不倶戴天の仇と狙つてゐるクマイクの王達が、このことを嗅ぎつけると、決してハチ・ムラートを寺院へ入れるでないと、人民一同に布告した。人民の間には動搖が起つて、王の一味との間に鬭争が持ち上がった。露西亞官憲は山民の争ひを鎮撫して、ハチ・ムラートのところへは、寺へ行かないやうにしろ、と言つてやつた。ハチ・ムラートは行かなかつた。で人々は、それで事件が終つたものと思つてゐた。

けれど、ハチ・ムラートの出發の間に、馬を待たせてある車寄せまで出た時、ブットレルもイヴン・マトゾーギツチもよく知つてゐる、アルスラン・ハンといふクマイクの王が、イヴン・マト

ゾーギツチの家へ乗りつけた。

ハチ・ムラートを見ると、彼は帯からピストルを抜いて、ハチ・ムラートに銃口つゝくちを向けた。けれど、アルスラン・ハンが引き金を引くまもなく、ハチ・ムラートは跛を引いてゐるにも拘らず、猫のやうに素早く、入り口の階段からアルスラン・ハンに跳びかかつた。アルスラン・ハンは火蓋を切つたけれど、當たらなかつた。ところが、ハチ・ムラートはその傍に駈け寄ると、片手で馬の手綱を掴み片手で短劍を引き抜いて、何やら雑言で叫んだ。

ブットレルとエルダールは、同時に二人の傍へ駈けつけて、その手を抑へた。イヴン・マトゾーギツチも銃聲を聞きつけて、表へ出て來た。

『アルスラン、どうして君はおれの屋敷内で、かういふ不體裁なことを仕でかしたのだ？』彼は事情を聞いてかう言つた。『よくないことだよ、君。野つばらなら何をしようと思つたが、おれの屋敷でこんな血まみれ騒ぎをはじめなんて、怪しからんぢやないか。』

アルスラン・ハンは、黒い口鬚を生やした小柄な男であつたが、眞蒼な顔をして、震へながら馬からおり、憎々しげにハチ・ムラートを睨みつけて、イヴン・マトゾーギツチと一緒に、家の中へ入つてしまつた。ハチ・ムラートは重々しく息をつきながら、微笑を含んで馬の方へ引き返した。

『なぜあの男はハチ・ムラートを殺さうとしたんだね？』とブットレルが通辯に尋ねた。

『それはあの人達の掟なんださうです。』と通辯はハチ・ムラートの言葉を傳へた。『アルスラン・ハンは、この人の流した血のために、復讐しなければならぬのです。それでつまり、殺さうとしたわけなんです。』

『ふむ、では、もし途中追つかけて來たら？』とブットレルが尋ねた。

ハチ・ムラートはにっこり笑つた。

『なに——もし殺されたら、それはつまり天帝のみ心なんです。では、左様なら。』と彼はまた露西亞語で言つて、馬の立てがみを掴みながら、見送りの人々をぐるりと一巡見廻はした。ふとその目が、マリヤ・ドミートリエヅナの視線と優しく出會つた。

『奥さん、左様なら。』彼女の方へ向きながら、ハチ・ムラートはかう言つた。『有難う。』

『どうぞ首尾よく、家族の方をお救ひになりますやう。』とマリヤ・ドミートリエヅナは繰り返した。

彼は言葉の意味こそ解しなかつたけれども、自分に對する彼女の同情を直覺して、一つ頷いて見せた。

『いいかね 親友を忘れちゃいけないぜ。』とブットレルが言つた。

『どうかさう言つてくれ——わしはあの人の永久の親友だから、決して忘れるやうなことはない。』と彼は通辯を介して答へた。そして片足が短いものにも似合はず、ちよつと鎧に觸れたかと思ふと、

ひらりと軽く自分の體を高い鞍の上へ乗せた。それから馴れた手つきでピストルに觸はつて見て、

劍の位置を正したのち、高架索の山民でなければ見られないやうな、二種特別な傲然たる態度で馬を進めながら、イヴン・マトゼーギツチの家を離れた。ハノーフィとエルダールも同じく馬に跨がつて、さも親しげに主人夫婦や將校たちと別れを告げ、主人の後を追つ駈け出した。

いつもかういふ場合の例に洩れず、出て行つた人の噂話しがはじまつた。

『えらい男だ！ あのアルスラン・ハんに跳びかかつた時の様子はどうだ。まるで狼ぢやないか。

顔つきが變はつてゐたよ。』

『しかし、あいつ我々を瞞すに相違ない。大きな山師らしいからな。』とペトローフスキイが言つた。

『どうかああいふ山師が露西亞人の間にも、なるべく澤山できるやうにしたいものですわ。』マリヤ・ドミートリエヅナが、急に忌ま忌ましさうに口を入れた。『あの人は一週間わたし共に泊まつて行かれましたが、たゞいいことよりほか、なんにも目に入りませんでしたよ。』と彼女は言つた。『禮儀たゞしくつて、利口で、曲がつたことの嫌ひな人です。』

『どうしてあなたは、そんなに何もかもお分かりになつたんでせう？』

『分かつたから分かつたんですわ。』

『惚れこんぢやつたんだよ。』とそこへ入つて来たイヴン・マトエーギツチが言つた。『そりや間違ひないんだ。』

『え、惚れこんでしまひましたよ。それがどうしました？ だつて、いい人のことを何だつて悪く言ふんです？ あの人は韃靼人だけれど、立派な人間ですわ。』

『本當です、マリヤ・ドミートリエヴナ。』とブットレルが言つた。『あの男の肩を持つておやりになつたのは、全くえらいもんですな。』

一一一

チエチニヤ線上に於ける前哨堡壘内の生活は、依然として變はりなく流れてゐた。その後二度まで敵軍襲來の警報が傳へられて、中隊が出動したり、民兵が駆け出したりしたけれど、二度とも山匪を抑留することが出来なかつた。彼等は無事に引き揚げて了つた。しかも一度などはズドギーゼンスクで、水を吞ませに連れて行つたコサツクの馬を八頭掠奪して、コサツク兵を一人殺して行つた。部落が荒廢に歸せられて以來、敵の侵襲はまるでなかつた。たゞ左翼長官として、バリヤーチンスキイ公爵が新しく任命された結果、大チエチニヤへ向かつて、大規模の遠征が行はれるものと期待されてゐた。

バリヤーチンスキイ公爵は總督の親友で、かつてカバルチャ聯隊の隊長をつとめてゐたが、今度全左翼軍の長官として、グロースナヤへ來著するや否や、チエルヌイシコーフがブロンツォーフに書面で知らせてやつた、皇帝の計畫を實行するために、一個支隊を召集した。ブズドギーゼンスクに召集された支隊は、クーリン方面の陣地をさして出發した。軍隊はこの陣地に駐屯して、森の伐採などをしてゐた。ブロンツォーフ若公爵は立派な羅紗の天幕に暮らしてゐた。妻のマリヤ・ブシーリエヴナが陣地にやつて來て、よくそこで泊まつて行つた。マリヤ・ブシーリエヴナとバリヤーチンスキイの關係は、もう誰にとつても秘密ではなかつた。従つて、宮中づとめなどをしたことのない將校や兵士らは、彼女が野營へ來るお蔭で、夜間の秘密偵察に出されるのを嫌つて、口汚く彼女を罵るのであつた。よく山匪は大砲を引つ張つて來て、陣中へ砲弾を放つた。この砲弾は概ね命中しなかつたので、いつもこの砲撃に對して、別に方法を講じようとしなかつた。けれど、マリヤ・ブシーリエヴナがある時には、山匪が大砲を引つ張つて來て、彼女を驚かしたりする事のないやうに、秘密偵察が方々へ派遣されるのであつた。一人の貴婦人を驚かさないために、夜間の秘密偵察に出あるくといふ事は、忌まひしい癪に障はる話であつた。で、兵士らをはじめとして、上流の社交界に容れられない將校たちは、蔭でマリヤ・ブシーリエヴナに悪口、雑言を浴びせるのであつた。

ブットレルも、この支隊に集まつてゐる幼年學校時代の同窓や、長官付きの副官や傳令として勤務してゐるクリーン聯隊の同僚に逢ふために、堡壘から休暇を貰つてやつて來た。こゝへ來てから暫くの間は、彼も大いに愉快であつた。彼はポルトラーツキイの天幕に落ち著いて、そこに心から自分を歓迎してくれる多くの知人を見出した。彼はブロンツォーフのところへも行つた。彼は一時この人と同じ聯隊に勤めてゐたので、多少知り合つてゐたのである。ブロンツォーフは頗る愛想よく彼を迎へて、バリヤーチンスキイ公爵に紹介した上、送別の宴會に彼を招待した。それはバリヤーチンスキイ公爵の就任前に、左翼長官をしてゐたコズロフスキイ公爵のために、催されるものであつた。

宴會は素晴らしかつた。澤山の天幕が方々から寄せ集められて、いく列にも並べられた。そして、天幕の長さだけに食卓が配置され、その上には食器や酒の瓶が一面に並べられた。何もかも、ベテルブルグの近衛隊の生活を聯想させるものばかりであつた。午後二時に、一同は食卓に向かつた。真中にはコズロフスキイとバリヤーチンスキイが、兩側から向かひ合つて坐つた。コズロフスキイの左右にはブロンツォーフ夫妻が席を占めた。食卓の兩側にはカバルチャ聯隊とクリーン聯隊の將校たちが、すらりと綺羅星のやうに居流れた。ブットレルはポルトラーツキイと並んで坐つた。二人とも陽氣さうに喋りながら、近所の將校連と盃を交はしてゐた。いよいよ焼き肉が出る

段になると、從卒らは、銘々の盃にシヤムパンを注ぎはじめた。ポルトラーツキイは心の底から心配さうな、同情に堪へないやうな調子でブットレルに言つた。

『わが「いかに」(コズロフスキイ)將軍はいい恥ぢを掻くぜ。』

『どうして?』

『だつて演説をやらなくちやならんのだぜ。あの先生にそんなことが出来るかい?』

『さうだよ、君、こいつは彈丸雨注の下で、堡壘を占領するやうな具合には行かんからな。おまけに隣りには貴婦人がゐるし、宮中摺れのした貴族連も控へてゐるんだからな。まつたく目が當てられないくらゐだよ。』こんなことを將校達は互に話しあつた。

けれど、いよいよ莊重な瞬間がやつて來た。バリヤーチンスキイは立ち上がつて、盃を擧げながら、コズロフスキイの方へ向いて、簡単な挨拶を試みた。バリヤーチンスキイが挨拶を終つた時、コズロフスキイは立ち上がつて、かなりしつかりした聲で演説をはじめた。

『今回、陛下の勲慮に従ひまして、いかに本職が諸君の許を去ることに——諸君とお別れする事になりましたが、』と彼は言つた。『しかし本職は常に諸君と共にあるものと考へて戴きたい……「戦場の兵士は一人に非ず」といふ言葉が、いかに眞理であるかは、諸君の熟知してゐられるところでありませう。従つて、いかに本職が勤務上多くの褒賞を受けたにしても、また陛下の洪恩に依つて、い